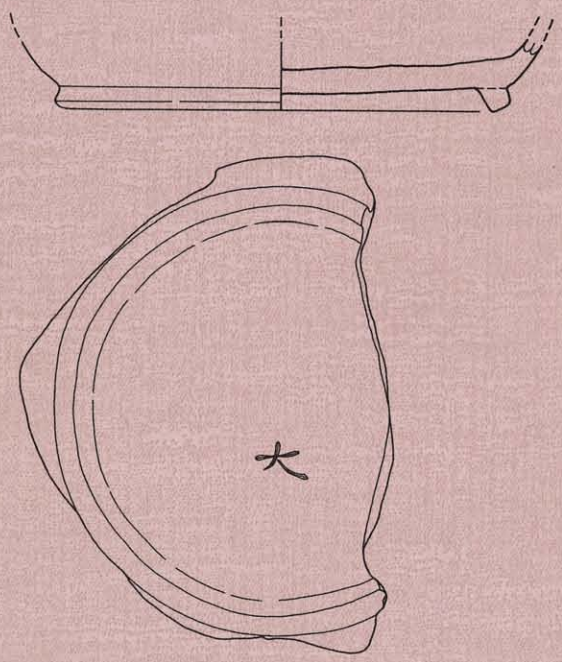
佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

上美都岐遺跡

佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ



1997.3

高知県佐川町教育委員会

上美都岐遺跡

佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ

1997.3

高知県佐川町教育委員会

調査区遠景(南上空より)

調査区全景(上空より)

A区北部，C区（上空より）

A区南部，B区（上空より）

SB−1(上空より)

SE−1(上空より)

A区完掘状態(北より)

SB−1(東より)

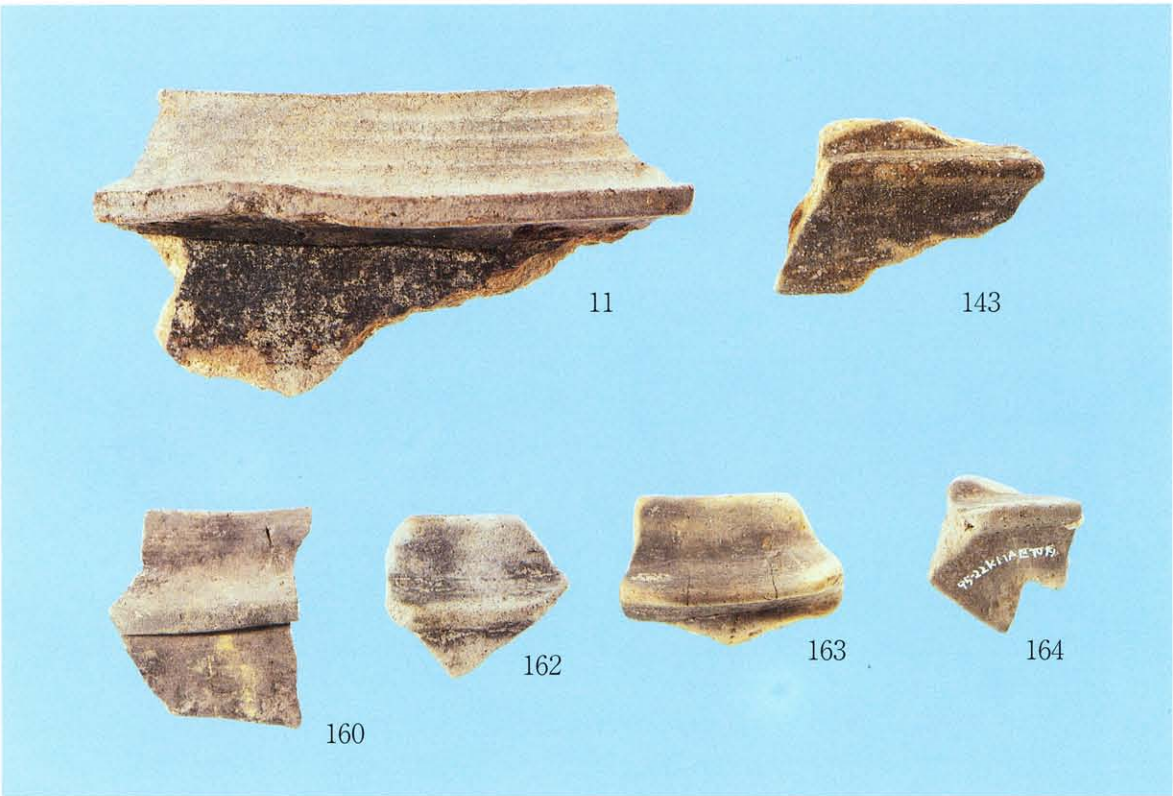
SK−1出土弥生土器(甕)

A区第Ⅳ層出土弥生土器(鉢)

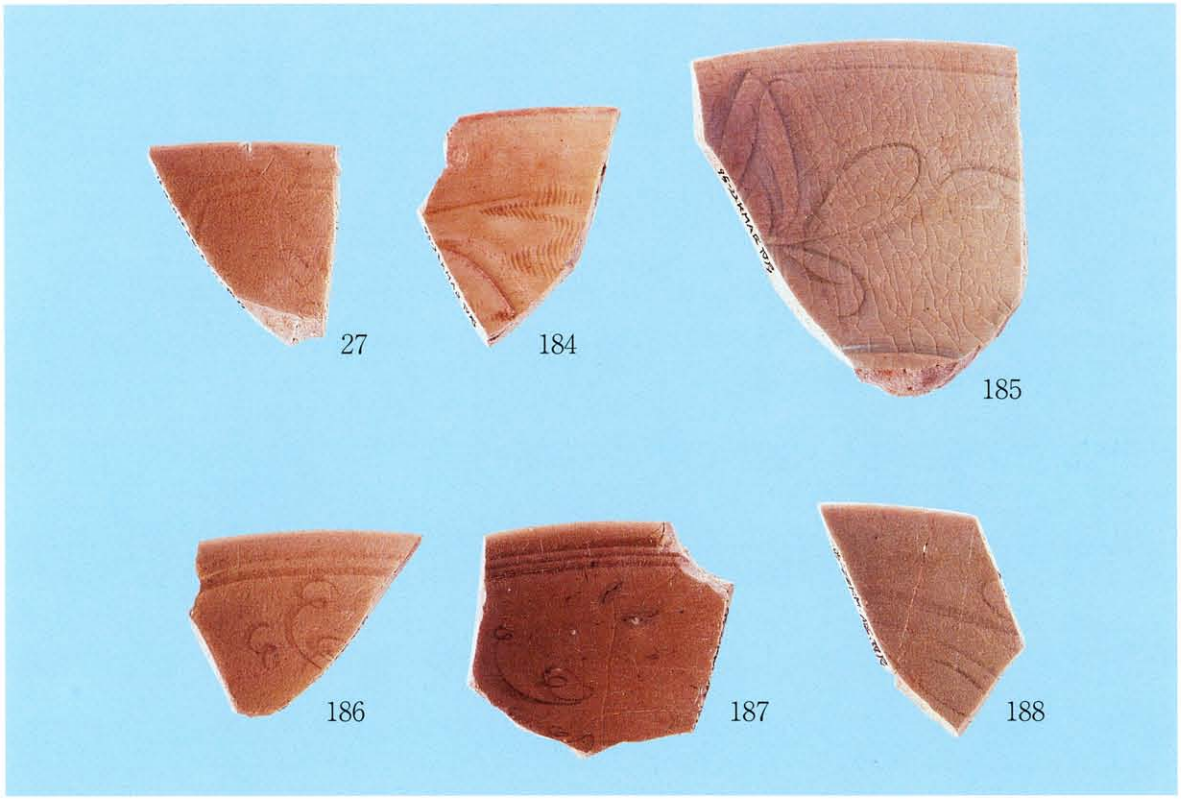
土師器(刻書土器)

須恵器(円面硯)

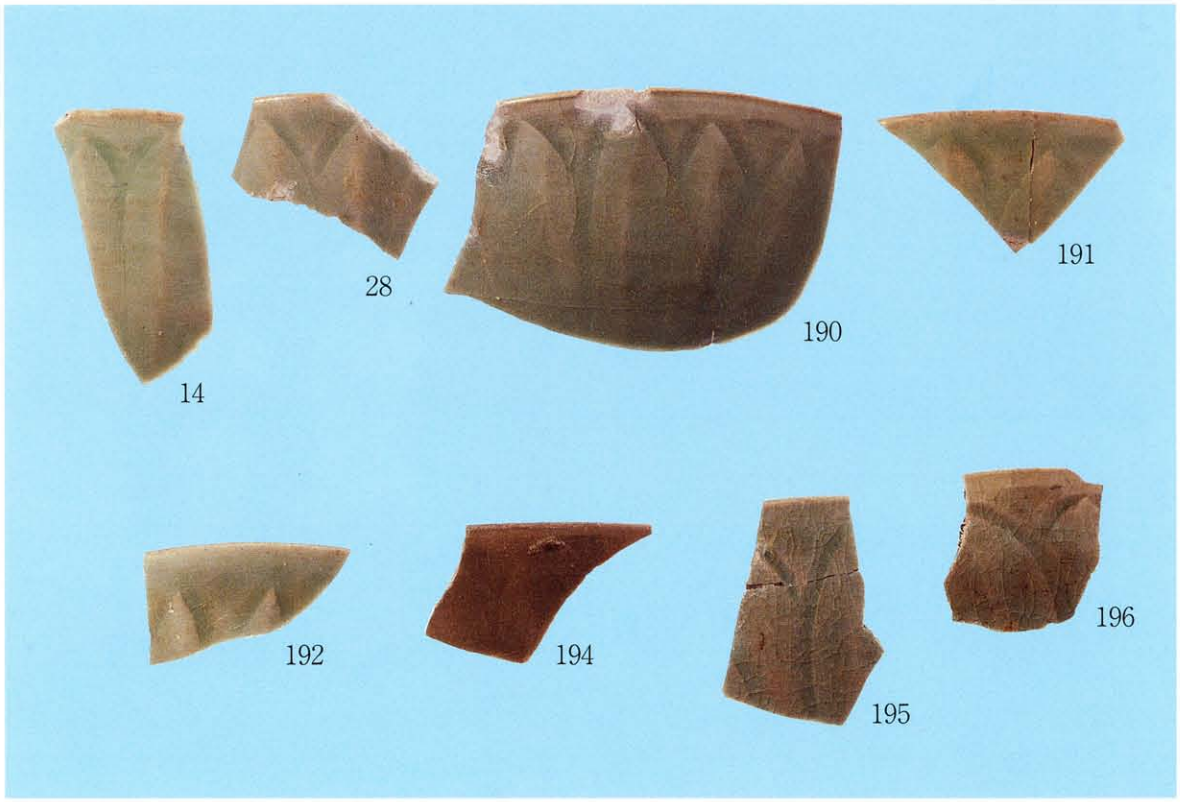
須恵器(台付椀)



瓦質土器・土師質土器(羽釜)



青磁(碗)内面



青磁(碗)外面

序

佐川町には縄文時代草創期の不動ガ岩屋洞穴遺跡（国史跡）を始めとして花ノ木・芝ノ端窯跡や中世佐川氏の居城松尾城跡など県内の重要な遺跡も数多く所在し，遺跡の宝庫ともいえます。今回の発掘調査は，佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴うもので，平成4年度の岩井口遺跡，平成5年度の二ノ部遺跡及び二ノ部城跡の調査に引き続いて実施したものであります。その結果が佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集として刊行する運びとなりました。

上美都岐遺跡は，「コクガ領」と地名に残る土地でもあり，当初より官衙に関連する遺構・遺物が出土するものと期待され，実際円面硯や刻書土器が出土し官衙関連遺跡であったことを強く印象付けました。また，鎌倉期の遺構・遺物も数多く出土し，これまで不透明だった当該期の歴史解明に大きな一歩になったと言えましょう。

本書の刊行により，「文教の町」佐川町の貴重な資料としてまた県内はもとより広く埋蔵文化財の研究の一助になれば幸甚の至りです。

最後に，本調査を担当していただいた高知県文化財団埋蔵文化財センター調査課第四係長廣田佳久氏を始め，御指導いただいた高知県教育委員会，（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター，そして文化財への深い御理解と御協力をいただいた中央耕地事務所，佐川町斗賀野土地改良区事務所，調査に御協力下さった地元関係者及び地域住民の方々に心より深く感謝申し上げます。

平成9年3月

佐川町教育委員会

教育長　藤田　冨起

例言

1. 本書は，佐川町が高知県の委託を受け平成7年度に実施した上美都岐遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は，高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと佐川町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は，佐川町教育委員会の依頼を受け，高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員廣田佳久（現在，同センター調査第四係長）が担当し，調査においては同センター主任調査員田上浩の補助を得た。調査・整理業務の事務，総括は佐川町教育委員会生涯教育係が当たり，平成7年度は同係長岡本直美，主幹田村英夫，社会教育係田村美紀，平成8年度は同係長堀見衛，主幹田村英夫，社会教育係田村美紀が行った。
4. 本書の執筆，写真撮影，編集等は廣田佳久が行った。
5. 遺構については，ST（竪穴状遺構），SB（掘立柱建物跡），SA（塀又は柵列跡），SK（土坑），SD（溝跡），SE（井戸跡），SF（畝状遺構），P（ピット）で表示し，各遺構ごとの通し番号である。また，掲載している遺構の平面図の縮尺は縮尺1/60，方位（N）は真北である。なお，掘立柱建物跡は縮尺1/200で模式図を掲載し，確認した柱穴は●，未検出の柱穴は○で表記している。
6. 遺物については，それぞれに縮尺を貼付しているが，原則として弥生土器，須恵器，土師器，土師質土器，瓦器，瓦質土器，中世陶磁器，輸入陶磁器，土製品，石製品などは縮尺1/3，石製品の内石臼と五輪塔については縮尺1/4で実測図を掲載している。実測図の番号は，各遺構ごとの通し番号で，図版の番号と一致している。
7. 発掘調査に当たっては，真北を基準とする任意のトラバース測量を実施し，測量成果に基づく基準点を使用した。標高は，工事用の水準点を基準として実施した水準測量の成果を使用し，海抜高を示す。
8. 調査に当たっては，高知県中央耕地事務所，佐川町斗賀野土地改良区事務所，高知県教育委員会，佐川町文化財保護審議会委員の方々並びに地元関係者の方々に全面的協力をいただいた。また，下記の方々に洗浄，注記，接合，復元，遺物の実測，トレースなど整理作業で協力していただき，同センターの諸氏からは貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

   中西純子　西内宏美　矢野雅
9. 出土遺物は，「95-22KM」と注記し，佐川町教育委員会において保管している。

目次

第Ⅰ章　調査の契機と経過
1. 契機と経過 1
2. 調査日誌抄 1
第Ⅱ章　遺跡の地理的，歴史的環境
1. 地理的環境 5
2. 歴史的環境 6
第Ⅲ章　調査の概要
1. 調査の方法 9
2. 調査区の概要 9
(1) A区 9
(2) B区 28
(3) C区 29
第Ⅳ章　遺構と遺物
1. 弥生時代 31
(1) 竪穴状遺構 31
(2) 土坑 31
(3) ピット 35
2. 古代 36
(1) 掘立柱建物跡 36
(2) 塀又は柵列跡 36
(3) 土坑 37
(4) ピット 37
3. 中世 38
(1) 掘立柱建物跡 38
(2) 塀又は柵列跡 40
(3) 土坑 40
(4) 溝跡 45
(5) 畝状遺構 48
(6) ピット 50
4. 近世以降 57
(1) 掘立柱建物跡 57
(2) 塀又は柵列跡 61

(3) 土坑 ……64
(4) 溝跡 ……75
(5) 井戸跡 ……77
(6) ピット ……77
第Ⅴ章　考察
1. 弥生時代について ……83
2. 古代について ……84
3. 中世について ……85
4. 近世以降について ……86
5. 結語 ……86

挿図

Fig. 1　周辺小字(ホノギ)図(S=1/10,000) ……2
Fig. 2　発掘調査風景1 ……2
Fig. 3　発掘調査風景2 ……3
Fig. 4　現地説明会風景1 ……3
Fig. 5　現地説明会風景2 ……4
Fig. 6　佐川町位置図 ……5
Fig. 7　周辺の遺跡分布図(S=1/25,000) ……7
Fig. 8　遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/10,000) ……9
Fig. 9　トラバースポイント配置図(S=1/2,000) ……10
Fig.10　調査区設定図(S=1/2,000) ……11
Fig.11　A区南部東壁セクション図 ……11
Fig.12　A区第Ⅱ層出土遺物実測図 ……12
Fig.13　A区第Ⅲ層出土遺物実測図 ……14
Fig.14　A区第Ⅳ層出土遺物実測図(弥生土器1) ……16
Fig.15　A区第Ⅳ層出土遺物実測図(弥生土器2) ……17
Fig.16　A区第Ⅳ層出土遺物実測図(須恵器1) ……18
Fig.17　A区第Ⅳ層出土遺物実測図(須恵器2) ……19
Fig.18　A区第Ⅳ層出土遺物実測図(須恵器3) ……20
Fig.19　A区第Ⅳ層出土遺物実測図(土師器，土師質土器) ……22

Fig.20 A区第Ⅳ層出土遺物実測図(瓦器，瓦質土器)……23
Fig.21 A区第Ⅳ層出土遺物実測図(東播系須恵器，備前焼，常滑焼)……24
Fig.22 A区第Ⅳ層出土遺物実測図(白磁，青磁)……25
Fig.23 A区第Ⅳ層出土遺物実測図(土錘)……26
Fig.24 A区第Ⅳ層出土遺物実測図(石製品)……27
Fig.25 B区西壁セクション図……28
Fig.26 C区トレンチセクション図……29
Fig.27 C区南壁セクション図……30
Fig.28 ST−1，SK−3·4，SD−1……32
Fig.29 SK−1·2……33
Fig.30 SK−1·2出土遺物実測図……34
Fig.31 SK−7，P−1·2出土遺物実測図……35
Fig.32 SB−1……36
Fig.33 SA−1，SK−10，P−3·4出土遺物実測図……38
Fig.34 SB−2……39
Fig.35 SB−3……39
Fig.36 SB−4……39
Fig.37 SB−5……39
Fig.38 SK−11·12……40
Fig.39 SK−19，SF−1〜5……42
Fig.40 SB−2，SK−11·15·18〜21出土遺物実測図……43
Fig.41 SD−1セクション図……45
Fig.42 SD−3セクション図……46
Fig.43 SD−6·7セクション図……48
Fig.44 SD−1〜3·7，SF−1〜4出土遺物実測図……49
Fig.45 P−5……50
Fig.46 P−5〜10出土遺物実測図……52
Fig.47 P−11〜26出土遺物実測図……56
Fig.48 SB−6……57
Fig.49 SB−7……57
Fig.50 SB−8……58
Fig.51 SB−7出土遺物実測図……58
Fig.52 SB−9……59
Fig.53 SB−10……59
Fig.54 SB−11……60
Fig.55 SB−12……60

Fig.56 SB−13 60
Fig.57 SB−14 60
Fig.58 SB−15 60
Fig.59 SB−8〜10, SA−13出土遺物実測図 62
Fig.60 SK−28 64
Fig.61 SK−28〜30出土遺物実測図 66
Fig.62 SK−29〜35, SD−8 67
Fig.63 SK−47〜51 71
Fig.64 SK−33·34·38〜40·48·52·53出土遺物実測図 72
Fig.65 SK−55〜57 73
Fig.66 SK−54〜57出土遺物実測図 74
Fig.67 SK−58·59 75
Fig.68 SK−60 75
Fig.69 SD−10·11セクション図 76
Fig.70 SE−1 77
Fig.71 SD−9·10, SE−1出土遺物実測図 78
Fig.72 P−27出土遺物実測図 79
Fig.73 P−28出土遺物実測図 79
Fig.74 P−29〜39出土遺物実測図 81

表

Tab. 1 トラバース測量成果一覧表 4
Tab. 2 斗賀野地区周辺の遺跡地名表 7
Tab. 3 掘立柱建物跡計測表 61
Tab. 4 塀又は柵列跡計測表 63
Tab. 5 弥生・古代・中世土坑計測表 68
Tab. 6 近世以降土坑計測表 88

図版

巻頭図版1 調査区遠景(南上空より)
調査区全景(上空より)
巻頭図版2 A区北部, C区(上空より)
A区南部, B区(上空より)
巻頭図版3 SB−1(上空より)
SE−1(上空より)
巻頭図版4 A区完掘状態(北より)
SB−1(東より)

巻頭図版5　SK−1出土弥生土器(甕)
A区第Ⅳ層出土弥生土器(鉢)
巻頭図版6　土師器(刻書土器)
須恵器(円面硯)
巻頭図版7　須恵器(台付椀)
瓦質土器・土師質土器(羽釜)
巻頭図版8　青磁(碗)内面
青磁(碗)外面
PL. 1　調査前全景(西より)
調査前全景(西より)
PL. 2　調査前A区全景(南より)
調査前A区全景(北より)
PL. 3　A区第Ⅳ層上面遺構検出状態(南より)
A区第Ⅳ層上面遺構完掘状態(南より)
PL. 4　A区遺構検出状態(南より)
A区遺構完掘状態(南より)
PL. 5　A区遺構検出状態(北より)
A区遺構完掘状態(北より)
PL. 6　A・B区遺構検出状態(南より)
A・B区遺構完掘状態(南より)
PL. 7　調査区遺構完掘状態(南上空より)
調査区遺構完掘状態(西上空より)
PL. 8　A区北部・C区遺構完掘状態(西上空より)
A区南部・B区遺構完掘状態(西上空より)
PL. 9　ST−1(北より)
ST−1(東より)
PL.10　SB−1検出状態(北より)
SB−1(北より)
PL.11　SB−1, SA−3(東上空より)
SA−1・2(南より)
PL.12　SB−2(北より)
SB−3(北より)
PL.13　SB−4(北より)
SB−5, SA−6(西より)
PL.14　SB−6, SA−7〜9(北より)
SB−7・8(北より)
PL.15　SB−7(北より)
SB−8(北より)
PL.16　SB−9, SA−13(北より)
SB−12, SA−14(北より)
PL.17　SB−14, SA−15〜17(北より)
SD−1(北より)
PL.18　SA−4, SD−6(北より)
SE−1(北より)
PL.19　SE−1(北より)
SE−1(北より)
PL.20　SK−1(北より)
SK−1(北より)
SK−2(東より)
SK−5(北より)
SK−8(東より)
SK−15遺物出土状態
P−5遺物出土状態
P−38遺物出土状態
PL.21　SD−1(北より)
SD−3(北より)
SD−6(東より)
SD−7(東より)
SB−7遺物出土状態(314)
SB−7遺物出土状態(315)
P−27遺物出土状態(356)
P−28遺物出土状態(357)
PL.22　SK−29, SD−8(北より)
SK−31(東より)
SK−30(北より)
SK−30(北より)
SK−32・33(北より)
SK−34・35(北より)
SK−38(北より)
SK−41〜45(北より)
PL.23　SK−47(北より)
SK−48(北より)

SK−49･50(北より)
SK−55(東より)
SK−57(北より)
SK−60(東より)
SD−10(北より)
SD−10(北より)
PL.24 弥生土器(甕)
弥生土器(甕)
PL.25 須恵器(杯，台付椀)
瓦器(椀，皿)
PL.26 須恵器(提瓶)
瓦質土器(羽釜)，土師質土器(羽釜)
PL.27 東播系須恵器(片口鉢)
備前焼(甕，壷，擂鉢)，常滑焼(甕)
PL.28 青磁(碗)内面
青磁(碗)外面
PL.29 染付(碗，大皿)，肥前系陶器(碗，皿)
近世陶器(皿，碗)，染付(皿)
PL.30 土製品(土錘)
石製品(石庖丁，両刃石斧，叩石)
PL.31 弥生土器，柱根，染付(碗)
PL.32 弥生土器(甕，鉢，高杯)，石製品(投弾，砥石，五輪塔)
PL.33 弥生土器(鉢，高杯)，須恵器(台付椀，壷)
PL.34 須恵器(円面硯，高杯)，土師器(杯)，弥生土器(甕，ミニチュア土器)，土製品(土錘)
PL.35 石製品(石臼)，磁器製品
PL.36 須恵器(杯身，円面硯)，土師器(杯)，土師質土器(杯)
PL.37 土師質土器(小皿，杯)，瓦器(椀，小皿)，白磁(皿)
PL.38 土師質土器(杯，小皿)，須恵器(杯身)，瓦器(椀)
PL.39 土師質土器(小皿，杯)，瓦器(椀，小皿)，陶器(皿)

付図目次

付図 1 A区遺構平面図(S=1/200)
付図 2 B区遺構平面図(S=1/200)

第Ⅰ章　調査の契機と経過

1. 契機と経過

上美都岐遺跡は，平成3年度に実施した佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う事前の試掘調査によって所在が確認された遺跡である。同調査では，岩井口遺跡，二ノ部遺跡も確認され，それらについてはすでに本調査が実施され，岩井口遺跡では弥生時代の竪穴住居跡や中世の在地領主のものとみられる館跡を確認し，二ノ部遺跡では弥生時代後期後半の集落と中世の集落を検出している。また，二ノ部城跡の堀と考えられる部分の調査も行った。なお，それについては『岩井口遺跡，二ノ部遺跡・城跡』(佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集)として報告している。

上美都岐遺跡は「コクガ領」の地名(ホノギ)が残る箇所で，試掘調査の際も古代の官衙関連とみられる掘立柱建物跡の柱穴が確認されており，何らかの官衙関連遺構が検出されるものとみられた。遺跡は南西方向に延びる丘陵の南面する裾部に位置し，遺跡の推定範囲は約16,000㎡に及ぶものとみられ，今回調査対象となったのはその内の約6,500㎡である。調査対象地は現在は段状の水田に開墾されており，試掘調査の際に遺構を確認した中段の水田を中心に調査区を設定し，発掘調査を行った。

調査は，平成7年度に佐川町が高知県(中央耕地事務所)の委託を受け，佐川町教育委員会が調査主体となり高知県教育委員会並びに(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと実施された。調査対象となったのは遺跡範囲の内工事によって影響を受ける部分である。調査期間は平成7年10月16日から平成8年1月16日までの実働55日間であった。

2. 調査日誌抄

1995年10月16日から1996年1月16日

10.16　本日より発掘調査を開始する。試掘調査の結果から遺構の存在が考えられる部分の全面発掘を行うこととし，上段の水田部分から表土層掘削を行う。なお，上段からA区，B区，C区と呼称した。

10.17　A区北部は表土層下で遺構が確認され，表土層掘削に並行して遺構検出を行う。A区北部の石垣に近い部分(岸側)は近世以降の影響がみられた。

10.18　A区北部の遺構検出を完了し，南部の表土層掘削並びに遺構検出を行う。南部を中心に弥生土器から中世の遺物を包含する土層(第Ⅳ層)上面で近世の遺構を検出する。

10.19　A区南部の表土層掘削と近世の遺構の検出作業を行う。

10.23　A区南部の遺構検出に並行して近世の遺構の写真撮影と一部遺構の調査も行う。また，B区の表土層掘削を開始する。

10.24　A区で検出した近世の遺構の調査とB区の表土層掘削を行うが，途中から雨となり調査を中止する。

10.25　昨日に引き続き近世の遺構の調査とB･C区の表土層の掘削を行う。

10.26　近世の遺構の調査とC区の表土層の掘削を行う。

10.27　近世の遺構の調査と測量を行うと共にC区の遺構検出を行う。遺物包含層と考えられる土層もみられたが，遺構と考えられるものは確認できなかった。

10.30　水準測量を行いトラバースポイントに標高を持ってくる。引き続き近世の遺構のレベル実測を行うと共にC区の遺構検出を行う。

10.31　A区第Ⅲ層の掘削並びにC区の遺構検出を行う。C区では結局明確な遺構は検出されず，中世以前の遺物包含層と考えていたものは近世のものと判断された。

11. 1　A区第Ⅲ層の掘削並びにB区の遺構検出を行った。B区で検出された遺構の大半はピットで，全般に径が小さく削平の影響を受けているものとみられる。

11. 2　A区第Ⅳ層の掘削並びにB区の遺構検出を行う。なお，C区南端部にトレンチを設定して土層の状況を確認したが，遺物包含層並びに遺構は検出されなかった。

11. 6　A区第Ⅳ層の掘削と基準点測量を行う。

11. 7　本日は雨天のため現場作業は中止した。

11. 8　A区第Ⅳ層の掘削とA区にグリッド杭の設置を行う。

11. 9　A区第Ⅳ層の掘削とローリングタワーの設置を行う。また，A区南部とB区にグリッド杭の設置を行う。

11.10　A区第Ⅳ層の掘削とB･C区にグリッド杭を設置する。

11.13　A区第Ⅳ層の掘削に並行して調査区全体の平板測量を行う。

11.14　A区第Ⅳ層の掘削と昨日の補足測量を行う。

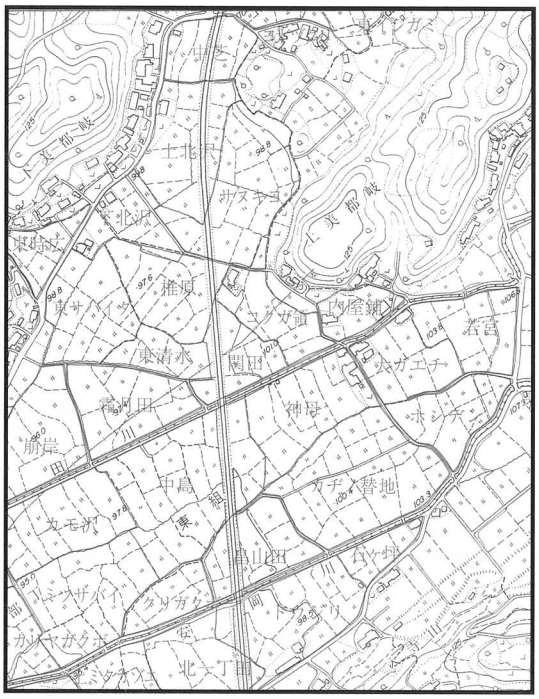


Fig.1 周辺小字(ホノギ)図 (S＝1/10,000)

11.15　A区第Ⅳ層の掘削に並行して検出遺構の略測図を作成する。

11.16　A区第Ⅳ層の掘削がほぼ完了したので，順次遺構検出に移る。遺構は黒ボク層（第Ⅴ層）上面で検出される。

11.20　A区南部の遺構検出に並行して検出遺構の略測図を作成する。

11.21　A区の残り部分の遺構検出を行った上で，調査区全体の遺構検出状態の写真撮影を行なう。

11.22　本日から本格的に遺構の調査に入る。まず，A区南部から開始する。調査遺構は古代の塀跡SA−1･2，弥生時代後期初頭のSK−1と同後期後半のSK−2などであった。特にSK−2からは比較的多くの遺物が出土した。

11.24　A区南部の遺構の調査を行う。P−16から土師質土器と瓦器がセットで出土し，P−38からは瓦器の小皿が検出された。並行してA区の土層断面の実測を行う。

11.27　A区南部の遺構の調査を行う。近世とみられるSE−1の調査を行い，砂岩を使用した石組の井戸であることが判明した。また，近世の遺構SK−52，SD−10の調査などを行う。

11.28　A区南部の遺構の調査を行う。引き続きSE−1の調査を行うと共にSK−18，SD−5等の調査も行う。また，並行してC区のトレンチの土層断面の実測を行う。

11.29　A区南部の遺構の調査を行う。SE−1の調査を完了する。掘方は検出面から約2mと比較的浅かっ

Fig.2 発掘調査風景1

た。近世の遺構SK−56・57，SF−1などの調査を行う。また，B区の土層断面図の実測も行う。

11.30 A区中央部の遺構の調査に移る。畝状遺構SF−2〜5，SK−21等の調査に並行して土手を掘削しST−1の全容確認に努める。また，C区の土層断面図の実測を行う。

12. 1 A区中央部の遺構の調査を行う。昨日に引き続き土手の掘削を行うと共にSK−19〜21等の調査も行う。

12. 4 A区南部の再精査を行い，新たに検出した遺構の調査を行った上で，A区北部からの遺構の調査に移る。遺構の大半は柱穴とみられるピットであった。

12. 5 A区北部の遺構の調査を行う。近世の遺構とみられるSB−7の柱穴とP−27・28から石臼が出土する。

12. 6 A区北部の遺構の調査に並行して遺構平面の実測を始める。近世の土坑SK−27〜34の調査を行う。

12. 7 A区北部の遺構の調査と遺構平面の実測を行う。調査遺構は昨日と同じく近世のものが多かった。

12. 8 A区北部の遺構の調査と遺構平面の実測を行う。近世の遺構を中心に調査する。

12.11 A区中央部の遺構の調査に移ると共に遺構平面の実測を行う。SD−3，SK−39〜43等の遺構の調査を行う。

12.12 A区中央部の遺構の調査と遺構平面の実測を行う。引き続きSD−3等の遺構の調査を行う。SD−3からは土師質土器，瓦器等の遺物に混じって石鍋の破片が出土した。

12.13 A区中央部の遺構の調査と遺構平面の実測を行う。ST−1，SD−1等の調査を行う。

12.14 A区の残りの遺構の調査を行い，B区の遺構の調査に移る。なお，A区中央部土手沿いで検出したSD−1の延長確認のため，調査区を拡張することとした。

12.15 SD−1の延長確認のためA区の土手の掘削を行う。

12.18 B区中央部の遺構の調査を行うと共に遺構平面の実測を行う。調査遺構はピットが中心で，そのほとんどが砂礫層を掘削して掘り込まれていた。

12.19 B区の残りの遺構の調査とC区で確認した土坑の調査を行い，全ての遺構の調査を一応完了する。明日から補足調査を行う。

12.20 補足調査として，A区SD−1の延長確認のため南側の土手の掘削を行うと共にB区にトレンチを設定して下層の土層確認を行った。また，遺構平面の実測も行う。

12.21 A区の土手の掘削を引き続き行うと共に遺構平面の実測も行う。また，SE−1の側面の実測を行う。

12.22 SD−1の調査並びに残りの遺構を調査し，すべての遺構の調査を完了する。

12.25 明日予定している空撮並びに完掘状態の写真撮影に備えて，調査区の精査を行うと共に残りの遺構平面の実測を行う。

12.26 産業ヘリコプターによる空撮並びに北と南のローリングタワーから完掘状態の写真撮影を行う。また，

Fig.3 発掘調査風景2

Fig.4 現地説明会風景1

B･C区のレベル実測も行う。これで，年内の調査を終了する。

1. 5　調査を再開し，B区のレベル実測を行った。

1. 8　午前中は雨天のため，午後からA区のレベル実測を行った。

Fig.5 現地説明会風景2

1. 9　A区中央部のレベル実測を行う。

1.10　A区南部のレベル実測を行う。

1.11　残りのレベル実測に並行して明日の記者発表のために調査区の清掃作業を行う。記者発表と現地説明会を残し調査を完了する。

1.12　午前11時から1時間30分に亙って記者発表を行う。刻書土器が注目される。

1.14　午後1時30分より3時まで現地説明会を開催する。小雨混じりの天候ではあったが，250名を越す見学者があった。

1.16　発掘器材の撤収及び関係機関へ発掘調査完了の連絡に行く。本日で発掘調査をすべて完了する。

Tab.1　トラバース測量成果一覧表　（路線名　上美都岐遺跡　測角点　TP－1～7　実測精度1/87,199）

測角点	方向角	正整方向角	水平距離	X	Y	座標点	標高
TP－7	TP－1	153° 48′ 20"		500.000m	500.000m	TP－1	102.575m
TP－1	TP－2	348° 21′ 32"	70.551m	569.100m	485.764m	TP－2	102.651m
TP－2	TP－3	31° 23′ 36"	21.316m	587.296m	496.868m	TP－3	102.814m
TP－3	TP－4	305° 57′ 44"	31.466m	605.774m	471.399m	TP－4	102.706m
TP－4	TP－5	16° 32′ 34"	36.023m	640.304m	481.656m	TP－5	102.570m
TP－5	TP－6	210° 43′ 06"	38.192m	607.473m	462.147m	TP－6	101.718m
TP－6	TP－7	184° 36′ 10"	26.318m	581.240m	460.035m	TP－7	101.583m
TP－7	TP－1	153° 48′ 20"	90.538m	500.000m	500.000m	TP－1	102.757m
TP－1	鉄塔A	262° 48′ 20"	1,722.756m	248.518m	-1209.227m	鉄塔A	
TP－2	鉄塔A	260° 28′ 06"	1,718.715m	248.518m	-1209.227m	鉄塔A	
TP－3	鉄塔A	259° 56′ 12"	1,732.753m	248.518m	-1209.227m	鉄塔A	
TP－4	鉄塔A	259° 10′ 42"	1,711.055m	248.518m	-1209.227m	鉄塔A	
TP－5	鉄塔A	258° 07′ 03"	1,727.909m	248.518m	-1209.227m	鉄塔A	
TP－6	鉄塔A	259° 03′ 49"	1,702.290m	248.518m	-1209.227m	鉄塔A	
TP－7	鉄塔A	259° 55′ 14"	1,695.429m	248.518m	-1209.227m	鉄塔A	

第Ⅱ章 遺跡の地理的，歴史的環境

1．地理的環境

佐川町は，高知県の中西部に位置し，行政区画では高岡郡に属す。東を日高村と土佐市，南を須崎市，西を葉山村，北を越知町の2市1町2村と境を接し，周囲を四国山地の支脈に囲まれた盆地となっている。集落は大きく黒岩，佐川，尾川，斗賀野，加茂に分かれており，東西13.2km，南北12.8km，総面積は101.21km²，人口は15,304人（平成9年1月現在）を有し，江戸時代以来代々の文教重視政策により宮内大臣田中光顕をはじめ，牧野富太郎そのほか多くの著名な文化人が輩出し，以来文教の町として知られている。また，江戸時代土佐の城主山内一豊から佐川領を賜った主席家老深尾和泉守重良に従って佐川に来た御酒屋以来の伝統を受け継いだ醸造が今日まで続けられており，土佐を代表する蔵元となっている。この他にも，国の史跡不動ガ岩屋洞穴遺跡，国の重要文化財大乗院薬師如来像，県の名勝である青源寺と乗台寺の庭園をはじめ多くの指定文化財を保有している。

この佐川町を地理的にみれば，東経133°17′，北緯33°30′に位置し，仁淀川の支流によって形成された沖積平野と四国山地の支脈である山間部からなる盆地地形をなす。河川でみると大きく二つに分かれ，一つが東流する日下川流域の加茂地区，残る一つが北流する柳瀬川流域の地区で，下流より黒岩・佐川・尾川・斗賀野地区がある。この二つの河川は日下川が伊野町，柳瀬川は越知町で仁淀川に流れ込む。また，柳瀬川には春日川（佐川地区），尾川川（尾川地区），斗賀野川（斗賀野地区）の支流がある。町の南方には蟠蛇森（769m），虚空蔵山（675m）の山々が連なり，そこを源とする柳瀬川の流れに添って地勢は北にやや傾斜している。一方，加茂地区は佐川地区の東側の山を源とする日下川の流れに沿って地勢はやや東に傾斜している。

今回調査の対象となった斗賀野地区は，丁度佐川地区の南に位置し，周囲を山に囲まれた盆地地形をなすが，佐川地区のそれに比べ裾野の広い虚空蔵山に抱かれており，開けた印象を受ける。この盆地には虚空蔵山を源とする斗賀野川及びその支流である伏尾川，幸田川があり，これら河川は北西方向に向かって流れており，地勢もそれに添って傾斜している。遺跡も標高が高い南部に多く，標高が低い北部では遺跡は確認されておらず，以前は低湿地であったものと考えられる。低湿地であったが故に良質の粘土が形成され，その粘土が古代の窯業（須恵器）さらには地場産業である瓦産業に結びついたのであろう。今回対象となった上美都岐遺跡は，この斗賀野盆地の東部に位置する。

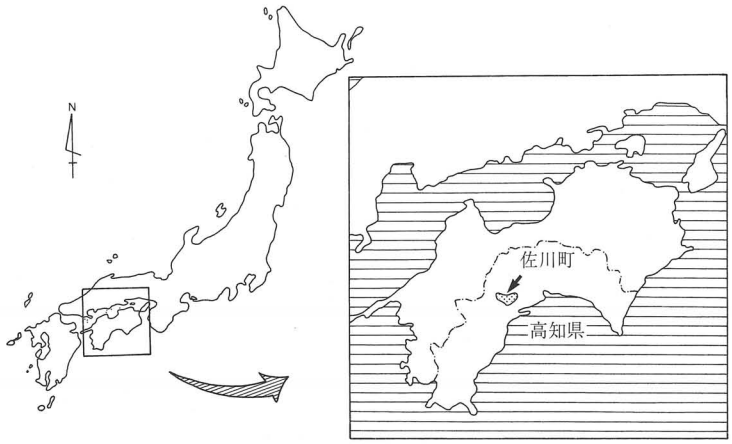


Fig.6 佐川町位置図

2. 歴史的環境

佐川町の歴史は国の史跡である不動ガ岩屋洞穴遺跡に始まり，現代のところ80遺跡が確認されている。高岡郡の中では土佐市に次ぐ遺跡数を誇る。高知県の場合，南国市を中心とする高知平野，中村市を中心とした四万十川下流域，安芸川，伊尾木川のある安芸平野に遺跡の大半が所在しており，それ以外にあって佐川町のように比較的多くの遺跡が確認されているところは少ない。また，奈良・平安時代の遺跡は先の地域にあっても比較的少なく，特に古代の須恵器の生産地は限定され県下的にみても少なく，10地区足らずが確認されているに過ぎず，その中の1地区が佐川町に所在することは注目すべきことであろう。以下，確認されている遺跡を中心に時代を追って佐川町の歴史をみてみることにする。

現在確認された中で最も古い遺跡は，先述の不動ガ岩屋洞穴遺跡である。昭和39・41年に調査され，縄文時代草創期から早期の遺物が検出された。特に，当時日本最古の土器の一つに考えられていた細隆起線文土器の出土は注目され，昭和53年12月19日国の史跡に指定されている。最近では，この土器より遡るとみられる豆粒文土器が十和村十川駄馬崎遺跡から出土しており，縄文時代では県下で2番目に古い遺跡となっている。不動ガ岩屋洞穴遺跡から約3km柳瀬川を下った左岸の岩陰からも縄文時代早期の押型文土器が発見されており，城ノ台遺跡として町指定の史跡となっている。その他にも柳瀬川の下流域の黒岩地区では黒原遺跡，坂東遺跡，西ノ芝遺跡，中ノ芝遺跡，岬遺跡などの縄文時代早期から前期にかけての遺跡や庄田遺跡，太田川遺跡などの縄文時代後期の遺跡が丘陵上や段丘上で発見されている。縄文時代後期の遺跡は佐川町各地区で確認されているが，大半が遺物単独の出土であり，その詳細については不明である。県内の昨今の発掘調査では，立地条件の決して良いとは思われない谷筋などからも遺構が検出されており，今後新たな発見も十分期待できるのではなかろうか。

弥生時代の遺跡では，今回の遺跡以外に佐川地区中央部で町道工事の際発見された假又遺跡がある。ここからは弥生時代前期後半の土器が出土し，現在のところ弥生時代では最も古い遺跡となっている。また，今回の調査で上美都岐遺跡から弥生時代後期初頭の遺構と遺物が出土し，当該期の遺構の存在も確認された。弥生時代の後期後半になると遺跡数が増え，岩井口遺跡，二ノ部遺跡などからは竪穴住居跡も確認され，集落の存在が明らかになった。一方，遺物の単独出土も多く，永野遺跡などからは中期頃の石庖丁が発見され，一ツ渕遺跡からは粘土採取の際弥生時代後期後半の土器が比較的まとまって出土している。ともかく弥生時代前期後半以降弥生時代を通じ居住地となっていたものと推察される。

この弥生時代を過ぎ古墳時代になると明瞭な遺跡はほとんど確認されていない。当然，古墳時代となり生活に変化が生じ，居住地が移動したことによる遺跡数の減少も十分考えられるが，全く居住しなくなったとは考え難く，今回出土した須恵器などは遺跡の存在を匂わすものかもしれない。ただ，古墳などは全く確認されていない。

律令制度になると徐々に遺跡数が増加してくる。現在確認されている遺跡は佐川地区の南東部に位置する永野から斗賀野地区にかけて集中している。この時代に関連して，当地には猿丸太夫の伝承が残っており，町史跡に指定された伝猿丸太夫の墓が現存する。墓は五輪塔となっているが，形態からみて近世初頭のものとみられ，直接関連したものとは考えられない。因みに，猿丸太夫は通称で弓削浄人広方といい道鏡の弟でもあり，宝亀元年(770)土佐に配流されたと伝えられるが，配流地は確かではなく，また，没したところも定かではない。ただ，墓のある場所は猿丸峠といわれその名が今日まで伝えられている。実

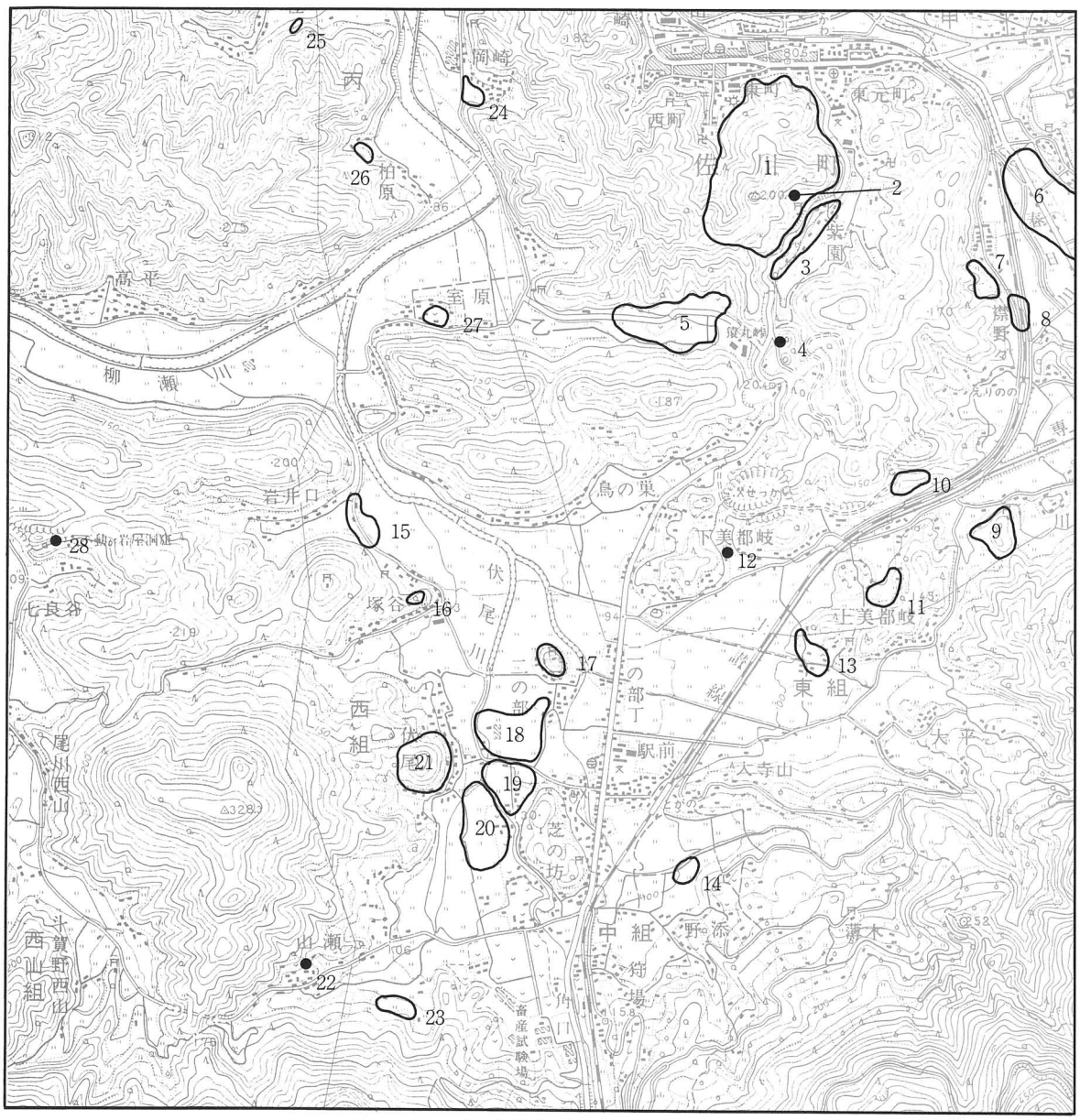


Fig.7 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

Tab.2 斗賀野地区周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	佐川城跡	中・近世	11	又屋敷遺跡	弥生	21	伏尾城跡	中世
2	深尾家の供養塔	近世	12	一ツ渕遺跡	〃	22	椎木谷遺跡	弥生
3	佐川土居跡	〃	**13**	**上美都岐遺跡**	**弥生～近世**	23	山瀬遺跡	古代
4	猿丸太夫伝説の墓	奈良(中世)	14	野添遺跡	中世	24	岡崎遺跡	弥生
5	サギノス遺跡	中・近世	15	岩井口遺跡	弥生・中世	25	桂遺跡	縄文
6	永野遺跡	弥生	16	塚谷遺跡	弥生	26	柏原遺跡	〃
7	花の木遺跡	古代	17	二ノ部城跡	中世	27	室原遺跡	〃
8	襟野々遺跡	〃	18	二ノ部遺跡	弥生・中世	28	不動ガ岩屋洞穴遺跡	〃
9	甑巌遺跡	中世	19	二ノ部南遺跡	中世			
10	芝ノ端窯跡	古代	20	芝の坊遺跡	古代			

際，遺跡として確認されているものは，芝ノ端窯跡，花ノ木窯跡，円能ケタキ窯跡，堂ヶ端窯跡など須恵器窯跡が4ヶ所と今回調査した上美都岐遺跡などがある。上美都岐遺跡の今回調査部分からは，奈良・平安時代の官衙関連遺構・遺物に混じって7世紀代後半の遺物も散見され，白鳳期の遺構の存在も考慮される。また，この遺跡のある斗賀野地区には先の「コクガ領」や「大坪」などの古代名称も残り，条理制が施行されていた可能性も考慮される。

中世以降は平成4・5年度に実施された遺跡詳細分布調査によってその数が増え，分布状況も比較的把握しやすく，「佐伯文書」を始めとしていくつかの古文書も現存し，人間の活発な活動が見受けられる。今回調査した上美都岐遺跡からは12世紀後半から13世紀前半を中心とする遺構・遺物が確認され，岩井口遺跡，二ノ部遺跡より遡る遺跡の存在が明らかになった。次に現況で最も確認しやすい城館跡をみてみると，現在21ヶ所が確認されており，時期的には南北朝時代からみられるが数的には戦国期のものが多い。各地区に残存し，黒岩地区には平野城跡，菖蒲城跡，黒岩城跡，陣ヶ奈路城跡，八幡城跡，フスボリ城跡，中野城跡，佐川地区には中山館跡，城ノ台城跡，神明山城跡，三野土居跡，沖之古城跡，佐川城跡，松尾城跡，加茂地区には長竹城跡，斗賀野地区には二ノ部城跡，伏尾城跡，木陰山城跡，尾川地区には尾川城跡，小森城跡，城台山城跡がそれぞれ所在する。このうち城主が伝えられるものもあり，黒岩城主の片岡氏，松尾城主の中村氏，尾川城主の近沢氏，二ノ部（斗賀野）城主の米森氏などが知られている。中でも，松尾城は佐川四郎左衛門に始まり，津野氏の縁族佐川越中守，中山信家，中村越前守信義，片岡出雲，久武内蔵介と城主が次々と代わっており，佐川城に久武氏が移るまで佐川の中心的な城であった。現状では二つの郭を中心に，二ノ段，三ノ段，物見台，竪堀20条以上，堀切14条などが残存し，他の城跡とは比較にならないほどの規模を誇っている。なお，どの遺構がどの城主の代に造られたものかは未調査のため定かではない。一方，文献から中世をみてみると元弘3年（1333）に黒岩氏の名が見え，南北朝時代には佐伯文書に佐河（佐川）四郎左衛門入道と度賀野又太郎入道が南朝方としての姿を現す。これ以外にも城跡の周辺でこの時期の集落遺跡が散見される。このように展開してきた佐川も元亀2年（1571）には西進してきた長宗我部氏に降伏し，筆頭家老久武氏を中心とした体制に組み込まれ，城も松尾城から佐川城に移り，中世も最終段階に入ってくる。天正17・18年（1589・1590）には長宗我部氏による検地が行われ，それぞれ所領が決められるが，慶長5年（1600）長宗我部氏が滅亡し，翌慶長7年（1601）土佐24万石の城主山内氏の主席家老深尾氏が佐川入城により，中世の終焉そして近世へと移り変っていく。

江戸時代は深尾氏の佐川領1万石として繁栄を遂げていく。遺跡としては佐川城が元和2年（1616）一国一城令により廃城となるが石垣など近世の城の面影を留め，土居跡（通称御土居）も当時のものとみられる石垣が現存する。その他，中世から続く寺跡の所在を各地区で確認することができる。

以後，明治22年4月市町村制施行により佐川，斗賀野，尾川，黒岩，加茂村ができ，同33年に佐川村が町制を施行し，昭和29年には賀茂村を除く1町3村が合併，同30年に賀茂村の一部を合併し今日に至っている。

参考文献

『佐川町史』上巻　佐川町　1982年
『高知県地名大辞典』　角川書店　1986年

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

今回の調査対象地区は平成3年度に実施した県営圃場整備事業に伴う事前の試掘調査で遺構を確認していることから，試掘調査した箇所の水田（B区）とその上段の水田（A区）および下段の水田（C区）を全面発掘調査することとした。ただし，C区の南部については調査範囲が広範囲に及ぶため試掘トレンチの状況によって調査区を拡張することとした。

調査は任意の基準点を新たに設け，それを基にトラバース測量した上でグリットを組み，標高もその際行った水準測量の結果を使用した。なお，その測量成果はTab.1に記している。

また，調査では平成3年度に試掘調査を行った水田をB区，その上段の水田をA区，そして下段の水田及び畑地をC区と呼称した。発掘対象面積は約6,500㎡で，発掘調査面積はA区が1,218㎡，B区が736㎡，C区が864㎡で，最終的な発掘調査面積は2,818㎡であった。

2. 調査区の概要

今回の調査区は，調査区ごとの比高差が大きく，現地表面の標高は，A区が約102.40m，B区が約101.40m，C区が約101.05mであった。特に，A区とB･C区との比高差は大きく，遺物包含層や遺構の残存状況に如実に表れていた。具体的には，A区で認められた遺物包含層（中世の遺物を中心に弥生土器や須恵器を含む）はB区の一部でしか確認できなかった。遺構も全般に浅く後世の削平や整地の影響がみられた。また，A区においても，山際は表土層直下が遺構検出面となっているのに対し，途中から確認され始める遺物包含層（中世の遺物を中心に弥生土器や須恵器を含む）は岸際では34cmの厚さに堆積しており，旧地形は西に向かって緩やかに傾斜していたことが判明した。以下調査区ごとに土層の状況並びに遺物包含層出土遺物について記す。なお，遺物包含層から出土した遺物の内復元図示できたのは，A区から出土した遺物のみであった。

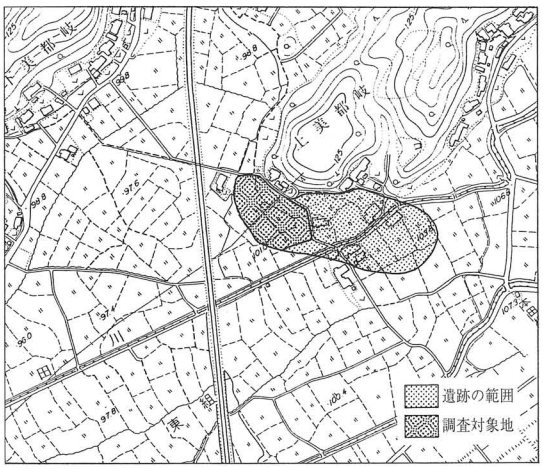


Fig.8 遺跡の範囲と調査対象区域図（S=1/10,000）

（1） A区

A区は，調査対象地区の東端で，幅8～19m，長さ75～90mを測り，南北に細長く地形に沿ってやや湾曲する調査区である。先述のとおり，山際は近世の削平と整地の影響を受け，遺物包含層の大半はなく，表土層直下が遺構検出面となっていた。一方，岸側に向かうに従って徐々に遺物包含層の堆積が認められ，近世の遺構は第Ⅳ層上面，中世より遡る遺構については第Ⅴ層並びに第Ⅵ層上面で検出できた。なお，表土層直下で検出されたものについては，検出面が先の土層以外に第Ⅶ層および第Ⅷ層上面となっている遺構もみられた。特に，第Ⅷ層は調査区北部の山際で顕著に認められた。

A区で認められた基本層序並びに出土遺物は以下のとおりである。

層序

第Ⅰ層　表土層（灰色粘質土層）

第Ⅱ層　灰白色ないし白色砂岩粒を多量に含む褐色粘質土層

第Ⅲ層　暗灰白色ないし白色砂岩粒を多量に含む褐色粘質土層

第Ⅳ層　暗褐色粘質土層

第Ⅴ層　黒色粘質土層

第Ⅵ層　黄褐色火山灰層

第Ⅶ層　褐色粘質土層

第Ⅷ層　黄褐色岩層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅳ層から第Ⅷ層上面であった。第Ⅴ層上面での検出は第Ⅳ層と色調が似ているためやや無理ではないかとみられたが，今回の場合は純然たる黒色の土層に対し遺構がやや薄い色調を呈しており，比較的容易に検出することができた。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～25cmを測る。現況は水田であった。

第Ⅱ層は近世，中でも19世紀以降の遺物包含層であり，整地による堆積層とみられる。全般に遺物量は少なかったが，削平を伴っているものとみられ，須恵器から近世陶磁器類までが出土している。

第Ⅲ層も近世の包含層であるが，堆積状況からみると近世でも比較的古い時期のものではないかと考えられる。第Ⅱ層と同じく須恵器から近世陶磁器類までが出土している。

第Ⅳ層は今回の調査の中心となる遺物包含層である。出土遺物をみる限り中世段階での所産と考えられる。南西部を中心に比較的多くの遺物を包含しており，弥生土器から14世紀段階までの遺物が出土した。下層にそれ以前の包含層が確認されないことを考えれば，古代以前の遺物包含層を削平したものと考えられる。

第Ⅴ層は火山灰が風化，腐食し土壌化した土層（黒ボク層）で南部を中心に認められ，その部分での遺構検出面となっている。

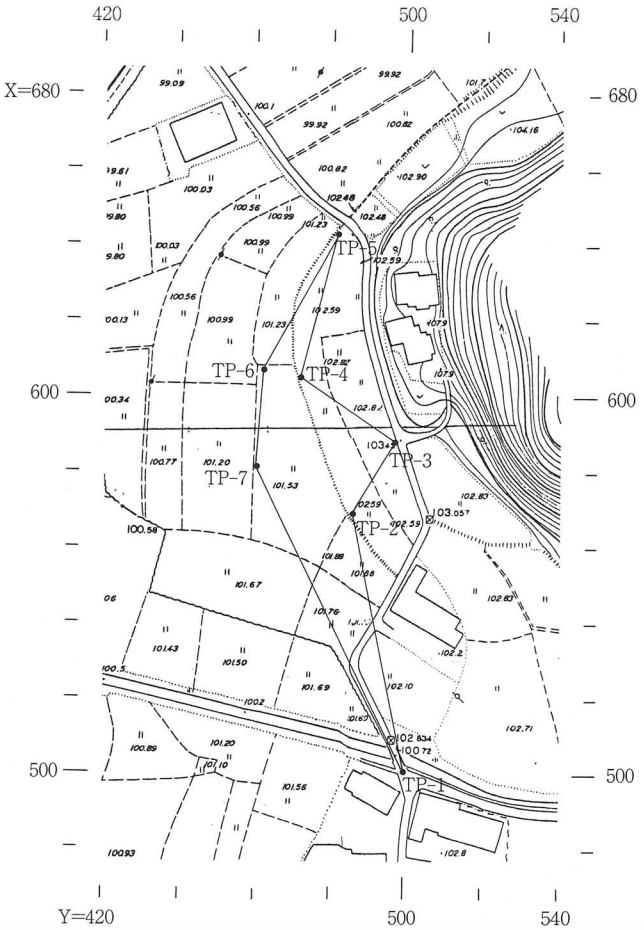


Fig.9 トラバースポイント配置図（S=1/2,000）

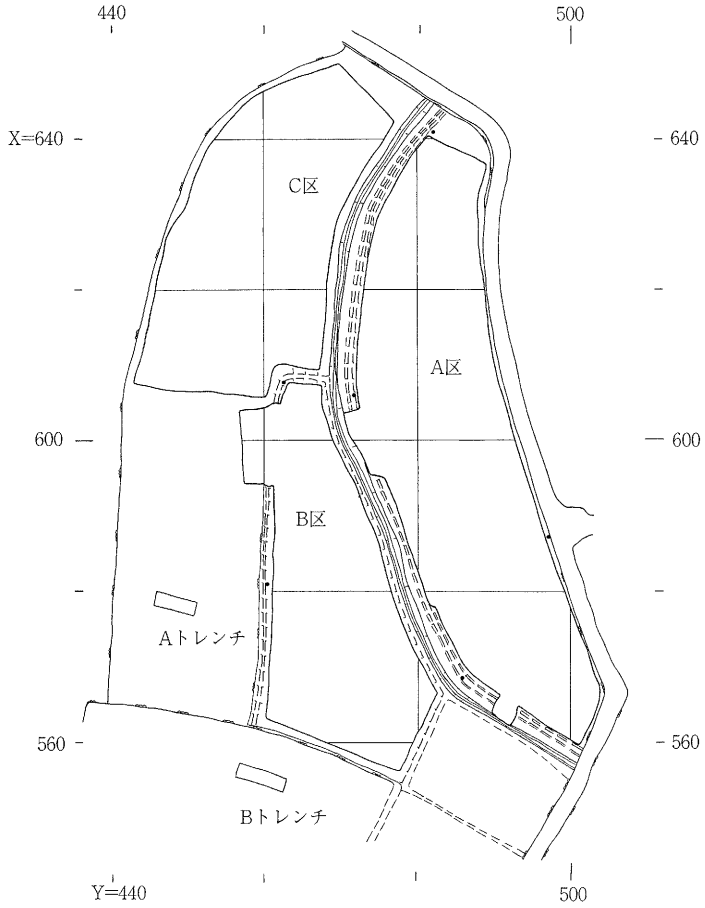


Fig.10 調査区設定図（S=1/2,000）

第Ⅵ層は約6,300年前に降下した火山灰（鬼界アカホヤテフラ）の堆積層であり，B･C区でも確認されている。

第Ⅶ層は自然堆積層で，第Ⅵ層が削平されている部分の遺構検出面となっている。

第Ⅷ層が基盤の岩盤層であり，調査区北部の山際を中心に検出され，その部分の遺構検出面となっている。

第Ⅱ層出土遺物

第Ⅱ層は山際において第Ⅲ層および第Ⅳ層を削平しており，土層中からは古代から近世にかけての遺物が出土している。

須恵器（Fig.12－1～7）

1は杯蓋で，つまみが欠損する。口縁部はやや丸味のある天井部から斜め外下方に下り，端部を下方に屈曲さす。天井部外面はほぼ全面に回転ヘラ削り調整を施した上で回転ナデ調整を加える。内面はハダ荒れが著しい。口径13.1cmで内外面とも暗灰色を呈する。2･3は杯身で，口径は，2が12.3cm，3が11.4cmを測る。2の口縁部は平らな底部から斜め外上方に真直ぐ上がり，端部を細く仕上げる。3の体部は底部からやや丸味を持って上がり，口縁端部を細く仕上げる。2の底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整を加える。2点とも焼成がやや不良で，内外面とも灰白色を呈する。4･5は台付長頸壷の胴部の破片とみられる。2点とも上位三分の一で屈曲し，

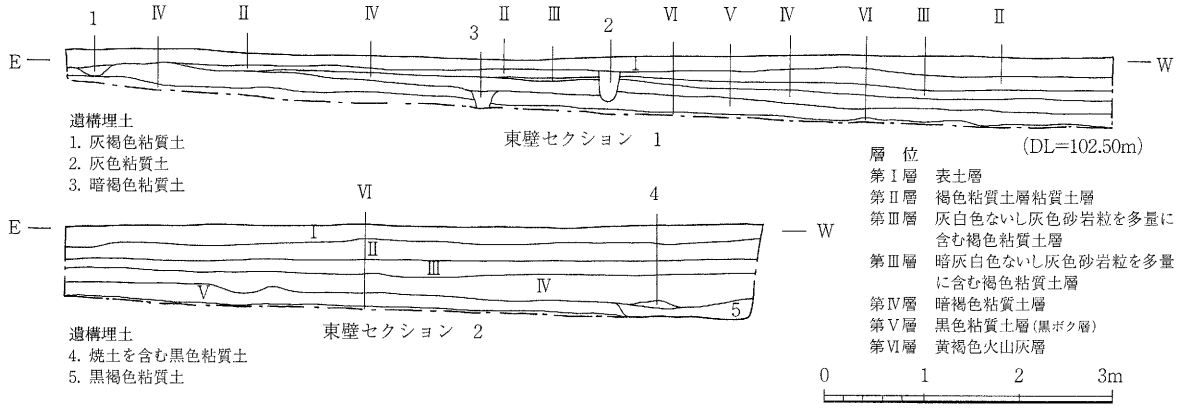


Fig.11 A区南部東壁セクション図

その頂点とやや上に1条の沈線を巡らし，5はその間にハケ状工具による刺突文を施す。また，4の下胴部外面には回転ヘラ削り調整，5には回転カキ目調整が施される。双方とも焼成は良好で，灰色を呈する。6･7は甕の口縁部の破片である。6は口径18.6cmを測り，口縁部は肩部から外反気味に上がり，端部は内傾する凹面をなす。口唇部から口縁部外面にかけてオリーブ灰色の自然釉がかかる。7の口縁部はほぼ真直ぐ外上方に上がり，端部は内傾する平面をなす。双方とも焼成は良好である。

土師器（Fig.12－8）

小皿で，口径9.7cm，器高1.6cm，底径8.6cmを測る。口縁部はつまみ上げによるものとみられ短く，端部は細い。底部外面は回転ヘラ切りによるものとみられる。内外面ともにぶい橙色を呈し，焼成は良いが器面は摩耗する。

土師質土器（Fig.12－9）

小皿で，口径8.1cm，器高1.3cm，底径6.5cmを測る。口縁部は斜め外方に短く上がり，端部は丸味がある。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整を施し，底部外面は回転糸切りである。

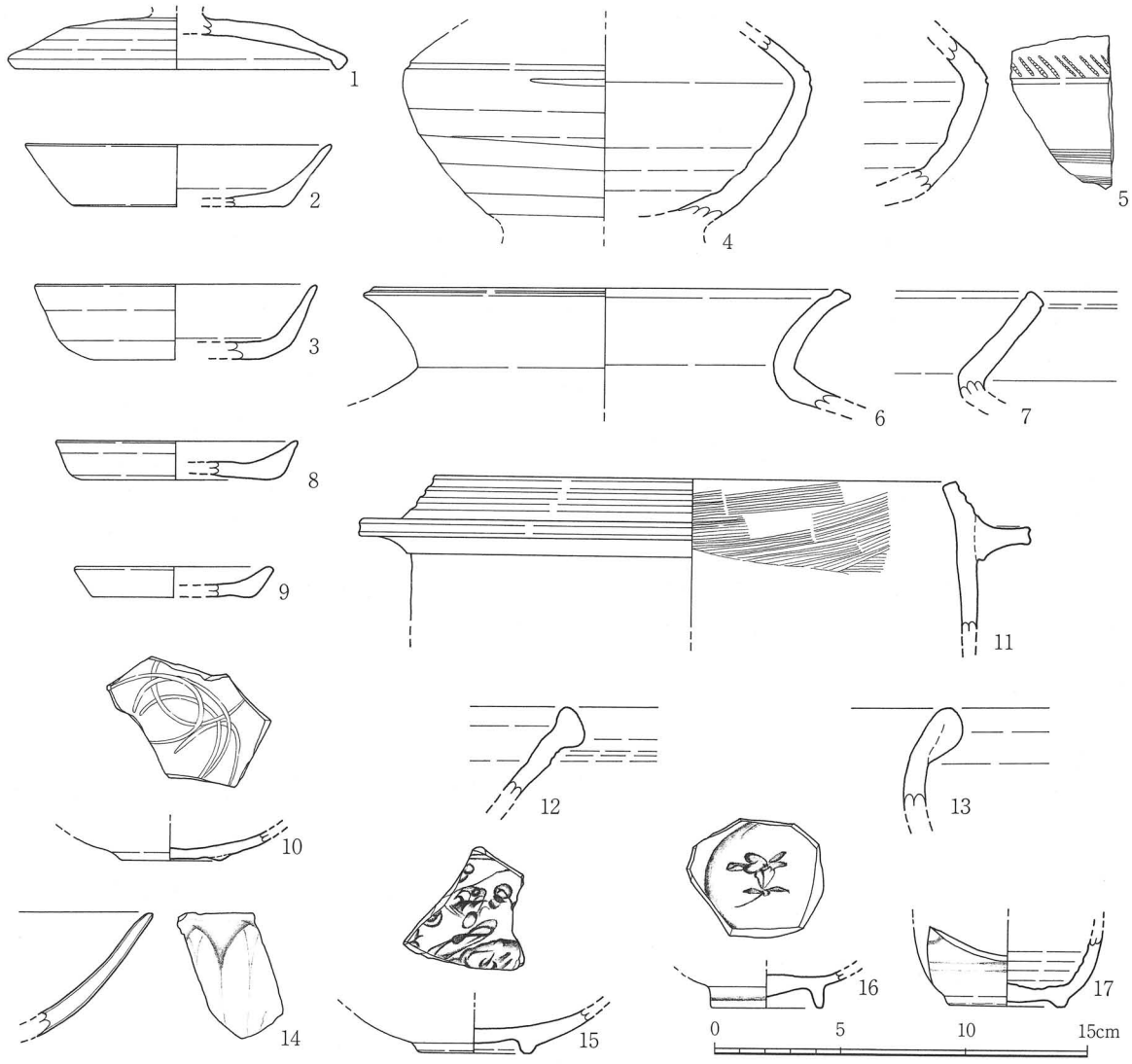


Fig.12 A区第Ⅱ層出土遺物実測図

瓦器（Fig.12－10）

椀の底部の破片で，底径4.1cmを測る。丸味のある底部外面には断面三角形の小さな高台が付く。連結輪状のヘラ磨きが5条認められる。焼成不良で，内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

瓦質土器（Fig.12－11）

羽釜で，口径21.0cmを測る。口縁部は内傾し，外面には3条の凹線がみられ，胴部はほぼ真下に下る。口縁部と胴部の境には水平に延びる鍔が付く。口縁部内面にヨコ方向のハケ調整を施した後胴部内面にナデ調整を加える。

東播系須恵器（Fig.12－12）

片口鉢の口縁部の破片で，口縁部はほぼ真直ぐ斜め上方を向き，端部を上下に拡張する。口縁部には重ね焼きの痕跡が認められる。焼成は良好で，内外面とも灰色を呈する。

備前焼（Fig.12－13）

甕の口縁部の破片で，玉縁状をなす。焼成は良好で，黄灰色を呈する。

青磁（Fig.12－14）

碗の口縁部の破片で，外面には鎬蓮弁文がみられる。器面には0.5mmの厚さに釉が施され，明オリーブ灰色を呈する。

染付（Fig.12－15・16）

2点とも碗の底部の破片である。15は底径4.6cmを測り，底部は高さ0.4cmの削り出し高台となる。見込には草花文が施され，畳付は釉ハギとなる。16は底径4.5cmを測り，底部は高さ0.9cmの削り出し高台となる。見込は緩やかに盛り上がる饅頭心タイプといわれる系統のもので1条の界線と折枝花文が施され，器面には乳白色の釉が施される。

近世陶器（Fig.12－17）

小壷の胴部から底部にかけての破片で底径4.8cmを測る。底部は高さ0.4cmの削り出し高台となる。胴部外面には2条の界線と円弧状の文様がみられる。また，外面には透明の釉が施される。

第Ⅲ層出土遺物

第Ⅲ層は，山際で第Ⅳ層を掘削しており，土層中からは弥生時代から近世にかけての遺物が出土している。

須恵器（Fig.13－18～22）

18は，杯蓋のつまみで，擬宝珠形を呈する。外面は回転ナデ調整，内面にはナデ調整がみられる。19･20は杯身で，19は口縁部と体部の破片で，口縁部は斜め外上方を向き，端部は丸く仕上げられる。20は底径6.8cmを測る。体部は平らな底部から外上方を向く。底部外面は回転ヘラ削りで，他は回転ナデ調整を施す。21は高杯の脚台部とみられる破片で，ハの字形を呈する脚基部が残る。器面は回転ナデ調整を施す。22は甕で，口縁部から肩部の一部が残存する。口縁部は外反気味に短く上がり，端部は内傾する平面をなす。肩部は口縁部から大きく屈曲する。口縁部は回転ナデ調整，肩部外面は回転カキ目調整の後タテ方向のタタキ，同内面は同心円文のタタキをそれぞれ施す。

瓦器（Fig.13－23）

椀の口縁部の破片で，口縁部外面にはヨコナデ調整の痕が明瞭に残る。残部にはヘラ磨きの痕はみられない。

東播系須恵器（Fig.13－24）

片口鉢の口縁部の破片で，注ぎ口の一部が残存する。口縁部は斜め外上方を向き，端部は上方に拡張する。また，端部には自然釉の付着がみられる。

備前焼（Fig.13－25）

擂鉢の口縁部の破片で，やや内傾した端部を上方に大きく拡張する。内面には4条の条線が残存する。

白磁（Fig.13－26）

皿で，口径12.6cm，器高2.3cm，底径6.8cmを測る。口縁部は内湾気味に短く上がり，端部は細く仕上げられる。底部は高さ0.3cmの低い削り出し高台となり，畳付は釉ハギが行なわれる。

青磁（Fig.13－27・28）

2点とも碗の口縁部の破片で，27の内面には劃花文，28の外面には鎬蓮弁文が施され，釉は27が0.5㎜の厚さ，28が0.6㎜の厚さに施され，27は灰オリーブ色，28は明オリーブ色を呈する。

近世陶磁器（Fig.13－29・30）

29は稜花皿で，短く内湾気味に上がる口縁部の一部が残存する。30は猪口で，口径5.1cmを測る。外面には草花文，見込には2条の界線がそれぞれ施される。

石器（Fig.13－31）

約三分の一は欠損するが，砂岩をほぼ球形に加工したもので，投弾ではないかとみられるものである。径4.8～5.8cm，残部の重さは114.9gである。遺構からは確認されなかったが，第Ⅳ層中からも同形態のものが5点（209～213）出土している。

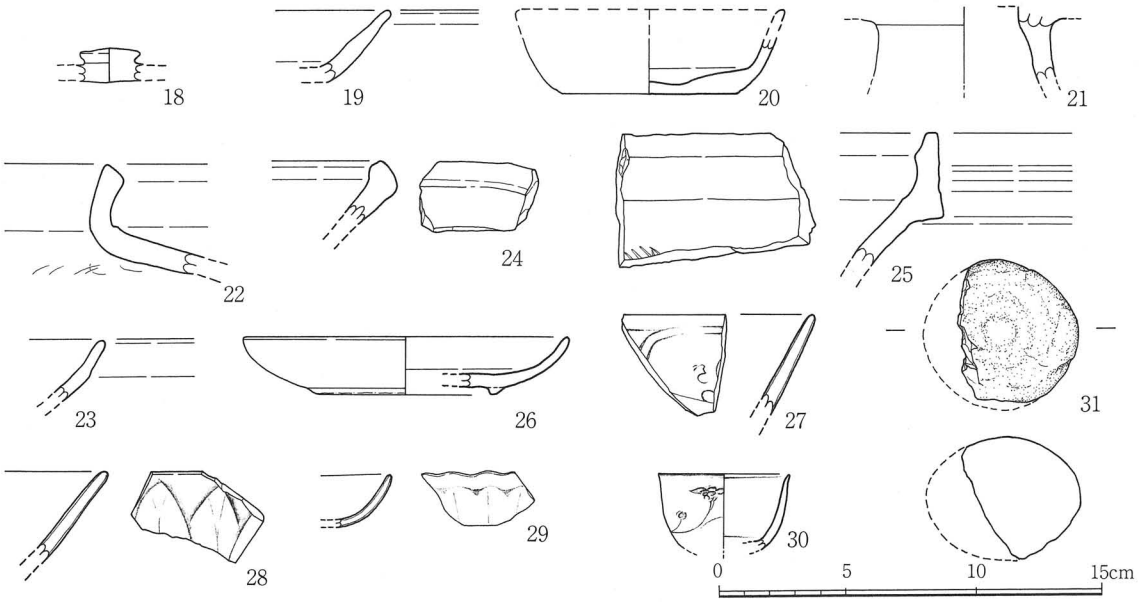


Fig.13 A区第Ⅲ層出土遺物実測図

第Ⅳ層出土遺物

中央部から南部にかけて確認され，弥生時代から中世の遺物までが出土している。

弥生土器（Fig.14・15－32～63）

32～37は壷である。32は口径11.3cmを測り，口縁部は内湾気味に短く上がり，端部を内側に小さく拡張し，胴部は内湾気味に下る。焼成は非常に良く，内外面とも灰黄色を呈す。33は口径19.7cmを測り，口頸部はラッパ状に開き，胴部は口縁部から屈曲して下る。内外面ともハケ調整がみられ，口縁部はヨコナデ調整を加える。34は二重口縁壷で，口径18.0cmを測る。頸部外面にはタテ方向のハケ調整，口縁部外面にヨコナデ調整が認められる。焼成はやや不良で，器面は摩耗する。35は複合口縁壷とみられるもので，頸部が残存する。内外面にナデ調整を施し，肩部との境には粘土紐を貼付した上に棒状工具による刺突文を加える。36は直立する頸部に大きく開く口縁部が付くものである。焼成が不良で，内面橙色，外面明赤褐色を呈し，器面は摩耗が著しい。37は肩部の破片で，外面には断面三角形の凸帯を貼付する。焼成は良く，内外面ともにぶい橙色を呈する。胎土には0.5～1.0cm大の砂粒並びに雲母片を含む。38～45は甕で，口径は38が14.9cm，39が21.2cm，40が15.8cm，41・42が17.5cm，43が17.8cm，44が21.0cm，45が12.5cmを測り，口縁部の形態により直線的に上がるもの（38・39），外反気味に上がるもの（40～44）及び短く延びる頸部から内傾するもの（45）に分類できる。この内，端部が下方に若干拡張されたもの（42・43）と上方に拡張されたものがある。39は胴部外面にタテ方向のハケ調整，40は胴部外面にタタキの後にヨコ方向のハケ調整，41は口縁部外面にヨコ方向の粗いハケ調整，42・43は口縁部内外面にハケ調整，44は口縁部内面にヨコ方向，肩部外面にタテ方向のハケ調整，45は胴部内面にヨコ方向のヘラ削りがそれぞれみられる。45は所謂吉備型甕で，胎土には0.5～1.0mmの砂粒並びに雲母片を含む。また，44の口縁部外面には煤の付着がみられる。46～51は壷及び甕の底部で，すべて平底となり，底径は46が4.8cm，47が4.3cm，48が9.8cm，49が5.2cm，50が4.4cm，51が4.8cmを測る。46はやや上げ底気味の底部で，内面にはハケ調整の後にナデ調整を施す。47は胴部が大きく開き，外面にはヘラ磨きがみられる。48は胴部が大きく張り出す底部から外上方に上がるものである。49は粘土紐を貼付し，平らな底部を造り出している。50は外面にタタキの後にタテ方向のハケ調整，内面に指ナデ調整がみられる。51は外面にタテ方向のヘラ磨き，内面にハケ調整の後にナデ調整，部分的に指ナデ調整を施す。52～58は鉢である。52は小形の鉢で，口径11.6cmを測る。内面にはハケ目，外面には部分的にタタキ目が残る。53は椀状をなすもので，口径6.6cm，器高9.5cm，底径9.2cmを測る。口縁部は丸味のある底部から内湾して上がる。焼成は不良で，器面は浅黄色を呈する。54～56はボタン状の底部を有するもので，底径は54が5.8cm，55が5.6cm，56が3.0cmを測る。54の底部外面にはタタキ目，56の体部内面にはハケ目がみられる。57は丸底に近いもので，底径3.7cmを測る。58は丸底のもので，外面にはタタキ目が残る。59～63は高杯で，杯部は欠損する。59の底径は14.5cmを測る。形態的にはすべて外下方に下る脚台部に大きく開く裾部が付いたものである。一方，成形的には，脚台部上位三分の一が中実となるもの（59・60），脚台部上位三分の二が中実になるもの（61・62），脚台部の大半が中実になるもの（63）がみられる。透孔は59が4方向，60・61が3方向に穿たれる。また，59・60の脚台部内面にはしぼり目，59・62の裾部内面にはハケ目，59・63の脚台部外面にはヘラ磨き，61の外面にはハケ調整がそれぞれみられる。

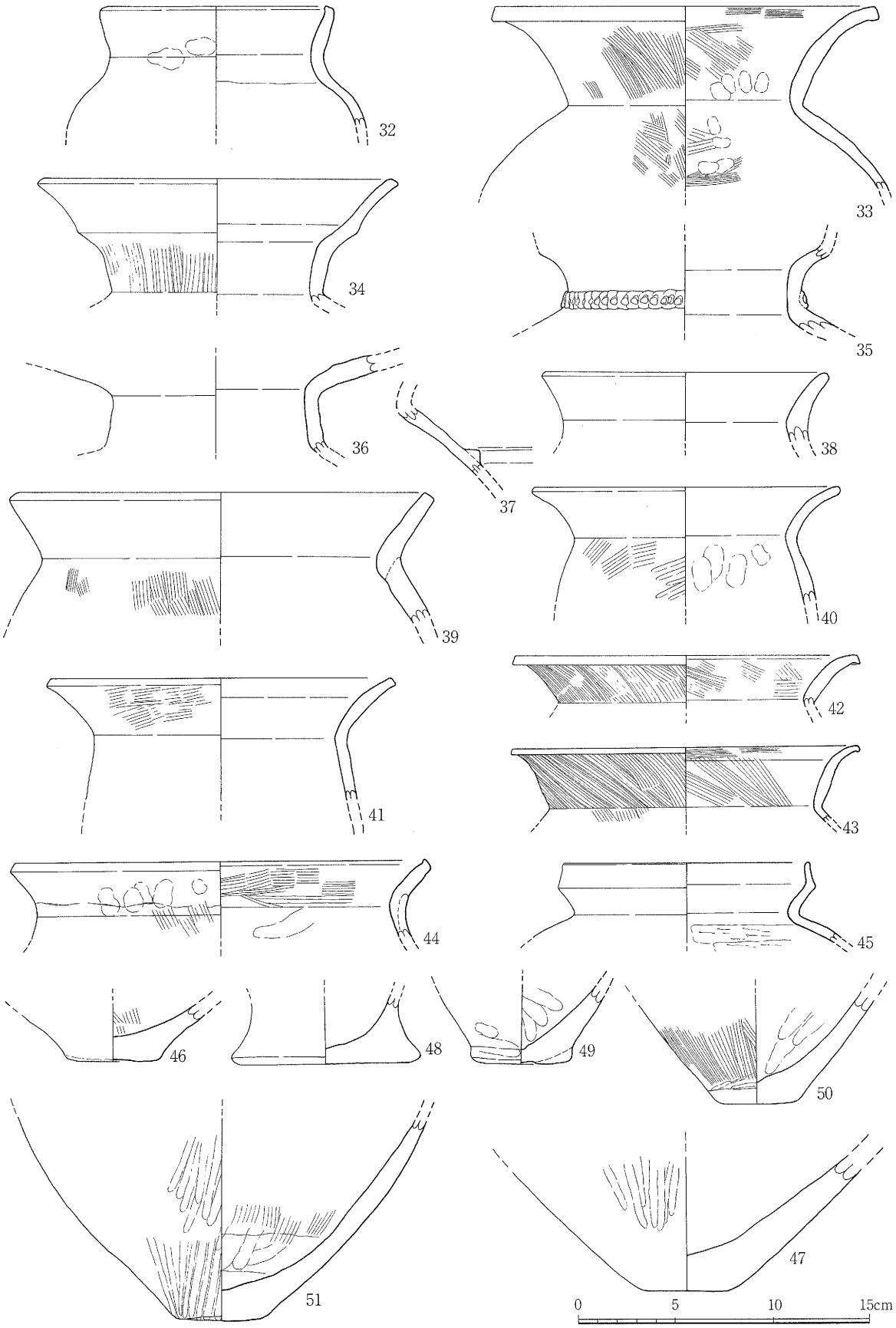


Fig.14 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（弥生土器1）

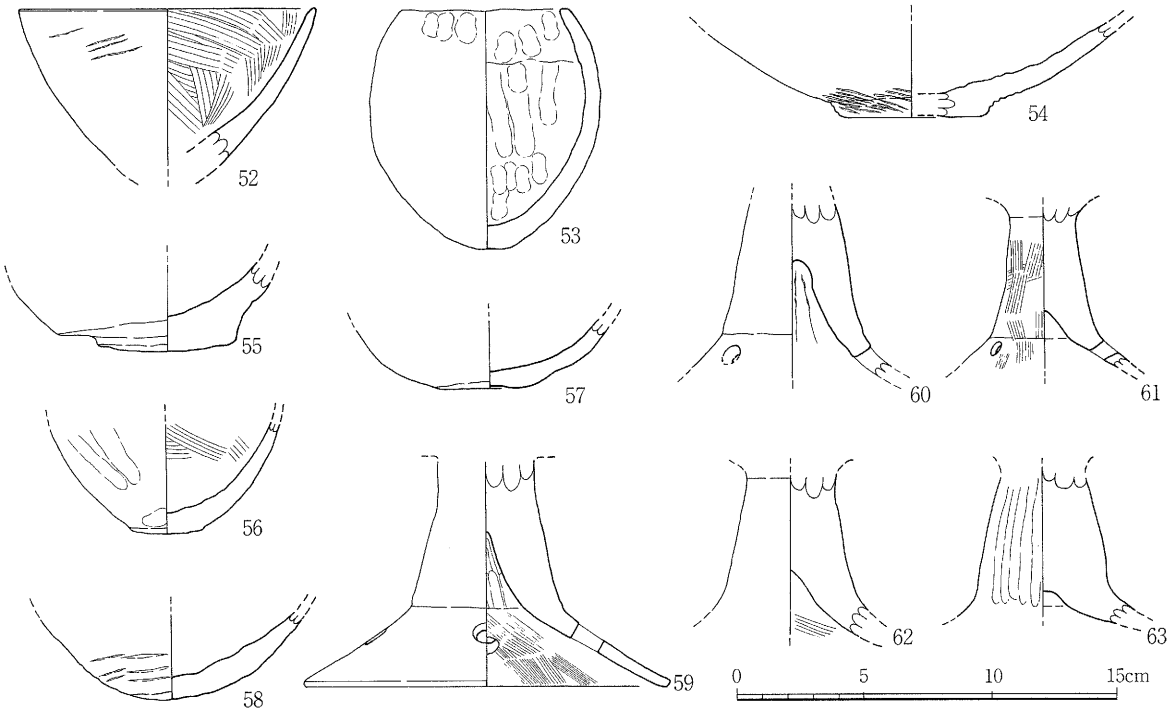


Fig.15 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（弥生土器2）

須恵器（Fig.16～18－64～118）

出土した須恵器の多くは古代のものであるが，古墳時代後期のものとみられる器台（113）や甕（115）また白鳳期のもの（64～67·72·77·78·98）などがあり，周辺に当該期の遺構の存在が考えられる。

64～71が杯蓋とそのつまみである。64～67はすべて口縁部内面にかえりのあるもので，口径は64·65が14.8cm，66が14.0cmを測り，天井部は欠損する。かえりは概ね断面三角形を呈する。口縁部の調整は回転ナデ調整である。68·69は口縁端部が下方に屈曲するもので，69は口径14.7cmを測り，天井部の大半に回転ヘラ削り調整，他は回転ナデ調整で天井部内面にはナデ調整を加えている。70·71はつまみで，70はボタン状で，径3.1cmを測り，71は扁平な擬宝珠形を呈し，径2.9cmを測る。72～88は杯身で，72～84には高台が付く。この内，72·77·78は底部外面やや内側に比較的しっかりした高台が付く。72は口径15.2cm，器高4.1cm，底径10.2cmを測り，口縁部はやや内湾する体部から斜め外上方に上がり，端部は細く仕上げ，内面には丁寧な回転ナデ調整が施される。底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整が加えられる。73は口径14.9cm，器高4.3cm，底径9.8cmを測り，口縁部は斜め外上方に真直ぐ上がる。底部外面は回転ヘラ切りの後に簡単なナデ調整を加える。高台はハの字形をなす。74もほぼ同形態を呈するものであるが，全体に歪みがあり，口径13.3cm，器高4.1cm，底径9.4cmを測り，底部外面は回転ヘラ切りのままで，ナデ調整は加えていない。75は口径13.0cm，器高3.8cm，底径9.2cmと73より小形であるが，形態，調整は73とほぼ同じである。76～84は底部の破片で，底径は76が12.8cm，77が9.2cm，78が8.6cm，79が9.3cm，80が9.6cm，81が7.5cm，82が8.0cm，83が6.6cm，84が5.5cmを測る。76は大形の杯で，高台もしっかりしている。底部外面は回転ヘラ切りの後に丁寧なナデ調整を加えている。また，内底面には墨の痕跡とみられる部分があり，硯に転用されていた可能性も考えられる。77～82は一般的な杯の底部である。77·78には先述のとおりしっかりした高台が付く。78の体部はやや丸味がある。79·80には低いハの字形をなす高台，81·82には

真下を向く高台が付く。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を加える。他は回転ナデ調整で，79·82の内底面にはナデ調整が加えられている。83·84は小杯の底部とみられ，小さな高台が付く。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を加える。85～88は高台の付かない杯である。85は小杯で，口径9.8cm，器高3.3cm，底径6.6cmを測る。口縁部は直線的にのびる体部からやや外反する。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整を加える。他は回転ナデ調整である。86は造りが雑でやや特異な形態をなし，底部外面は丸味があり，ヘラ起し状をなす。口径8.1cm，器高3.2cm，底径5.3cmを測り，口縁部は厚みのある体部から斜め外上方に上がり，端部を丸く仕上げる。口縁部から外面には回転ナデ調整，内面にはナデ調整が施される。87は大形の杯で，底径9.0cmを測り，底部外面は回転ヘラ切りである。88は推定口径13.8cm，器高3.5

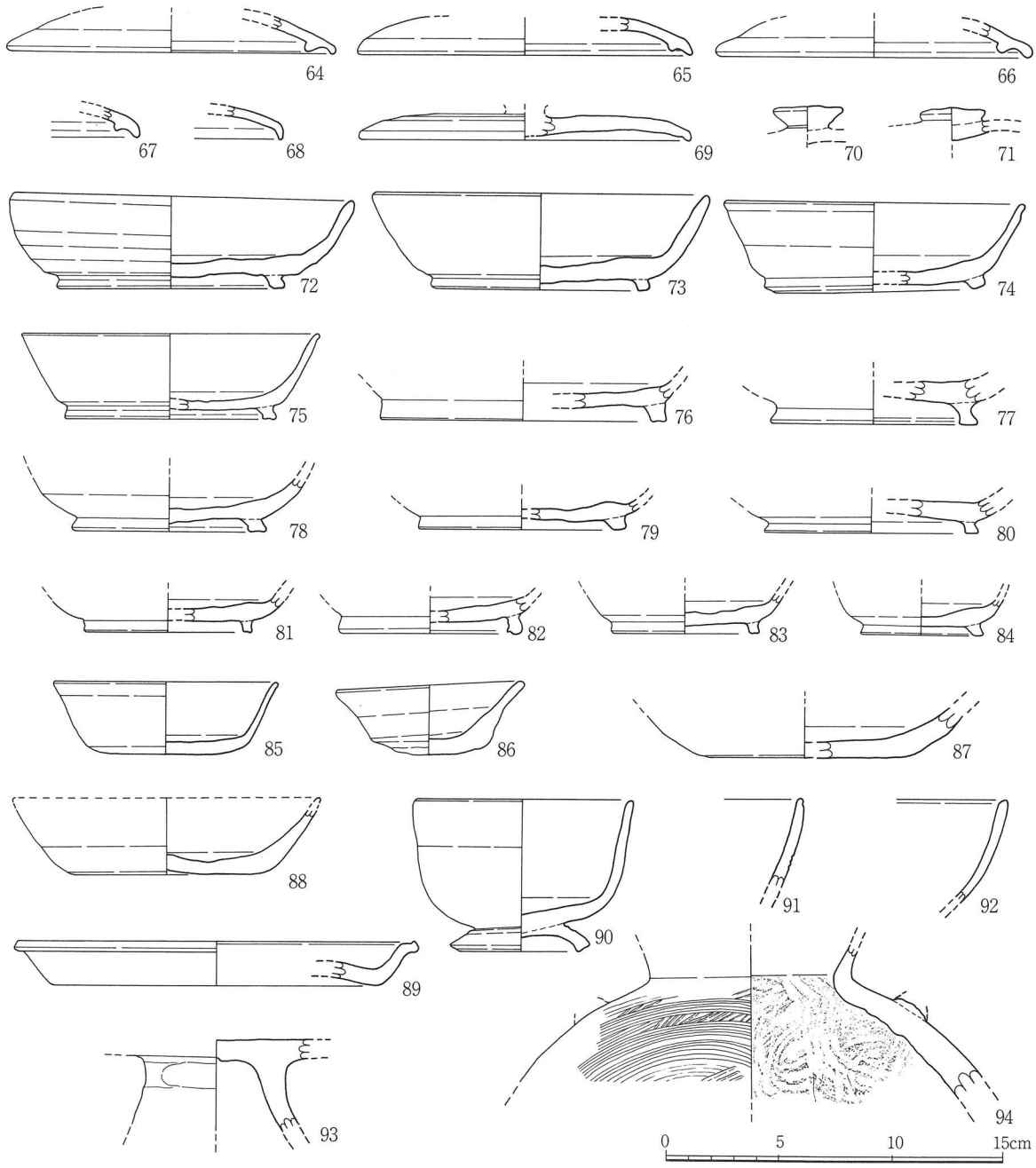


Fig.16 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（須恵器1）

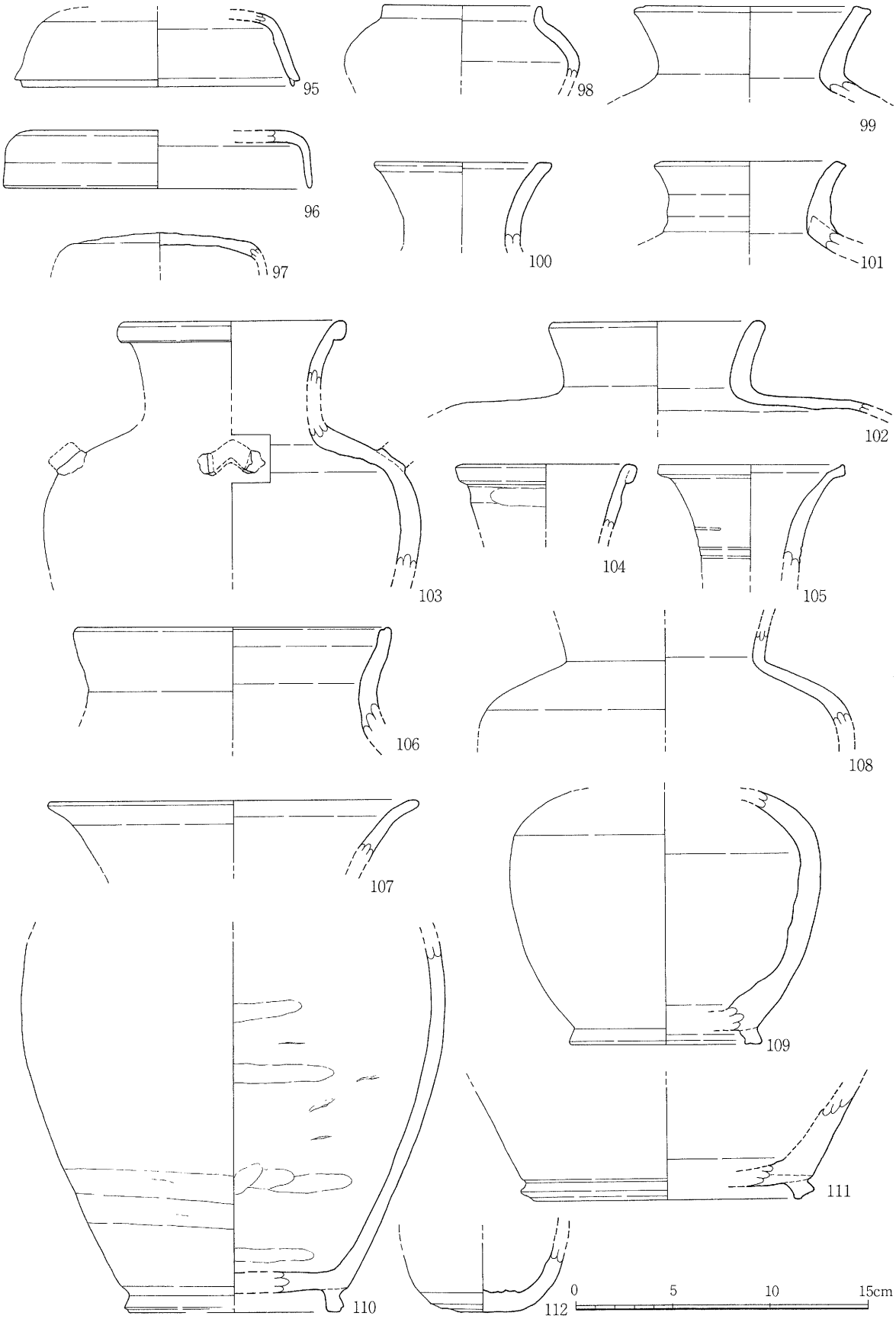


Fig.17 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（須恵器2）

cmで，底径は9.2cmを測る。口縁部は底部からやや内湾気味に上がる。底部外面は回転ヘラ切りである。89は皿で，口径17.8cm，器高2.0cm，底径14.8cmを測る。口縁部は一旦外方に屈曲させ，内側に沈線を巡らすことで折り込みを表現している。また，口縁端部は内傾する面をなす。90は台付椀で，口径9.6cm，器高6.8cm，底径6.3cmを測る。口縁部は丸味のある底部から急角度で外上方に上がり，端部を丸く仕上げる。底部にはやや湾曲する高さ1.3cmの高台が付き，端部は外傾する浅い凹面をなす。91･92は椀の口縁部の破片である。それぞれ角度を持って外上方に上がる。93は高杯で，杯底部とハの字形に開く脚台部が残存する。杯部と脚台部の境には強いヨコナデを施す。全般に造りが雑で部分的に焼成時の亀裂もみられる。94は提瓶で頸部と肩部の一部が残存する。頸部は屈曲して延びる。肩部外面にはボタン状の小さな把手が付いていたものとみられ，外面には平行のタタキの後に回転カキ目調整が施される。内面には同心円文のタタキ目がみられる。95～97は短頸壷の蓋で，口径は95が14.0cm，96が15.8cmを測る。天井部はほぼ平らで，口縁部は真下ないし外下方に屈曲する。その端部は95のように小さなかえりを設けるものとそのまま細く仕上げるもの(96)がある。器面は回転ナデ調整で，97の天井部内面にはナデ調整が加えられ，外面にはヘラ起しの痕が残る。98は短頸壷で，古墳時代後期のものとみられる。口径8.0cmを測り，口頸部は短く上方を向き，端部を丸く仕上げる。胴部最大径は上位三分の一にある。器面は回転ナデ調整を施す。99～102は短頸壷で，口径は99が10.8cm，100が9.0cm，101が9.1cm，102が10.8cmを測り，肩部から屈曲して外上方に延びる短めの口頸部が付く。103は双耳ないし四耳壷で，肩部に把手の痕跡が1箇所残る。口径11.9cm，胴径19.6cmを測り，口縁部は外反気味に上がり，端部を外方に肥厚する。頸部は欠損し，胴部最大径は上位三分の一にある。口縁部から外面にかけて自然釉がかかる。104は103の口縁部と同形態で，口径8.8cmを測る。肥厚された口縁端部下には強いヨコナデ調整が施される。105は長頸壷で，口径9.5cmを測り，口縁部は外反してのび，端部は内傾する平面をなす。外面には3状の沈線がみられる。106はやや特異な形態の壷で，口径16.2cmを測り，口縁部は外反気味に上がる頸部から外上方を向き，端部には1状の沈線が巡る。107は広口壷で，口径16.8cmを測り，口縁部はラッパ状に開く。器面は回転ナデ調整で，内面にはハダ荒れがみられる。108は広口壷の頸部から肩部にかけての破片である。器面は回転ナデ調整で，外面にはハダ荒れがみられる。109は長頸壷の胴部から底部とみられ，胴径16.0cm，底径10.0cmを測る。胴部最大径は上位三分の一にあり，底部外端にはハの字形の高台が付く。器面は回転ナデ調整を施す。110･111は短頸壷の胴部及び底部とみられる。110は胴径21.9cm，底径

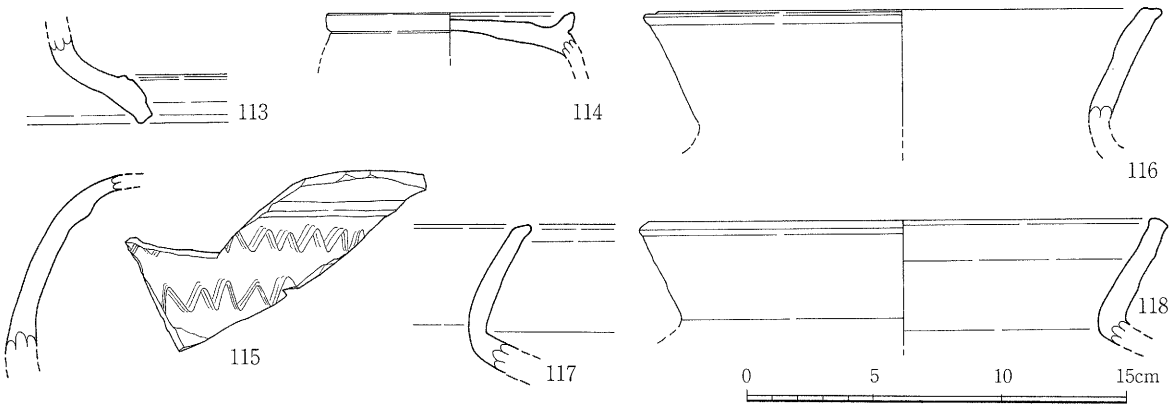


Fig.18 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（須恵器3）

11.0cmを測り，胴部は平らな底部から約75度の角度で外上方に上がり，その最大径は中位よりやや上にある。底部外端には高さ1.2cmの高台が付く。111は底径13.8cmを測り，胴部は底部から約45度の角度で外上方に上がる。底部外端にはハの字形をなす高さ1.0cmの高台が付く。112は小形の壺の下胴部から底部とみられ，底径4.1cmを測る。胴部はやや丸味のある底部から内湾気味に上がる。底部外面には回転ヘラ削り調整が施される。113は器台の裾部ではないかとみられる破片である。外側を肥厚し，上端に1条の凹線を巡らす。裾端部は外傾する平面をなす。114は円面硯である。包含層出土であるが，刻書土器(120)の出土と合わせると当遺跡が官衙関連の遺跡であることを暗示している。外堤径9.8cmとやや小形で，陸部はほぼ平らで，その回りに幅1.2cm，深さ0.2cmの海部を巡らす。脚台部は欠損しており，透しは不明である。115は古墳時代後期とみられる甕で，口頸部は大きく外反する。外面には小さな断面三角形の凸帯，その下方に3条単位のクシ描波状文を二段に施す。116～118は古代の甕で口径は116が19.2cm，118が19.6cmを測り，口頸部は外上方に延び，端部は浅い凹面ないし平面をなす。器面は回転ナデ調整を施す。

土師器 (Fig.19－119～129)

器形には杯蓋，杯身，皿，高杯，甕(把手)がある。

119は杯蓋で，口径16.7cmを測り，つまみが欠失する。天井部はほぼ平らで，緩やかに下り口縁部に至る。端部は下方に小さく屈曲し丸味を有する。器面はヨコナデ調整の後にヨコ方向のヘラ磨きをほぼ全面に施す。120～124は杯身で，120には高台が付く。120は底径11.9cmを測り，体部はほぼ平らな底部から外上方に延びる。底部外面は回転ヘラ切りで，外端にハの字形の高さ0.6cmの高台が付く。また，底部外面にはヘラによる「大」の刻書がみられる。121は口径16.2cm，器高4.5cm，底径10.6cmを測るやや大形の杯である。口縁部はやや丸味のある底部から外上方に延び，端部は丸く仕上げられ，内側に浅い凹線を巡らすことによって内側への折り込みを表現している。器面はほぼ全面にヨコ方向のヘラ磨きが施され，底部外面も回転ヘラ切りの後にナデ調整とヘラ磨きが加えられる。122は口径15.6cm，器高3.2cm，底径11.4cmを測り，口縁部は外上方に上がり，端部は丸く仕上げられ，内側に浅い凹線を巡らして折り込みを表現している。焼成は不良で，器面は摩耗する。123は丹塗りで，121同様やや大形の杯である。口縁部は外上方を向き，端部を内側に折り込む。124も123と同じく丹塗りの杯で，口縁部が欠損する。125は皿で，口径20.6cm，器高2.4cm，底径15.0cmを測る。内面には放射線状，外面にはヨコ方向のヘラ磨きが施される。126は高杯で，脚台部が残存する。外面は6面に面取りされ，全面にヘラ磨きが施され，内面にはしぼり目がみられる。127～129は甕の把手である。それぞれヘラで成形され，129は大きく6面の面取りがされる。127は水平に延びた後端部を上方に屈曲させる。128･129はほぼ水平に延びる。

土師質土器 (Fig.19－130～143)

器形には，杯，小皿，羽釜がみられる。

130～134は杯で，底部外面は134が静止糸切りである以外すべて回転糸切りである。130は口径13.6cm，器高3.8cm，底径7.4cmを測り，口縁部は外上方にのびる体部から外反気味に上がり，端部を丸く仕上げる。口縁部から内面にかけて回転ナデ調整となっている。131～134は口縁部を欠き，底径は131が8.0cm，132･133が7.0cmを測る。体部は平らな底部から外上方に上がる。器面は回転ナデ調整で，131の内底面にはナデ調整が加えられ，134の内底面には丹塗りの痕跡がみられる。135～142は小皿である。135は口

径7.8cm，器高1.8cm，底径5.0cm，136は口径7.2cm，器高2.0cm，底径4.7cm，137は口径7.1cm，器高1.7cm，底径5.0cm，138は口径7.5cm，器高1.7cm，底径5.3cmで比較的深い底部を有し，口縁部は外上方にほぼ真直ぐ上がる。底部外面は回転糸切りで，135･136には板状圧痕が残る。139は口径6.6cm，器高1.4cm，底径5.5cmを測り，先細りしており，つまみ上げによる成形とみられる。底部外面は回転糸切りで，板状圧痕が残る。140は口径7.5cm，器高1.8cm，底径6.6cmを測る。口縁部は約65度の角度で上がり，先細りする。141は口径6.4cm，器高1.1cm，底径4.4cmと小さなもので，口縁部は外上方に短く上がり，端部は細

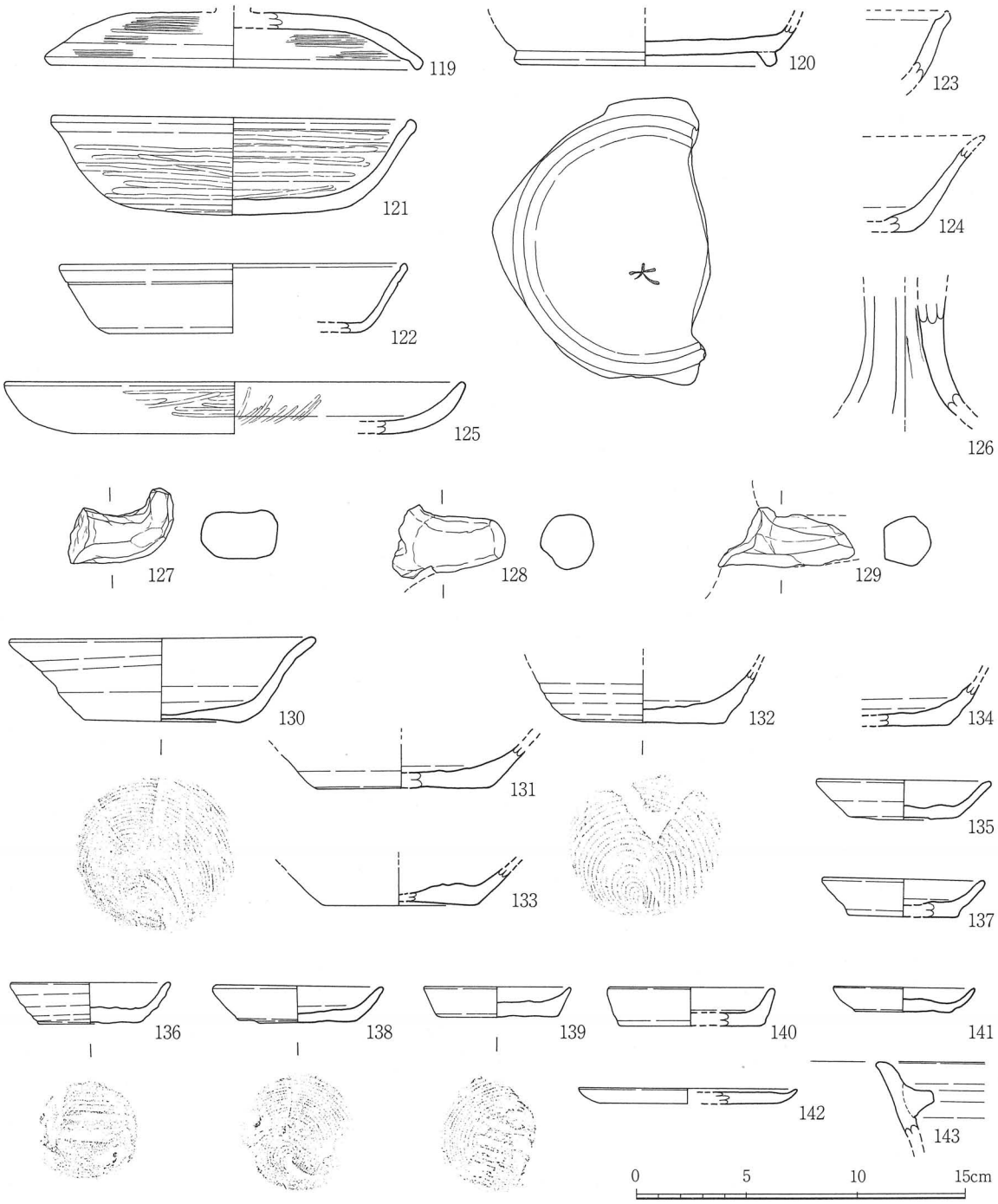


Fig.19 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（土師器，土師質土器）

い。底部外面は回転糸切りである。142は口径10.0cm，器高0.7cm，底径8.4cmと扁平なもので，端部を少しつまみ上げて口縁部としている。底部外面は回転ヘラ切りである。143は羽釜の口縁部の破片である。内傾する口縁外面には幅1.5cmの鍔が付く。焼成不良で，器面は摩耗する。

瓦器（Fig.20－144～159）

器形には椀と小皿がある。

144～157が椀で，口径は12.3cmから16.2cmのものがある。復元できたものは144と145のみで，他は口縁部と底部の破片である。成形技法はほぼ同じで，内面にはヘラ磨きが加えられ，口縁外面にはほぼ一段のヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕（指押さえの痕跡）が明瞭に残る。144は口径14.8cm，器高4.5

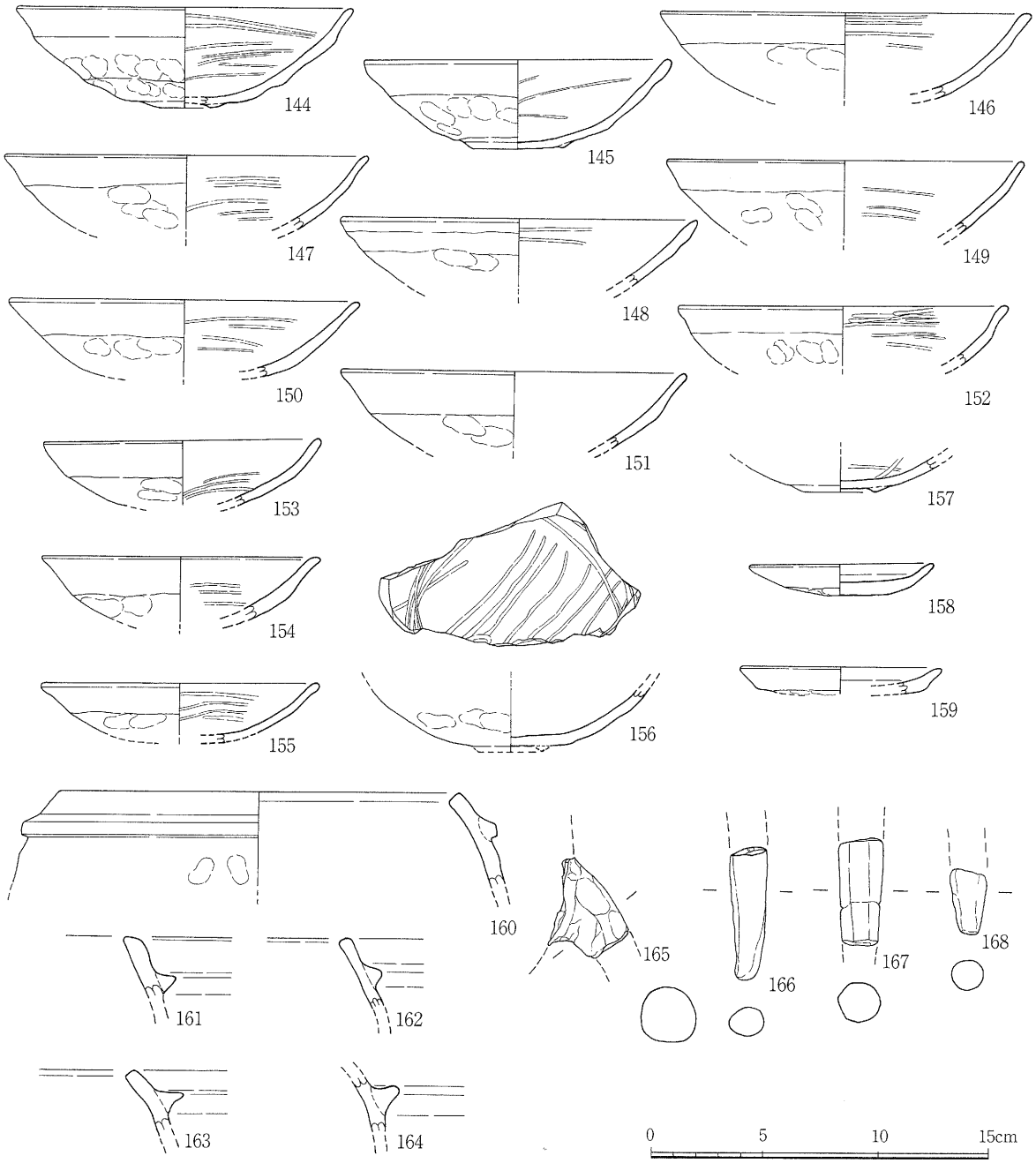


Fig.20 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（瓦器，瓦質土器）

cm，底径2.5cmを測り，底部外面には小さな断面逆台形の高台が付く。内面には連結輪状のヘラ磨きが7条認められる。145は口径13.5cm，器高4.0cm，底径4.0cmとやや小さく，底部外面に小さな断面逆三角形の高台が付く。連結輪状のヘラ磨きが3条ほど認められる。146～150は底部を欠き，口径は146が16.3cm，147が16.2cm，148･149が15.8cm，150が15.6cm，151が15.4cm，152が14.6cmを測り，内面には連結輪状のヘラ磨きが，146で4条，147で5条，148で2条，149で3条，150で4条，152で9条ほど認められる。151は内面を中心に摩耗しており，ヘラ磨きは不明である。153～155は縮小化したもので，口径は153･154が12.4cm，155が12.3cmを測る。内面には連結輪状のヘラ磨きが，153･154で3条，155で4条認められる。これらの色調は灰色ないし灰黒色を基調とするものであるが，149･150･155は外面を中心ににぶい黄褐色ないしにぶい黄橙色を呈する。156･157は底部の破片で，底径は156が約3.0cm，157が3.2cmを測り，それぞれ底部外面には小さな断面逆三角形状の高台が付く。156の内面には平行線状と連結輪状のヘラ磨きが施され，157の内面にも一部平行線状と連結輪状のヘラ磨きがみられる。158･159は小皿で，158は口径7.9cm，器高1.5cm，底径5.5cm，159は口径10.0cm，器高0.9cm，底径8.2cmを測る。口縁部はヨコナデ，体部から底部外面には指頭圧痕が残る。158の内面にはナデ調整が施される。

瓦質土器 (Fig.20－160～168)

器形はすべて羽釜で，165～168はその脚である。

内湾する口縁部外面には，160に断面台形状，161～164には断面三角形状の鍔が付く。160は口径18.0cmを測り，口縁部にヨコナデ調整，胴部内面にナデ調整，外面に指頭圧痕がみられる。他は焼成不良で器面が摩耗しており調整は不明瞭である。165は脚基部の破片で，一部煤の付着がみられる。166･168は脚端部である。

東播系須恵器 (Fig.21－169～172)

すべて片口鉢で，169･171には注ぎ口部分が残存する。169は口径28.0cmを測り，口縁部は内湾気味に上がり，端部は内傾する平面をなす。また，端部には自然釉の付着がみられる。170は口径27.6cmを測

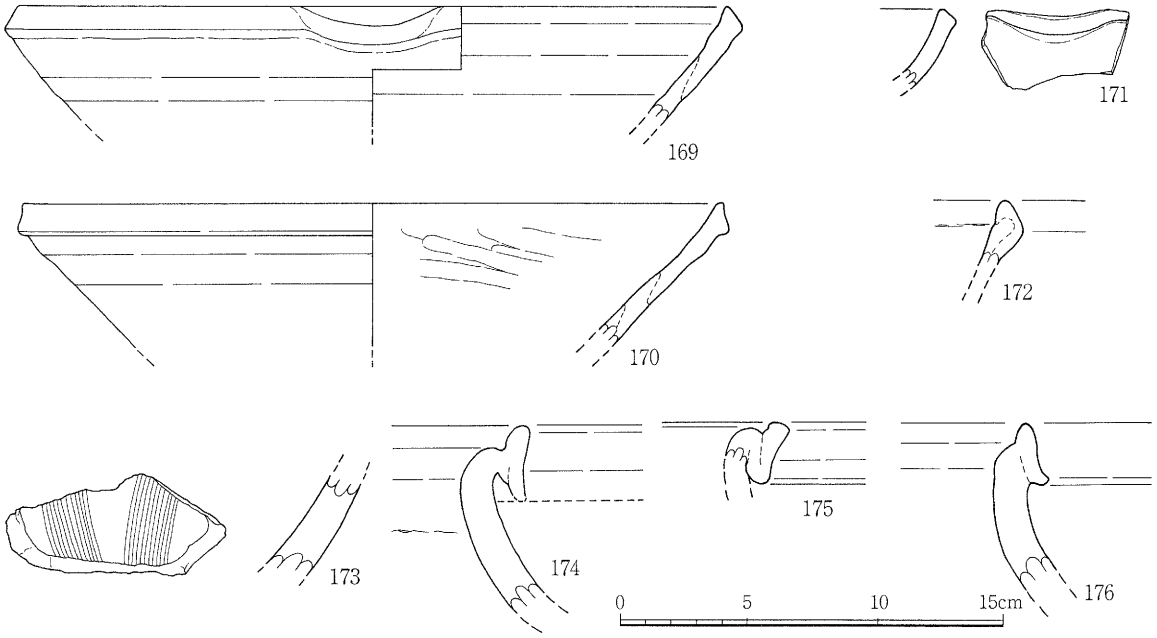


Fig.21 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（東播系須恵器，備前焼，常滑焼）

り，口縁端部は下方にやや拡張される。口唇部に回転ナデ調整，内面にヨコ方向の指ナデ調整，外面にナデ調整を施す。171は注ぎ口部分の破片で，口縁端部はほとんど拡張はされず，内傾する平面をなす。172は口縁部の細片で，端部を上方に若干拡張している。

備前焼（Fig.21－173）

擂鉢の体部の破片で，6本単位の条線が2箇所にみられる。外面にはナデ調整が施される。

常滑焼（Fig.21－174～176）

3点とも甕の口縁部で，174は口縁部が「T」を横にした形状をなす。175は口縁部が「N」字状をなすもので，縁帯と肩上部が密着している。176は口縁端部を上下に拡張した形態のものである。

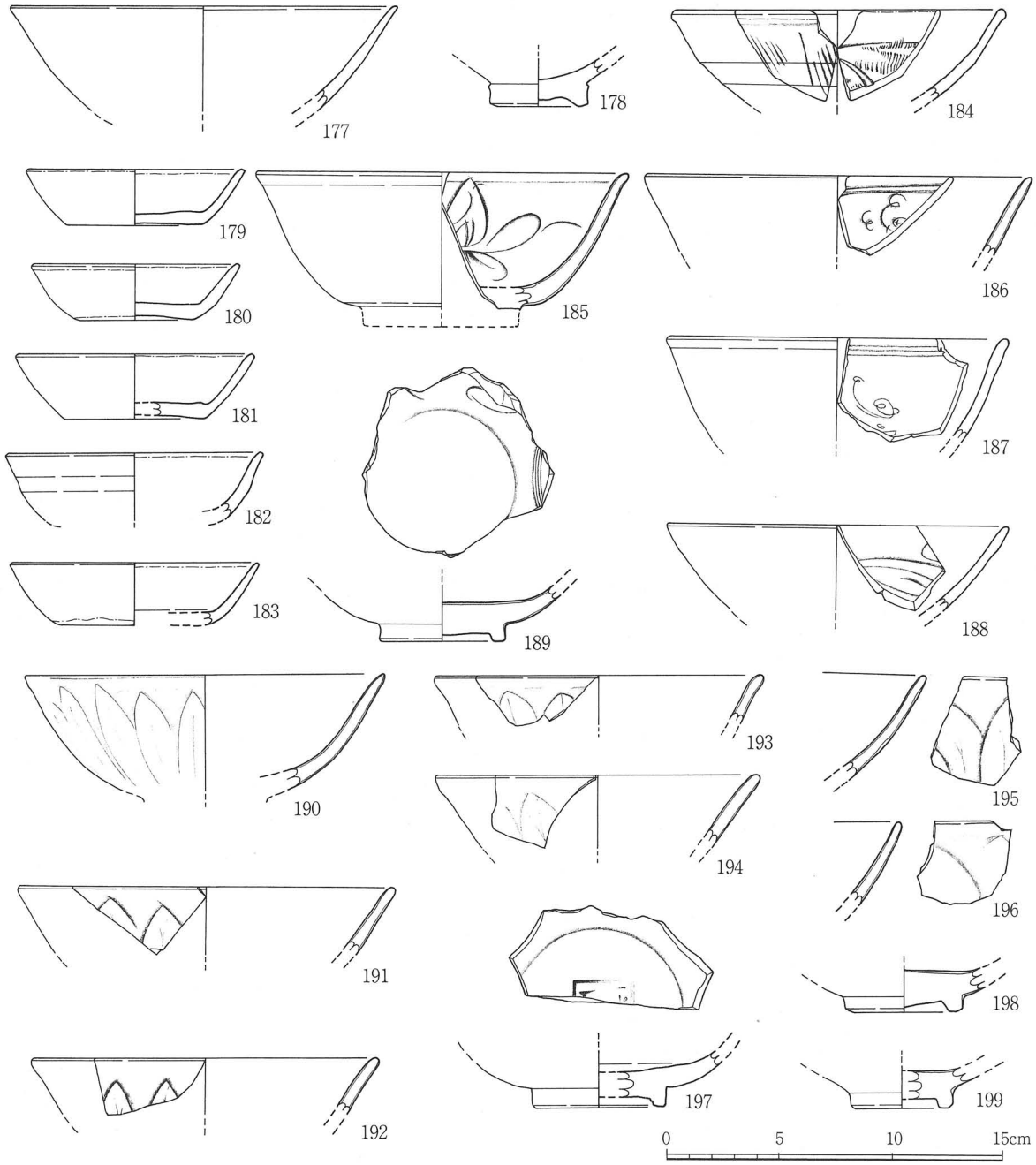


Fig.22 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（白磁，青磁）

白磁（Fig.22－177～183）

器種には碗と皿がみられる。

177･178が碗で，177は口縁部，178は底部の破片である。177は口径17.4cmを測り，口縁部は体部から内湾気味に上がり，端部で若干外反する。表面には厚さ0.1mmの乳白色の釉を施す。178は底径4.4cmを測り，底部は高さ1.0cmの削り出し高台となり，内面には乳白色の釉を施すが，外面は無釉である。179～183は皿で，179は口径9.6cm，器高2.5cm，底径6.1cm，180は口径9.2cm，器高2.6cm，底径5.4cm，181は口径10.5cm，器高2.9cm，底径6.3cm，182は口径11.4cm，183は口径11.0cm，器高2.8cm，底径6.8cmを測り，5点とも同形態である。口縁部は体部から外上方にほぼ真直ぐ上がり，底部は平らで外面は回転ヘラ切り（179～181）である。口唇部は釉ハギが行われる。色調は，181が明緑灰色である以外は灰白色を呈する。

青磁（Fig.22－184～199）

器形はすべて碗であり，同安窯系と龍泉窯系のものがみられ，後者については見込に劃花文が施されるものと外面に蓮弁文がみられるものがある。

184は同安窯系のもので口径14.7cmを測る。口縁部はほぼ真直ぐ上がる体部からやや外反気味にのび端部を丸く仕上げる。内外面にはカキ目文が施され，体部外面には回転ヘラ削りがみられる。器面には非常に薄い灰オリーブ色の釉を施す。185～189は見込に劃花文が施されたもので，185～188は口縁部，189は底部の破片で，185が口径16.6cm，186は口径17.2cm，187･188は口径15.2cm，189は底径5.7cmを測る。表面には0.1～0.2mmの厚さにオリーブ灰色の釉を施し，189は削り出し高台で畳付の内側には施釉していない。190～194は口縁部から体部外面に鎬蓮弁文が施されたものである。190～193･195の器面には0.1～0.3mmの厚さにオリーブ灰色，194には0.2mmの厚さに灰オリーブ色の釉を施している。196は口縁部外面に片彫蓮弁文がみられるもので，器面には0.2mmの厚さに薄いオリーブ灰色の釉を施す。また，195･196には全面に貫入がはいる。197～199は底部の破片で，底径は197が6.0cm，198が5.3cm，199が4.2cmを測り，底部外面はすべて削り出し高台となり，197の見込には刻印がみられる。釉は197が0.1mmの厚さに灰オリーブ色の釉を高台内側まで施す。198は0.2～0.3mmの厚さにオリーブ灰色，199は0.2mmの厚さに緑灰色の釉をそれぞれ畳付外側まで施す。

土製品（Fig.23－200～206）

すべて管状土錘であり，大きさにより3種類に分けることができる。

200～202は円筒形で，復元すると全長8.0～10.0cm，全厚1.7～2.3cmを測り，最も大きな部類である。203は円筒形で，全長5.0cm前後，全厚1.6cmのもので，中形に属す。204～206は全長3.0～4.0cm，全厚が1.2～1.3cmで最も小さな部類である。204は円筒形で重さ約2.7g，205･206は紡錘形ないしそれに近いものである。

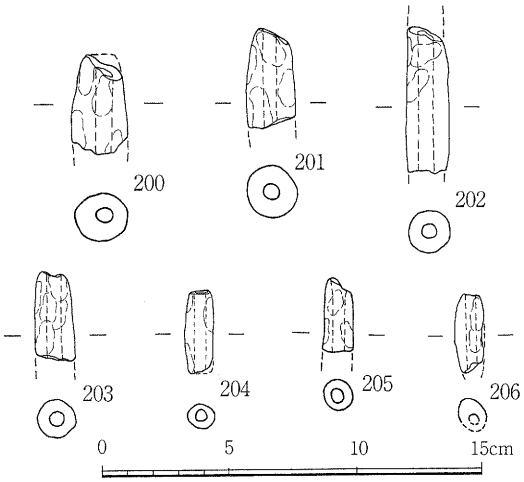


Fig.23 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（土錘）

石製品（Fig.24－207～215）

石斧，石庖丁，投弾とみられる球体のもの，砥石がある。

207は緑色片岩の小形蛤刃石斧で，刃部の一部から基部が欠失する。刃部長5.3cmを測る。208が打製石庖丁で，抉りの痕が認められる。長さ11.4cm，幅4.8cm，厚さ1.2cm，刃部長11.2cm，重さ86.9gを測る。209～213は投弾とみられる球体の石器で，多かれ少なかれ欠損している。材質はすべて砂岩である。径は209が8.0～8.5cm，210が6.7～7.5cm，211が6.2～6.3cm，212が4.6～5.3cm，213が4.1～5.4cmを測る。重さは比較的遺存状況の良い211で207.5gを測る。214・215は砂岩を使用した砥石で，214は一面を使用している。215は片面と側面の三面を使用している。

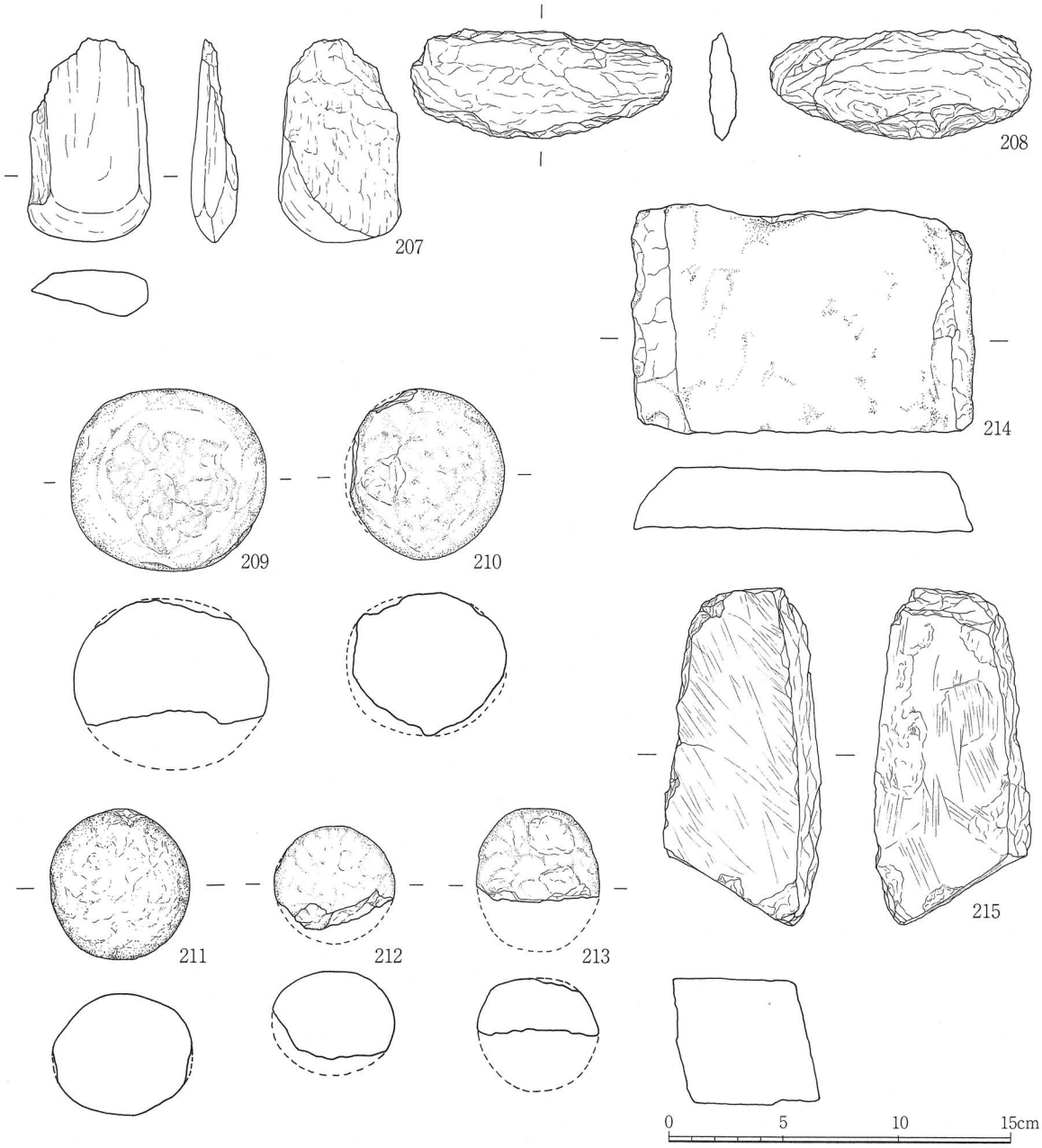


Fig.24 A区第Ⅳ層出土遺物実測図（石製品）

(2) B区

B区は，A区の西側で地表面の標高が約1m低くなった水田であり，東西5～25m，南北約45mを測る台形状をなす調査区である。調査区中央部から南部にかけては近世の削平と整地の景況がみられ純粋な遺物包含層はほとんどみられなかった。A区との境では表土層直下が遺構検出面となり西に向かうに従って近世の整地によるものとみられる堆積層が認められた。検出面は調査区中央部が砂礫土層で，南北両側が黒ボク層ないし火山灰層となっており，かつては調査区中央部が微高地状になっていたものとみられる。遺構は第Ⅴ層～第Ⅶ層上面で検出された。なお，調査区南東部からA区南端部にかけて表土層直下が2次堆積と考えられる砂礫層となっており，全く遺構は検出されず，調査区の拡張は行わなかった。

B区で認められた基本層序は以下のとおりである。

層序

第Ⅰ層　表土層（灰色粘質土層）

第Ⅱ層　褐色粘質土層

第Ⅲ層　灰暗褐色～灰黄褐色粘質土層

第Ⅳ層　黒褐色粘質土層

第Ⅴ層　黒色粘質土層

第Ⅵ層　黄褐色火山灰層

第Ⅶ層　褐色粘質土層

第Ⅷ層　褐色砂礫土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅴ～Ⅷ層上面であり，調査区中央部付近では第Ⅷ層，南・北部では第Ⅴ～Ⅶ層が検出面となっている。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土で厚さ約20cmを測る。現況はすべて水田であった。

第Ⅱ層は第Ⅰ層に伴う床土で，堆積層の比較的厚い調査区西部で認められた。

第Ⅲ層は近世の包含層であり，整地による堆積とみられる。場所により灰黄褐色や暗灰色を呈する。

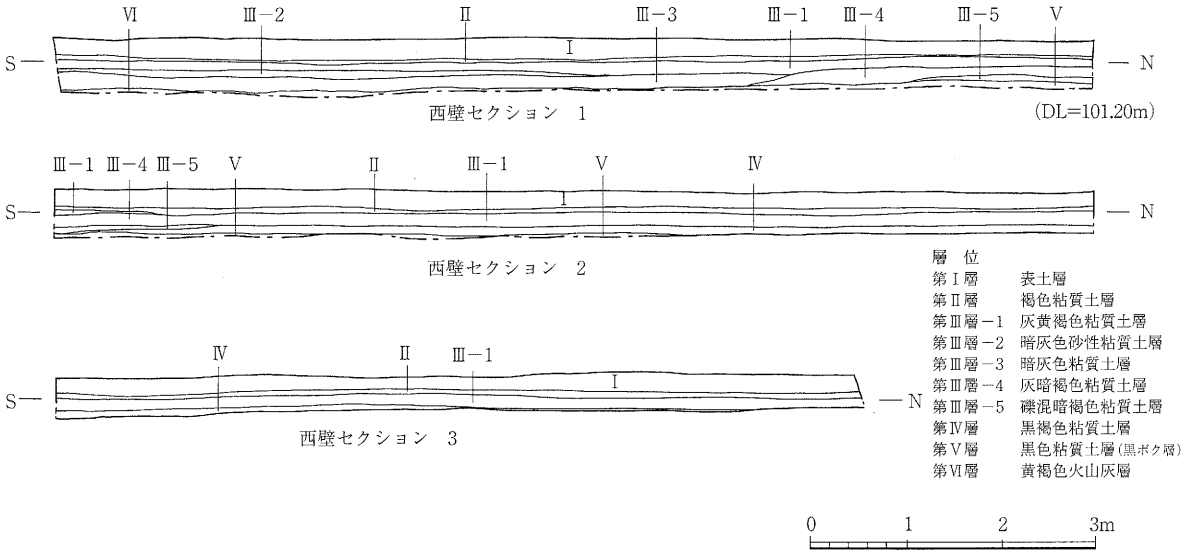


Fig.25 B区西壁セクション図

第Ⅳ層は中世の遺物包含層であり，調査区中央部から北側で認められた。遺物の包含量は極めて少なく復元図示できたものはなかった。A区の第Ⅳ層と同じものである。

第Ⅴ層は火山灰が風化，腐食し土壌化した土層（黒ボク層）で調査区西部を中心に認められ，その部分の遺構検出面となっている。

第Ⅵ層は約6,300年前に降下した火山灰（鬼界アカホヤテフラ）の堆積層であり，調査区北部と南部での遺構検出面となっている。

第Ⅶ層は自然堆積層で，第Ⅵ層が削平されている南部での遺構検出面となっている。

第Ⅷ層が基盤の岩盤層であり，調査区中央部で認められ，その部分の遺構検出面となっている。

（3） C区

C区はA区の西側，B区の西側と南部に当たる調査区である。標高はA･B区のそれに比べ約0.35～1.35m低い。調査範囲が広いため，北部，西部，南部にそれぞれトレンチを設定して堆積状態を確認したところ，北部についてはトレンチ内での遺構の確認はなかったが，近世の遺物包含層とみられる土層や基盤として良好な火山灰層の堆積が認められたため全面発掘することにし，西部と南部については遺構の存在がほとんど期待できなかったため拡張しなかった。よって，東西10～24m，南北約45mの部分を調査区とした。

調査の結果，近世の遺物包含層の下層からは調査区北部で検出したSK－71以外全く遺構は検出できず，第Ⅳ層ないし第Ⅴ層上面の精査で調査を終えざるを得なかった。

なお，C区で認められた基本層序は以下のとおりである。

層序

第Ⅰ層　表土層（灰色粘質土層）

第Ⅱ層　褐色粘質土層

第Ⅲ層　灰黒色粘質土層

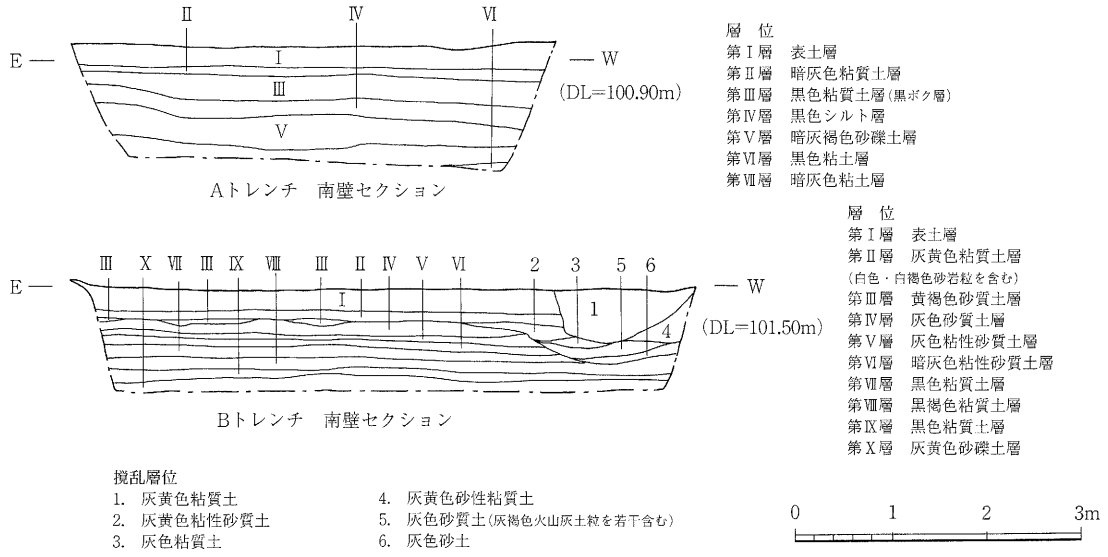


Fig.26 C区トレンチセクション図

第Ⅳ層　黒色粘質土層

第Ⅴ層　黄褐色火山灰層

第Ⅵ層　暗灰色粘土層

第Ⅶ層　黄灰色粘土層

第Ⅷ層　黄白色砂礫土層

本調査区では，SK−71が第Ⅴ層上面で検出された以外全く遺構は検出されなかった。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土で厚さ約15cmを測る。現況はすべて畑地であった。

第Ⅱ層は第Ⅰ層に伴う床土である。

第Ⅲ層は近世の包含層であり，整地による堆積とみられる。遺物は少なく，復元図示できるものはなかった。

第Ⅳ層は火山灰が風化，腐食し土壌化した土層（黒ボク層）で北部以外のほぼ全域で認められた。

第Ⅴ層は約6,300年前に降下した火山灰（鬼界アカホヤテフラ）の堆積層であり，調査区北部を中心に認められた。

第Ⅵ・Ⅶ層はA・B区で認められた褐色粘質土層（第Ⅶ層）が粘土化したものと考えられる。A・B区では認められないことからするとかつては湿地に近い状態であったのではなかろうか。特に，今回の調査区以西についてはそれが顕著で，表土層直下から粘土の堆積が認められる。

第Ⅷ層が基盤の岩盤層であり，調査区南端に設けたサブトレンチで確認することができた。

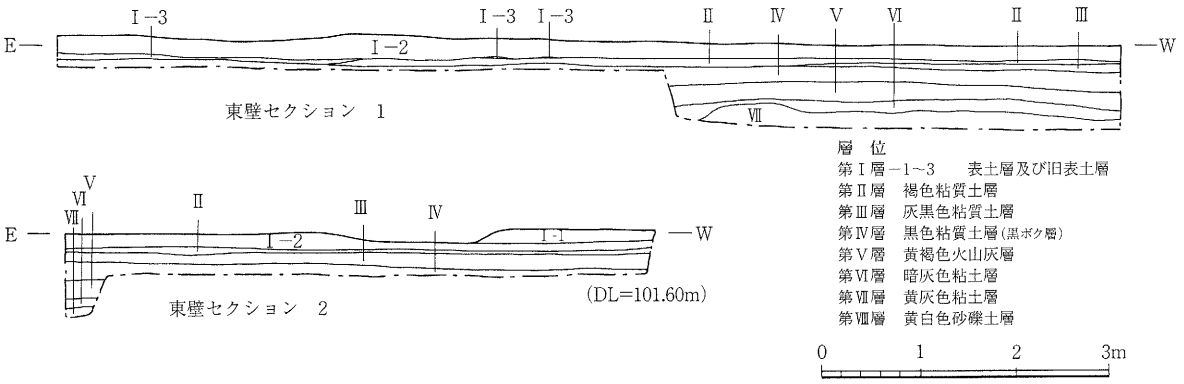


Fig.27 C区南壁セクション図

第Ⅳ章　遺構と遺物

本項では，時代別に竪穴状遺構(ST)，掘立柱建物跡(SB)，塀又は柵列跡(SA)，土坑(SK)，溝跡(SD)，畝状遺構(SF)，井戸跡(SE)，ピット(P)の順に主だった遺構について記す。なお，遺構番号は通し番号とし，調査区ごとには区分していない。また，掘立柱建物跡，塀又は柵列，土坑については一覧表を掲載している。

1. 弥生時代

A区南部と中央部およびB区中央部で確認された。全般に後世の影響がみられ，遺物包含層に含まれる弥生土器の量に比べ遺構数は少なく，実際はもう少し多くの遺構があったものと推察される。今回の調査で確認された遺構には竪穴状遺構1軒，土坑8基，ピット2個等がある。

(1) 竪穴状遺構

ST－1 (Fig.28)

A区中央部西端で検出したベット状遺構を有する竪穴状遺構で，SD－1が西側を縦断している。平面形は南北が長い不整方形で，東西2.92m，南北3.88mを測り，長軸方向はN－22°4′－Wと西に振っている。残存する壁高は約27cmで，床面の標高は101.44m前後を測る。付属遺構として北東側に床面より5cm高くなったベット状遺構と6個のピットを検出した。ベット状遺構はSD－1の掘削の影響も少なからずみられるが，西側床面では確認できず，北東部のみを一段高くしていたものと考えられる。検出したピットでは，位置関係からみてP－2(径30cm，深さ53cm)とP－3(径22cm，深さ17cm)が主柱穴と考えられるが，P－4はやや浅く，柱間は1.00mと短い。一方，P－1は径24cm，深さ52cmあり，主柱穴とみることも可能である。構造的には先述の2本柱で棟を支えていたとみるのが適切かもしれないが，場合によっては1本柱で棟を支えていたことも考えられる。ともかく，造りは簡単なものと推察される。なお，P－2には掘り換えがあり，ベット状底面で検出した2個のピットはいずれも深さが10cmに満たず，染み状の落ち込みと考えられる。埋土は砂岩粒を僅かに含む黒褐色粘質土であった。出土遺物にはタタキ目のある弥生土器片36点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

(2) 土坑

SK－1 (Fig.29)

A区南部で検出した舟形の土坑で，SK－58･59と中世のピットに切られていた。長辺1.96m，短辺0.54m，深さ46cmを測り，南側の一段高い平場に長さ57cm，幅25cm，厚さ20cm，底面に長さ30cm，幅8cm，厚さ10cmの砂岩がそれぞれみられ，底面中央部でピット1個が検出され，簡易な覆いがされていたものと考えられる。長軸方向はN－43°9′－Wを示す。断面形はほぼ逆V字状を呈する。埋土は黒ボクを主体とする黒色粘質土に黄褐色火山灰土粒を僅かに含むものであった。出土遺物は図示した弥生土器(216)1点のみであった。

出土遺物

弥生土器（Fig.30－216）

小形の甕で，口径約12.7cmを測る。口頸部は短く「くの字形」をなし，上下に若干拡張した端部には二条の擬凹線文がみられる。胴部は倒卵形を呈し，最大径はほぼ中位にある。口縁部はヨコナデ調整，胴部内面には下から上へのヘラ削り調整，外面はタテ方向のハケ調整が施される。焼成は良く，器面はにぶい褐色を呈する。

SK－2（Fig.29）

A区南部で検出した方形の土坑で，中世のピットが南西壁に掘り込まれていた。長辺0.90m，短辺0.73m，深さ4cmを測り，底面で2箇所のピット状の落ち込みを検出した。長軸方向はN－34°59′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒ボクを主体とする黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器20点がみられ，217～223が復元図示できた。

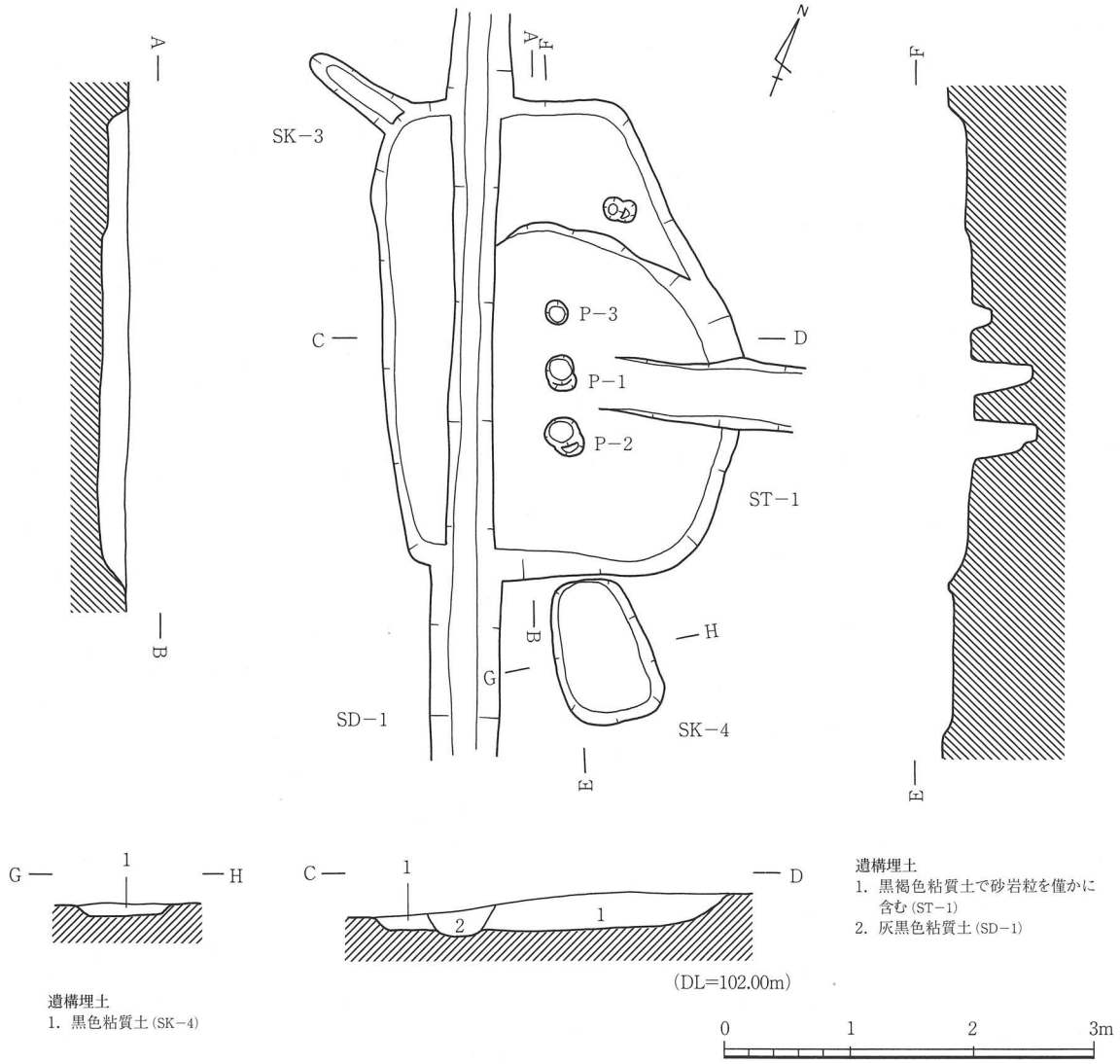


Fig.28 ST－1，SK－3・4，SD－1

出土遺物

弥生土器 (Fig.30－217～223)

器形には甕(217～222)と鉢(223)がみられる。

217～219は口縁部から胴部にかけてが残存し，口径は217が18.7cm，218が約16.2cm，219が19.4cmを測る。いずれも形態，手法がほぼ同じで，口頸部はくの字形をなし，外傾する頸部から口縁部は外反し，端部を下方に若干拡張する。胴部はほぼ倒卵形を呈し，最大径は中位よりやや上に求めることができる。口縁部外面はタテ方向，内面は斜めのハケ調整，胴部外面は中位以下にタタキを施した上に上位までタテ方向のハケ調整，内面は上位にハケ調整を施す。217の口縁部から上胴部外面には煤が付着する。220～222は胴部から底部にかけてが残存する。胴部は倒卵形を呈し，220･222の底部は小さな平底である。いずれも外面にはタタキの後にタテ方向のハケ調整，内面には指ナデ調整と部分的にタテ方向のハケ調整がみられる。3点とも焼成は良く，器面は橙色ないし褐灰色を呈する。223は小形の鉢で，口径10.9cm，器高6.2cmを測る。口縁部は体部から内湾気味に上がり，端部は内傾する面をなす。底部は尖っている。外面にはタタキの後にハケ調整，内面は全面にハケ調整を施し，口唇部のみにヨコナデ調整を加える。焼成は良く，器面はにぶい褐色を呈する。

SK－3 (Fig.28)

A区中央部で検出した舟形の土坑で，ST－1と切り合っている。長辺0.88m以上，短辺0.25m，深さ5cmを測る。長軸方向はN－75°4′－Wを示す。断面形はU字状を呈する。埋土は黒ボクを主体とする黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片3点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－4 (Fig.28)

A区中央部で検出した不整方形の土坑で，ST－1の南壁に接する。長辺1.21m，短辺0.76m，深さ6cmを測り，長軸方向はN－32°0′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－5

B区北部東壁際で検出した舟形の土坑である。長辺4.30m，短辺0.37m，深さ8cmを測り，長軸方向はN－34°2′－Wを示す。断面形はU字状を呈する。埋土は黒ボクを含む黒色粘質土に黄褐色火山灰土粒を僅かに含むものであった。出土遺物にはタタキ目のみられる弥生土器片22点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－6

B区中央部で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.83m，短径1.18m，深さ24cmを測り，長軸方向はN－6°51′－Wを示す。断面形は逆台

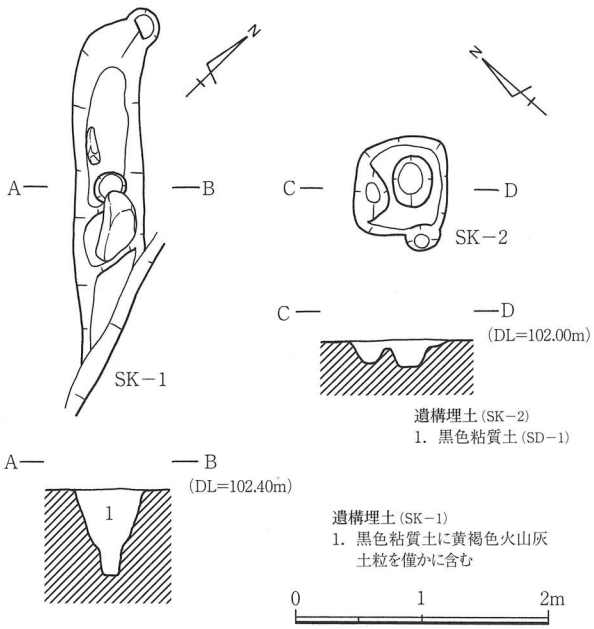


Fig.29 SK－1･2

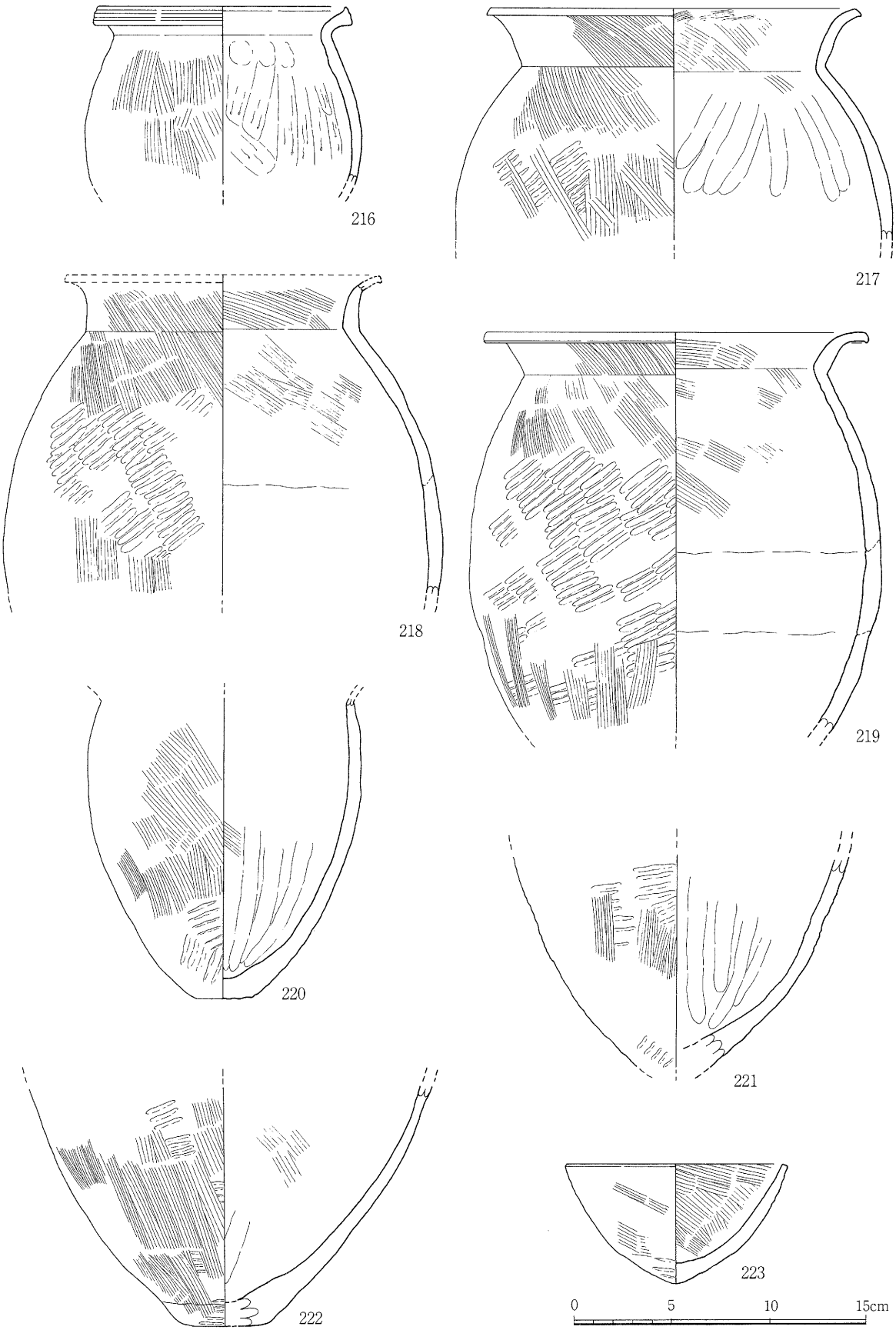


Fig.30 SK－1・2出土遺物実測図

形状を呈する。埋土は砂岩礫と黒ボクを含む黒色ないし黒褐色粘質土であった。出土遺物にはタタキ目のみられる弥生土器片34点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－7

B区中央部で検出した方形の土坑である。長辺2.63m，短辺1.70m，深さ38cmを測り，長軸方向はN－1°39′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は砂岩礫と黒ボクを含む黒色～黒褐色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片100点余りがみられ，この内の3点(224～226)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.31－224～226)

器形には甕，鉢，ミニチュア土器がある。

224は口径16.2cmを測る甕で，口頸部と肩部が残存する。口頸部は外反して上がり，端部は丸い。胴部は内湾気味に緩やかに下る。外面全面には粗いタタキ目，口縁部と上胴部内面にはハケ目がみられ，口唇部から口縁部内面にはヨコナデ調整を加える。225は小形の鉢で，体部は内湾気味に上がりそのまま口縁部に至るものとみられる。底部はボタン状に小さく突起する。226はミニチュア土器で甕形をなす。口径5.4cm，器高7.4cm，胴径6.0cmを測る。口縁部は外反して短く上がり，胴部は上位から内湾気味に下り，丸い底部に至る。胴部最大径は中位よりやや上にある。口縁部はヨコナデ調整，胴部外面にはタタキ，内面にはナデ調整を施す。

SK－8

B区南部で検出した舟形の土坑で，SK－25に切られていた。長辺3.35m以上，短辺0.31m，深さ18cmを測り，長軸方向はN－67°13′－Eを示す。断面形はU字状を呈する。埋土は黒ボクを主体とする黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片3点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

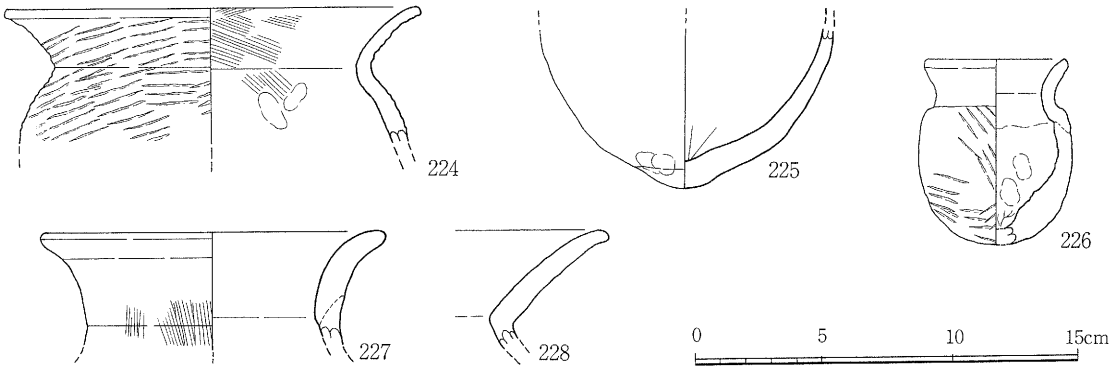


Fig.31 SK－7，P－1・2出土遺物実測図

(3) ピット

P－1

A区南部で検出したピットで，東側を中世の柱穴に掘り込まれていた。径40cmの円形で，深さ25cmを測る。埋土は黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片4点がみられ，この内の1点(227)が図示できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.31－227）

壷の口縁部で，口径13.2cmを測る。口縁部は内反する頸部から外反してのび，端部は丸く仕上げる。口縁部はヨコナデ調整，頸部外面にはタテ方向のハケ調整がみられる。

P－2

A区南端部で検出したピットで，東側をSK－58に掘り込まれていた。径30cmの円形で，深さ15cmを測る。埋土は黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片8点がみられ，この内の1点（228）が図示できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.31－228）

壷で，大きく外傾する高さ3.4cmの口縁部である。口縁部はヨコナデ調整が認められる。焼成は良く，器面はにぶい橙色を呈する。

2．古代

A区中央部から南部およびB区で確認された。立地的にみれば，遺跡の北西部に当たり，今回の調査区の南側がその中心と考えられる。今回の調査で確認された遺構には掘立柱建物跡1棟，塀又は柵列跡4列，土坑2基，ピット2個等がある。

（1）掘立柱建物跡

SB－1（Fig.32）

B区北端部で検出した梁間2間（3.60m），桁行2間（3.75～4.05m）と歪みのある東西棟総柱建物である。SA－3の北側に位置する。棟方向はN－87～88°－Eである。柱間寸法は梁（南北）が1.65m（5.5尺）と1.95m（6.5尺），桁行（東西）が1.65（5.5尺）～2.10m（7.0尺）である。柱穴は一辺40～60cmの方形で，柱径は18cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片3点，須恵器片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

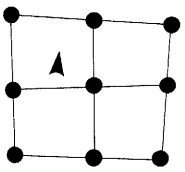


Fig.32 SB－1

（2）塀又は柵列跡

SA－1

A区南端部で検出したL字形をなす塀である。北から2間目と3間目の柱穴がSA－2の柱穴を切っていた。6間分（10.95m）を検出し，柱間は1.80（6.0尺）～1.95m（6.5尺）である。柱穴は一辺45～60cmの方形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒ボクを主体とした灰黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片33点，土師器片7点，鉄滓2点がみられたが，図示できたものは北から5間目の柱穴から出土した弥生土器（229）1点のみであった。

出土遺物

弥生土器（Fig.33－229）

甕で，口縁部と上胴部が残存する。口縁部は外傾した頸部からさらに外傾し，端部を丸く仕上げる。口縁部と胴部外面にはハケ調整，胴部内面にはナデ調整を施す。

SA－2

A区南端部で検出した南北塀(N－28°－W)である。北から1間目と2間目の柱穴がSA－1の柱穴に切られていた。4間分(7.35m)を検出し，柱間は1.65(5.5尺)～2.10m(7.0尺)と区々である。柱穴は一辺35～50cmの方形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒ボクを主体とした灰黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片7点，土師器片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SA－3

B区北部で検出したL字形をなす塀である。SB－1の南隣に位置する。6間分(8.45m)を検出し，柱間は1.05～1.60mである。柱穴は径45～60cmの円形で，柱径は10～15cmとみられる。柱穴の埋土は黒ボクを若干含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片4点，須恵器片1点，土師器片4点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SA－4

B区南部で検出したL字形をなす塀である。P－4付近を囲む位置にある。5間分(9.90m)を検出し，柱間は1.70m，2.00m，2.10mである。柱穴は径20～33cmの円形で，柱径は10～15cmとみられる。柱穴の埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片1点，須恵器片1点，土師器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

(3) 土坑

SK－9

B区中央部で検出した不整楕円形の土坑で，P－23が北東壁に掘り込まれていた。長径1.61m，短径1.11m，深さ40cmを測り，長軸方向はN－38°40′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘質土に砂岩礫を含むものであった。出土遺物には須恵器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－10

B区中央部で検出した方形の土坑で，SK－6を切っていた。長辺1.58m以上，短辺0.53m，深さ19cmを測り，長軸方向はN－20°25′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘質土に礫を含むものであった。出土遺物には弥生土器片5点，土師器1点がみられ，土師器(230)1点が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.33－230)

杯で，底径6.6cmを測る。体部が内湾気味に上がり，底部は高さ0.5cmのベタ高台となり，外面は回転ヘラ切り後ナデ調整を加える。他は回転ナデ調整である。

(4) ピット

P－3

A区南部，SK－18の底面で検出したピットである。径30～32cmの不整円形で，深さ22cmを測る。埋土は黒色粘質土であった。出土遺物には須恵器片1点，土師器片2点がみられ，須恵器(231)の1点が図示できた。

出土遺物

須恵器（Fig.33－231）

杯のつまみで，擬宝珠形を呈し，径は2.7cmを測る。

P－4

B区南部で検出したピットである。径44～50cmの不整円形で，深さ36cmを測る。埋土は黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器1点，須恵器2点，土師器片2点がみられ，須恵器（232･233）の2点が図示できた。

出土遺物

須恵器（Fig.33－232・233）

232は高杯の脚台部である。脚台部は基部から下方に外反気味に下り，裾部で大きく開くものとみられる。外面には1条の凹線が施される。233は平瓶である。胴部は上位三分の一を境に内湾して下り，平らな底部に至る。下胴部から底部外面には回転ヘラ削り調整を施す。他は回転ナデ調整である。焼成は良好で，外面は灰色を呈し，頸部と胴部の境及び中胴部以下に自然釉がかかる。

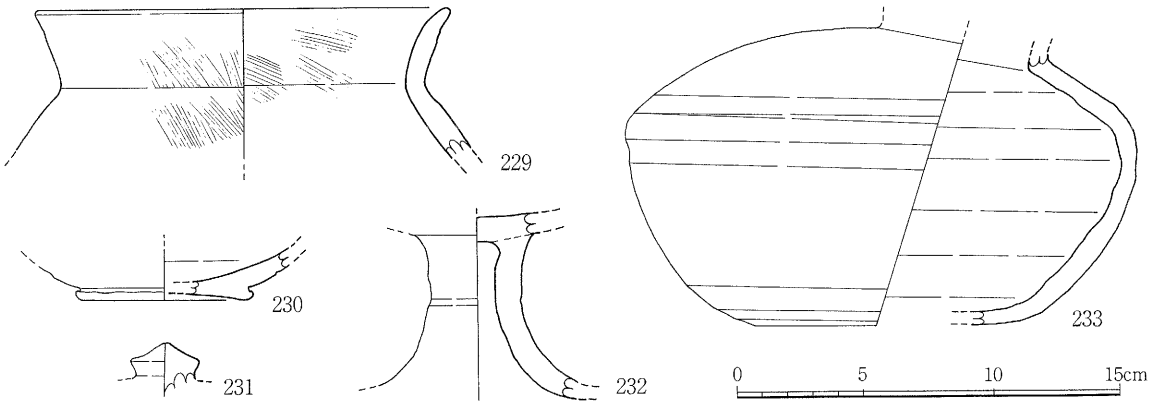


Fig.33 SA－1，SK－10，P－3･4出土遺物実測図

3．中世

A区全域とB区中央部を中心に認められた。全般に近世以降の削平と整地の影響がみられ，遺存状態は決して良いものではないが，A区中央部と南部にその中心があったものとみられる。また，在地土器と搬入土器が伴出した遺構もあり，貴重な編年資料となっている。今回の調査で確認された遺構には掘立柱建物跡4棟，塀又は柵列跡2列，土坑26基，溝跡7条，畝状遺構5条，ピット22個等がある。

（1）掘立柱建物跡

SB－2（Fig.34）

A区中央部北側で検出した梁間2間（4.65～4.80m），桁行3間（6.00～6.10m）と歪みのある南北棟建物で，南から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。西側柱南から1間目の柱穴が確認できなかった。SA－5の北側に位置する。棟方向はN－4～5°－Eである。柱間寸法は梁（東西）が2.25mと2.40m，桁行（南北）が1.80～2.10mと区々である。柱穴は径30～38cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒ボクを若干含む灰黒色粘質土であった。出土遺物には土師器片1点，土師質土器9点，瓦器9点，常滑焼片1

点があり，南西隅柱から出土した土師質土器(234)，北妻柱真中の柱穴から出土した土師質土器(235)と瓦器(236・237)の4点が図示できた。この内北妻柱真中の柱穴から出土した土器は良好なセット関係と捉えることができる。

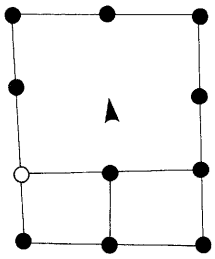


Fig.34 SB－2

出土遺物

土師質土器 (Fig.40－234・235)

2点とも小皿である。234は口径7.3cm，器高1.3cm，底径5.6cmを測り，口縁部は内湾気味に上がり，端部は細く仕上げる。底部外面は回転糸切りで，他は回転ナデ調整である。235は口径7.3cm，器高1.8cm，底径4.8cmで，底部がやや深い。口縁部は外反気味に上がり端部は丸い。底部外面は回転糸切りで，板状圧痕が残る。他は回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加える。

瓦器 (Fig.40－236・237)

2点とも椀である。236は口径14.6cmで内面には連結輪状のヘラ磨きが8条認められる。口縁部はヨコナデ調整で，体部外面には指頭圧痕が残る。237は口径13.0cmとやや小形で，内面には連結輪状のヘラ磨きが3条認められる。口縁部はヨコナデ調整で，体部外面には指頭圧痕が残る。

SB－3 (Fig.35)

A区南部で検出した梁間2間(4.20m)，桁行3間(5.55m)の南北棟総柱建物である。SB－4と重なっている。棟方向はN－18°－Wである。柱間寸法は梁(東西)が2.10m等間隔，桁行(南北)が1.65m，1.80m，2.10mと区々である。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は12～18cmとみられる。柱穴の埋土は黒ボクを若干含む灰黒色粘質土であった。遺物は各柱穴から出土しており，各器種の総数は弥生土器片7点，須恵器片6点，土師器片1点，土師質土器片36点，瓦器片2点，青磁片1点(同安窯系)であったが，復元図示できるものはなかった。

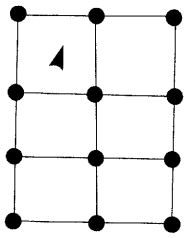


Fig.35 SB－3

SB－4 (Fig.36)

A区南部で検出した梁間2間(4.20～4.40m)，桁行3間(6.20～6.45m)と歪みのある東西棟建物で，西から1間目の柱通りに間仕切柱が建つ。西妻柱真中の柱穴が確認できなかった。SB－3と重なっている。棟方向はN－74～75°－Wである。柱間寸法は梁(南北)が1.80～2.60m，桁行(東西)が1.95～2.25mである。柱穴は径25～40cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は黒ボクを若干含む灰黒色粘質土であった。遺物はほとんどの柱穴から出土しており，各器種の総数は弥生土器片7点，須恵器片2点，土師器片2点，土師質土器片11点，瓦器片1点であったが，復元図示できるものはなかった。

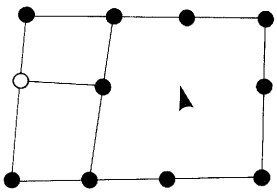


Fig.36 SB－4

SB－5 (Fig.37)

B区中央部で検出した梁間2間(2.30m)，桁行2間(4.70m)のある東西棟建物である。SA－6の北側に位置する。棟方向はN－87°－Eである。柱間寸法は梁(南北)が0.90～1.40m，桁行(東西)が2.10mと2.60mである。柱穴は径30～55cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒ボクを主体とする灰黒

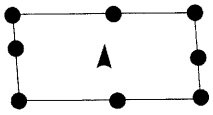


Fig.37 SB－5

色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片2点，土師質土器片4点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

(2) 塀又は柵列跡

SA－5

A区中央部で検出したL字形をなす塀である。SB－2の南側に位置する。4間分(9.95m)を検出し，柱間は2.15～2.45mと区々である。柱穴は径30～42cmの円形で，柱径は10～15cmとみられる。柱穴の埋土は黒ボクを若干含む灰黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片1点，土師質土器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SA－6

B区南部で検出した柵列である。SB－5の南側に位置する。3間分(4.80m)を検出し，柱間は1.50～1.70mと区々である。柱穴は径22～30cm，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒ボクを若干含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片2点が認められたが，復元図示できるものはなかった。

(3) 土坑

SK－11 (Fig.38)

A区北部で検出した方形の土坑で，SK－12を切っていた。長辺1.58m，短辺1.44m，深さ59cmを測り，長軸方向はN－89°20′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土に黄色と暗褐色粘質土のブロックを多量に含むものであった。出土遺物には青磁片2点がみられ，この内の1点(238)が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.40－238)

碗で，口縁部の破片である。口縁部は内湾気味に上がり，端部を細く仕上げる。見込には2条の界線の下に劃花文が施される。器面には0.1～0.2㎜の厚さに緑灰色の釉を施す。

SK－12 (Fig.38)

A区北部で検出した方形の土坑で，SK－11に切られていた。長辺1.68m，短辺1.30m，深さ57cmを測り，長軸方向はN－87°43′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土に暗褐色粘質土のブロックを僅かに含むものであった。出土遺物には須恵器片1点,青磁片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

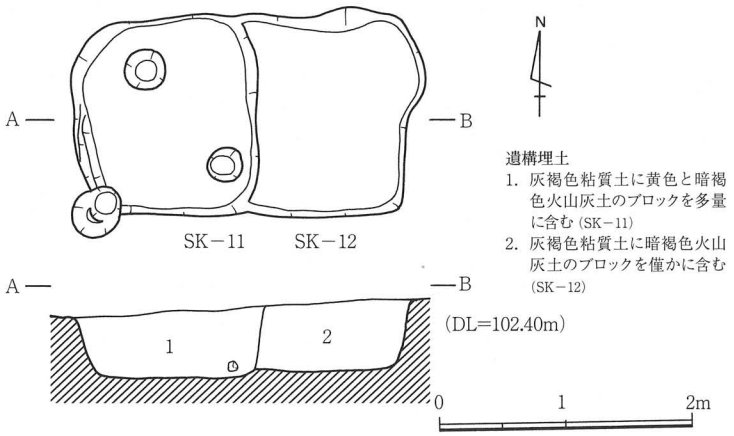


Fig.38 SK－11・12

SK－13

A区北部で検出した方形の土坑で，SK－37に北東壁を切られていた。長辺1.08m，短辺0.87m，深さ19cmを測り，長軸方向はN－80°32′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色砂性粘質土であった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－14

A区中央部で検出した円形の土坑で，SD－1に切られていた。径1.53m，深さ14cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片2点，土師質土器片2点，瓦器片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－15

A区南部北よりで検出した不整方形の土坑で，SK－16を切っていた。長辺0.88m，短辺0.78m，深さ58cmを測り，長軸方向はN－12°41′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土であった。出土遺物には弥生土器2点，須恵器1点，土師質土器9点，瓦器片1点，瓦質土器片1点がみられ，弥生土器(239)，須恵器(240)，土師質土器(241～243)の5点が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.40－239)

壷の底部とみられる破片で，体部は平底の底部から外上方に上がる。内外面ともハケ調整を施す。

須恵器 (Fig.40－240)

甕の口縁部で，外上方にのび，端部は内傾する平面をなす。内面にはヨコ方向のハケ目，外面にはヘラ状工具によるタテ方向の刻目がみられる。

土師質土器 (Fig.40－241～243)

いずれも小形の杯である。241は口径9.6cm，器高2.7cm，底径5.3cmを測り，口縁部は外上方に短く上がり，端部を丸く仕上げる。底部はベタ高台で，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整である。242は口径9.1cm，器高3.7cm，底径5.0cmを測り，底部が比較的深い。口縁部は約70度の角度で立ち上がり，端部を細く仕上げる。底部は高さ0.3cmのベタ高台で，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整である。243は口径8.8cm，器高3.7cm，底径5.2cmを測り，242同様底部が比較的深い。口縁部は約66度の角度で立ち上がり，端部を丸く仕上げる。底部は平らで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整である。

SK－16

A区南部北よりで検出した楕円形の土坑で，SK－15に切られていた。長径1.48m，短径1.08m，深さ20cmを測り，長軸方向はN－1°26′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土で黄褐色火山灰土粒を若干含むものであった。出土遺物には弥生土器片2点，須恵器片2点，土師質土器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－17

A区南部で検出した不整円形の土坑で，壁際にピット2個が掘り込まれていた。長径1.08m，短径0.94m，深さ8cmを測り，長軸方向はN－82°10′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土で黒ボクを若干含むものであった。出土遺物には弥生土器片2点，土師質土器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－18

A区南部で検出した不整方形の土坑で，SK－19に掘り込まれていた。長辺2.56m，短辺2.23m，深さ7cmを測り，長軸方向はN－56°19′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈し，底面で数個のピットを検出した。埋土は暗灰色粘質土であった。出土遺物は比較的多く，弥生土器片24点，須恵器片25点，土師器片12点，土師質土器27点がみられ，須恵器(244)，土師器(245･256)，土師質土器(247)の4点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.40－244)

杯で，口径13.8cm，器高3.8cm，底径8.7cmを測る。口縁部は外上方に上がり，端部は細く仕上げる。底部外端にはハの字形に開く高さ0.4cmの高台が付く。底部外面は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。他は回転ナデ調整である。

土師器 (Fig.40－245･256)

245は杯で，口径16.7cmを測る。口縁部は外上方にのび，端部を丸く仕上げる。焼成が不良で，器面は摩耗する。256は甕で，口縁部と胴部の一部が残存する。口縁部は直立する胴部から外傾し，端部はやや内傾する浅い凹面をなす。口縁部はヨコナデ調整，胴部外面はハケ調整，内面はナデ調整を施す。

土師質土器 (Fig.40－247)

小皿で，口径7.7cm，器高1.1cm，底径6.2cmを測る。口縁部は短く外傾し，端部を丸く仕上げる。底部は平らで，外面は回転糸切りで板状圧痕が残る。他は回転ナデ調整で，内底面にナデ調整を加える。

SK－19 (Fig.39)

A区南部で検出した細長い不整方形の土坑で，SF－1～5を切って掘り込まれていた。長辺7.18m，短辺1.03m，深さ5cmを測り，長軸方向はN－24°51′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰色粘質土であった。出土遺物は比較的多く，弥生土器片22点，須恵器片18点，土師器片7点，土師質土器片32点，瓦質土器片10点，青磁片2点，土錘1点がみられ，弥生土器(248)，須恵器(249～252)，土錘(253)の6点が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.40－248)

248は小形器台で，口径8.6cmを測る。脚台部は欠失するが，杯部は浅く，内湾して上がり，端部は凹面をなす。口唇部はヨコナデ調整，他はナデ調整を施す。

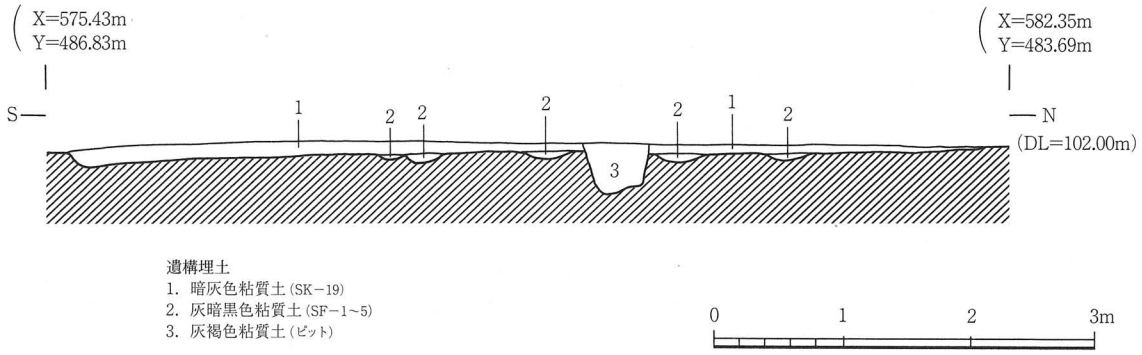


Fig.39 SK－19，SF－1～5セクション図

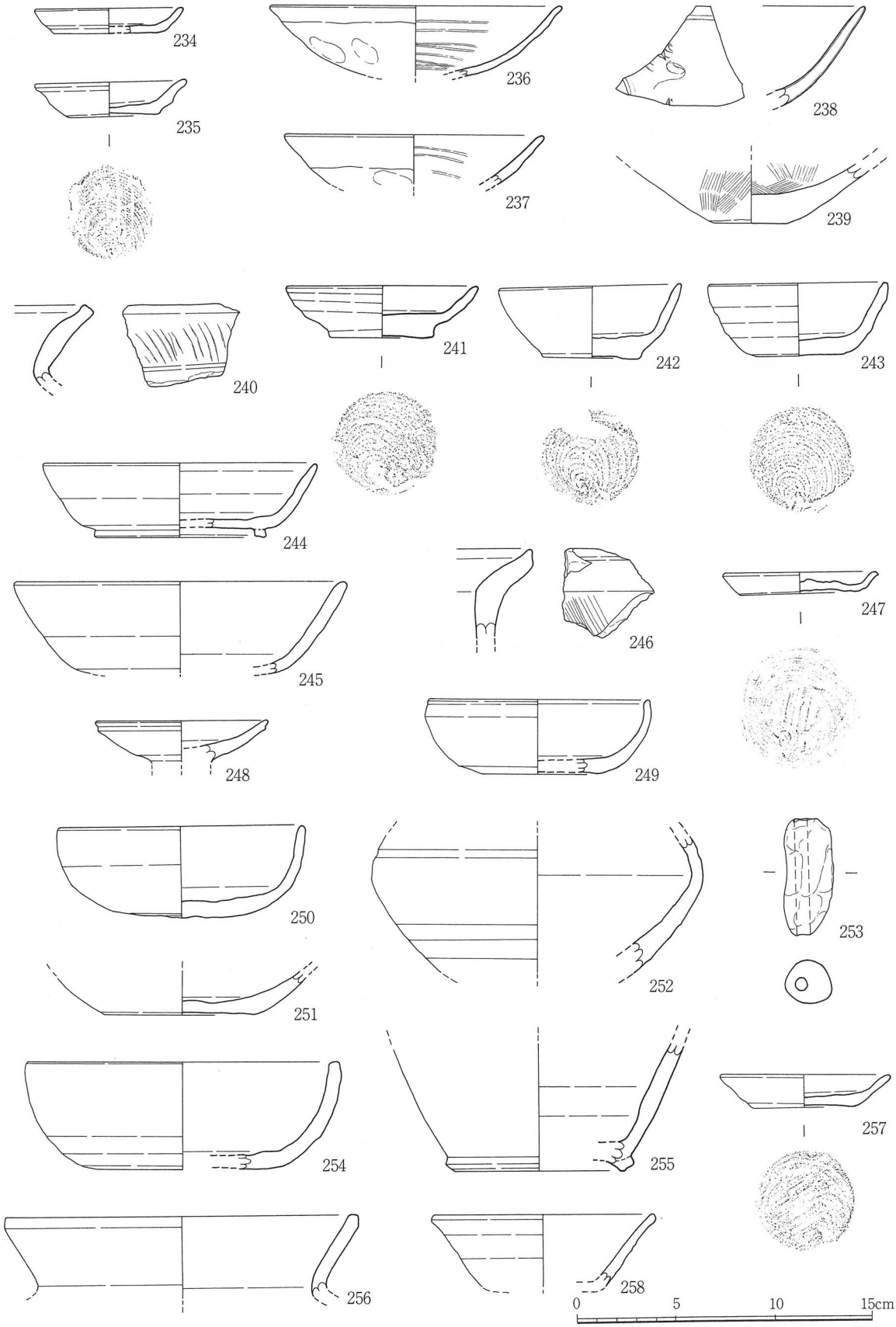


Fig.40 SB－2，SK－11・15・18～21出土遺物実測図

須恵器（Fig.40－249～252）

249～251は杯である。249･250は7世紀後半のものとみられ，口縁部は内湾して上がる。底部は回転ヘラ削り調整がなされる。249は口径11.2cm，器高3.7cm，底径5.8cm，250は口径11.4cm，器高4.7cm，底径6.5cmを測り，焼成はいずれも良く，249は灰黒色，250は灰色を呈する。251は底径7.8cmで，体部は内湾気味に上がる。底部は平らで，外面は回転糸切りとなる。内面は丁寧な回転ナデ調整，外面はナデ調整が施される。252は長頸壷の胴部とみられるもので，胴径は16.8cmを測る。胴部は中位より上で屈曲し底部に至る。屈曲部よりやや上に浅い凹線を1条巡らす。下胴部外面には回転ヘラ削り調整，他は回転ナデ調整を施す。

土製品（Fig.40－253）

円筒形の管状土錘で，長さ6.0cm，幅2.4cm，重さ29.4gを測る。

SK－20

A区南部で検出した不整方形の土坑で，SK－56･57に切られていた。長辺3.71m，短辺2.90m以上，深さ11cmを測り，長軸方向はN－24°57′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰色粘質土であった。出土遺物には須恵器27点，土師器片5点，土師質土器36点，瓦器片1点がみられ，須恵器（254～256），土師質土器（257）の4点が図示できた。

出土遺物

須恵器（Fig.40－254～256）

254は大形の杯で，口径15.8cm，器高5.5cm，底径9.2cmを測り，底部が深い。口縁部は体部から内湾気味に上がり，端部で真上を向く。底部は平らで，外面は回転ヘラ削り調整の後にナデ調整を加える。他は回転ナデ調整で，内面には自然釉が付着する。255は壷で，下胴部と底部の一部が残存する。体部は約66度の角度で立ち上がり，外面底部との境にはハの字形に大きく開く高さ0.7cmの高台が付く。器面は回転ナデ調整である。256は甕で，口縁部は外傾する。器面は回転ナデ調整を施す。焼成はやや不良で，器面は灰色を呈する。

土師質土器（Fig.40－257）

小皿で，口縁部を中心に歪みがあり，口径7.7～8.4cm，器高1.7cm，底径5.2cmを測る。口縁部は斜め上方にのび，端部は丸い，底部は平らで，外面は回転糸切りで板状圧痕がみられる。他は回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加える。

SK－21

A区南部で検出した不整楕円形の土坑で，3個のピットが掘り込まれていた。長径0.94m，短径0.20m以上，深さ17cmを測り，長軸方向はN－88°5′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰黒色粘質土に黄褐色火山灰土粒，褐白色～白色砂岩粒を含むものであった。出土遺物には弥生土器片8点，土師器片1点，土師質土器10点，瓦器片2点がみられ，土師質土器（258）1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.40－258）

杯で，口径11.2cmを測り，器高は約4.0cmとみられ，底部は深い。口縁部は外反気味に上がり，端部は内傾する平面をなす。器面は回転ナデ調整で，焼成は良くにぶい黄橙色を呈する。

SK－22

B区北部で検出した不整楕円形の土坑で，SB－1の西隣に位置する。長径1.72m，短径0.78m，深さ14cmを測り，長軸方向はN－5°43′－Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は灰黄色粘質土に砂岩粒を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－23

B区南部東端で検出した不整舟形の土坑であるが，明確な掘方を有さない。長辺3.50m，短辺0.51m，深さ34cmを測り，長軸方向はN－24°42′－Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は灰黄褐色砂礫土であった。出土遺物には須恵器片4点，土師質土器片1点，青磁片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－24

B区南部東端で検出した方形の土坑で，北壁にピット1個が掘り込まれていた。長辺2.00m，短辺1.60m，深さ11cmを測り，長軸方向はN－39°31′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片1点，土師質土器片7点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－25

B区南部東端で検出した不整楕円形の土坑で，SK－8を切っていた。長径1.40m，短径0.51m，深さ10cmを測り，長軸方向はN－17°30′－Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は灰黄褐色砂礫土であった。出土遺物には須恵器片3点，土師質土器片1点，青磁片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－26

B区南部東端で検出した不整方形の土坑で，ピット1個が掘り込まれていた。長辺1.79m，短辺1.27m，深さ13cmを測り，長軸方向はN－38°40′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片3点，土師質土器片5点，瓦器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

(4) 溝跡

SD－1 (Fig.28・41)

A区西端部で検出した南北溝で，区画をなす溝と考えられる。幅25～80cm，深さ8～30cmで，基底面はほぼ平坦で標高101.44～101.56mを測り，36.80mを検出した。断面形はU字形ないし逆台形を呈する。埋土は灰黒色粘質土で，場所によって黄褐色火山灰土の小ブロックを若干含んでいた。出土遺物には弥生土器片10点，須恵器片10点，土師器片5点，土師質土器片45点，瓦器片15点，青磁片3点，砥石1点がみられ，砥石(259)1点のみが図示できた。

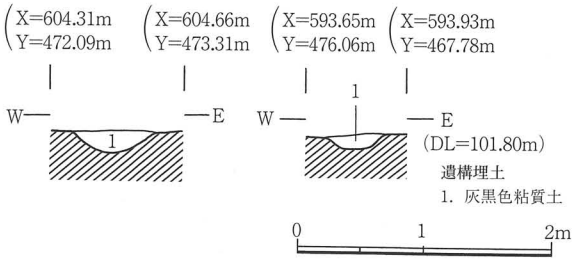


Fig.41 SD－1セクション図

出土遺物

石製品（Fig.44－259）

砂岩を使用した砥石である。二分の一以上は欠失するが，上面と3側面を使用している。

SD－2

A区中央部で検出したコの字状をなす溝で，小さな区画をなす溝と考えられ，SD－3の南側で重なる。幅35～80cm，深さ6～8cmで，基底面は南（101.85m）から北（101.68m）に向かってやや傾斜し，13.20mを検出した。断面形はU字形ないし逆台形を呈する。埋土は灰黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片1点，須恵器片1点，土師器片2点，土師質土器片9点がみられ，土師質土器（260）1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.44－260）

小皿で，底部が残存する。底径は2.5cmを測り，中央部に径1.3cmの円孔を焼成後外底面から穿つ。底部外面は回転糸切り底で，他は回転ナデ調整である。

SD－3（Fig.42）

A区中央部北よりで検出したコの字状をなす溝で，基本的には2条の溝が重なったものであるが，間に浅い落ち込みがみられることから本報告では同一のものとして扱った。まず，内側の溝は調査区ではL字状をなし，南側でSD－2に切られる。幅26～70cm，深さ8～17cmで，基底面は北の角を頂点（102.04m）に西（101.78m）と南（101.92m）に向かってやや傾斜し，11.20mを検出した。外側の溝もL字状をなし，幅50～98cm，深さ5～18cmで，基底面は北の角を頂点（102.05m）に西（101.71m）と南（101.94m）に向かってやや傾斜し，19.20mを検出した。断面形はU字形ないし逆台形を呈する。これらを包括するように北の角から南に，幅1.50～2.50m，深さ10～25cmの比較的浅い掘り込みがみられる。埋土は黒褐色粘質土ないし灰黒色粘質土を基調に数層に分層される。出土遺物は比較的多く弥生土器片5点，須恵器片13点，土師質土器片95点，瓦器片32点，青磁片6点，石鍋1点がみられ，須恵器（261･262），土師質土器（263･264），瓦器（265～271），青磁（272～274），石鍋（275）の15点が図示できた。

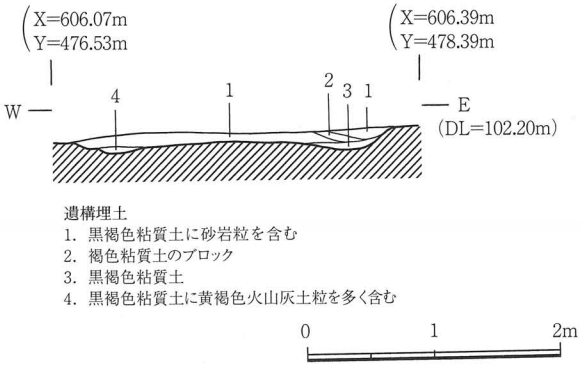


Fig.42 SD－3セクション図

出土遺物

須恵器（Fig.44－261・262）

261は杯蓋で，口縁部はほぼ平らな天井部から斜め下方に緩やかに下り，端部を下方に小さく屈曲さす。器面は回転ナデ調整が施される。262は円筒形の器形を呈するもので，高杯の脚台ではないかとみられる。真下に下る脚台外面には1条の凹線が施される。

土師質土器（Fig.44－263・264）

2点とも小皿である。263は口径7.3cm，器高1.3cm，底径6.2cmを測り，口縁部は短く斜め上方を向き，端

部は丸い。底部はやや中窪みで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整である。264は口径7.4cm，器高1.9cm，底径4.8cmを測り，比較的深い底部を有す。口縁部は外反気味にのび，端部は丸い。底部は平らで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整である。

瓦器（Fig.44－265～271）

265～270は椀で，形態，成形技法はほぼ同じである。内面にはヘラ磨きが施され，口縁部外面には一段のヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。265は口径13.6cm，器高3.5cm，底径3.9cmを測り，底部外面には断面形逆台形状の高台が付く。内面には平行線状と連結輪状のヘラ磨きが認められる。266は口径14.3cm，器高4.6cm，底径5.2cmを測り，底部が比較的深い。底部外面には扁平な高台が付く。内面には平行線状と連結輪状のヘラ磨きが部分的に施される。267は口径15.0cmを測り，器高が約3.7cmとみられるものである。内面は摩耗しており，ヘラ磨きは不明である。268は口径13.8cmを測り，器高が約3.5cmとみられるものである。内面には連結輪状のヘラ磨きが3条認められる。色調は，他の瓦器が灰色ないし暗灰色であるのに対し褐色を呈する。269は口縁部の破片で，内面には連結輪状と平行線状のヘラ磨きが部分的にみられる。270は体部から底部の破片で，底部外面には断面形逆台形状の小さな高台が付く。内面には平行線状のヘラ磨きが4条認められる。271は小皿で，口径8.4cm，器高2.1cmを測る。口縁部は丸い底部からそのまま内湾して上がり，端部を丸く仕上げる。口縁外部から内面にかけてヨコナデ調整を施し，体部外面には指頭圧痕が残る。

青磁（Fig.44－272～274）

いずれも碗で，272は口径16.6cmを測り，内面に劃花文を施す。器面には0.1～0.2mmの厚さにオリーブ色の釉を施す。また，器面には貫入がはいる。273は口径15.8cm，器高6.0cm以上を測る。器面は無文で，0.1mmの厚さに濃緑色の釉を施す。274は底部の破片で，外面は削り出し高台となり，見込から畳付外側にかけて0.2～2.0mmの厚さにオリーブ色の釉を施す。

石製品（Fig.44－275）

石鍋で，口縁部の一部が残存する。口縁部はやや内傾し，外面には鑿の痕が比較的良く残る。

SD－4

A区南部で検出した東西溝で，SD－1との関連が考慮される。幅38cm，深さ6cmで，基底面は南（101.73m）から北（101.68m）に向かってやや傾斜し，2.80mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は黒ボクを若干含む灰黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片7点，須恵器片2点，土師質土器片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SD－5

A区南部で検出した東西溝で，SD－4同様SD－1との関連が考慮される。幅57cm，深さ8cmで，基底面はほぼ平坦で標高101.62m前後を測り，2.00mを検出した。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒ボクを若干含む灰黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片5点，須恵器片4点，土師質土器片7点，瓦器片1，瓦質土器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SD－6（Fig.43）

B区南部で検出した東西溝である。幅32～50cm，深さ5cm前後で，基底面は東（100.96m）から西（100.81m）に向かってやや傾斜し，10.08mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は灰黄褐色砂礫

土であった。出土遺物には須恵器片3点，土師質土器片18点，瓦器片3点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SD－7 (Fig.43)

B区南部で検出した東西溝で，東端が南に振っている。幅32～50cm，深さ5cm前後で，基底面は東(100.82m)から西(100.77m)に向かってやや傾斜し，9.92mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は灰黄褐色砂礫土であった。出土遺物には須恵器片9点，土師質土器片59点，瓦器片10点がみられ，須恵器(276)と土師質土器(277)の2点が図示できた。

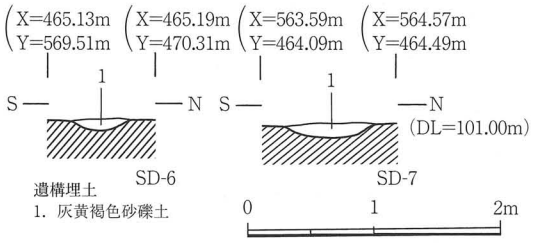


Fig.43 SD－6･7セクション図

出土遺物

須恵器 (Fig.44－276)

杯で，底径8.4cmとやや大形である。底部はベタ高台となる。器面は摩耗しており，調整は不明である。

土師質土器 (Fig.44－277)

小皿で，底径5.0cmを測る。底部は中窪みで，外面は回転糸切りとなる。他は摩耗しており調整不明である。

(5) 畝状遺構

SF－1 (Fig.39)

A区南部で検出した東西の畝状遺構で，SK－19に切られ，約50cm南にはSF－2がある。遺構は溝状をなし，幅38～45cm，深さ5～10cmで，2.84mを検出した。断面形は舟底状を呈す。埋土は灰暗黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片4点，須恵器片6点，土師質土器片17点，瓦器片2点がみられ，須恵器(278)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.44－278)

小皿で，口径7.4cm，器高1.8cm，底径5.9cmを測る。口縁部は内湾気味に上がり，端部は丸い。底部は平らで外面は回転糸切り底となる。他は回転ナデ調整である。器面は灰色ないし灰黄色を呈する。

SF－2 (Fig.39)

A区南部で検出した東西の畝状遺構で，SK－19に切られ，約60cm南にはSF－3がある。遺構は溝状をなし，幅28～40cm，深さ8cm前後で，4.74mを検出した。断面形は舟底状を呈す。埋土は灰暗黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片12点，須恵器片4点，土師器片6点，土師質土器片6点，土錘片1点がみられ，土錘(279)1点が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.44－279)

円筒形の管状土錘である。残存長5.3cm，厚さ2.1cmを測る。

SF－3 (Fig.39)

A区南部で検出した東西の畝状遺構で，SK－19に切られ，約60cm南にはSF－4がある。遺構は溝状をなし，幅30～40cm，深さ5cm前後で，3.02mを検出した。断面形は舟底状を呈す。埋土は灰暗黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片8点，須恵器片2点，土師器片8点，土師質土器片10点がみられ，須恵器(280)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.44－280)

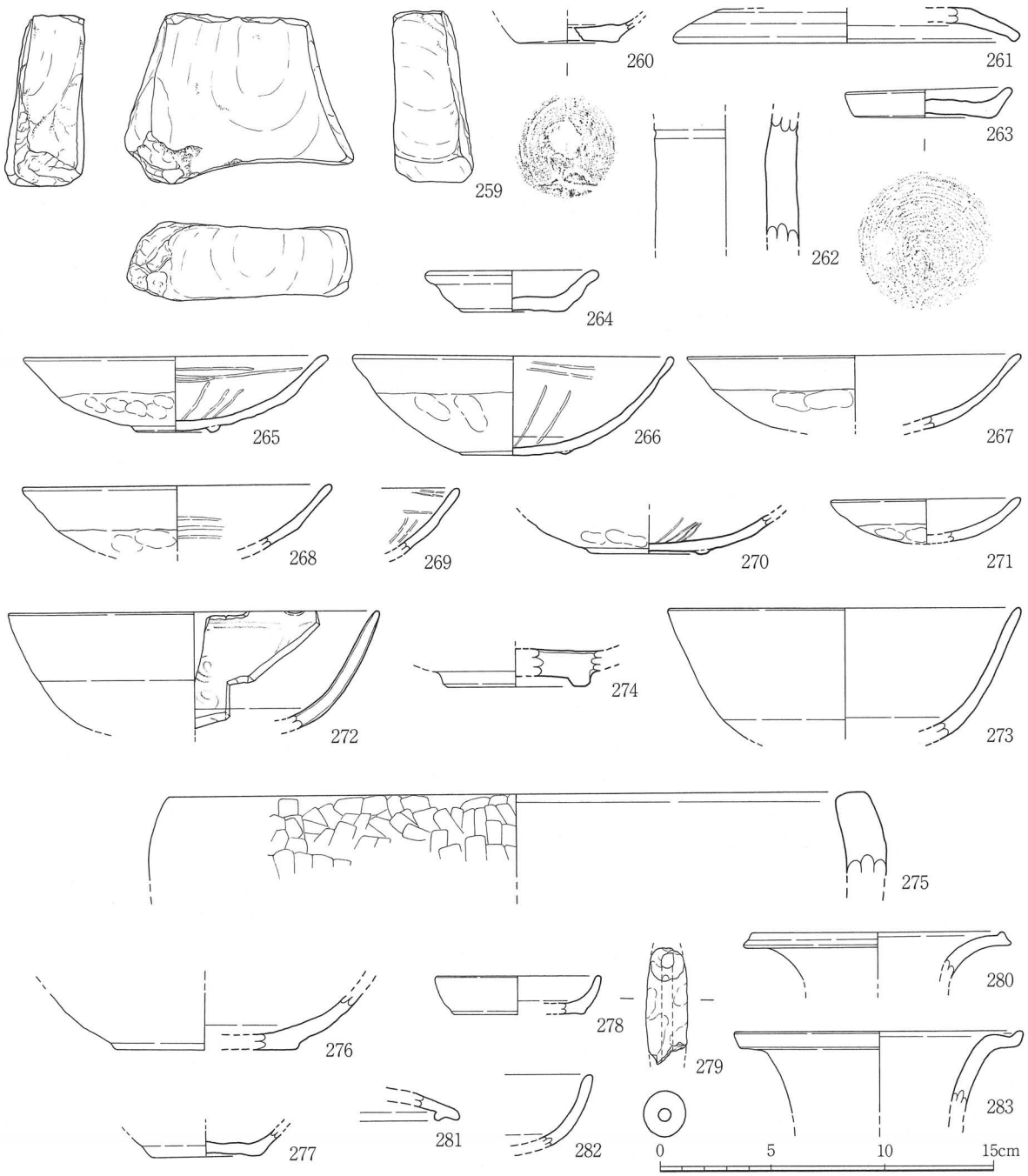


Fig.44 SD－1～3･7，SF－1～4出土遺物実測図

長頸壷の口縁部とみられるもので，口縁部は頸部から大きく外反し，端部上方を小さく拡張する。その端部は内傾する凹面をなす。焼成不良で，器面は浅黄色を呈する。

SF－4 (Fig.39)

A区南部で検出した東西の畝状遺構で，SK－19に切られ，SF－5を切っている。遺構は溝状をなし，幅30～40cm，深さ8～12cmで，4.97mを検出した。断面形は舟底状を呈す。埋土は灰暗黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片9点，須恵器片22点，土師器片5点，土師質土器片36点がみられ，須恵器(281～283)3点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.44－281～283)

281は杯蓋で，かえりのある口縁部が残存する。器面は回転ナデ調整で，焼成は良く灰色を呈する。282は杯身で，内湾する口縁部が残存する。器面は回転ナデ調整で，外面には自然釉がかかる。焼成は良く，器面は灰色を呈する。283は長頸壷の口縁部で，口径12.8cmを測る。口縁部は外傾して上がった後水平に屈曲し，端部を上方に拡張する。器面は回転ナデ調整で，焼成不良で，褐色系の色調を呈する。

SF－5 (Fig.39)

A区南部で検出した東西の畝状遺構で，SK－19とSF－4に切られる。遺構は溝状をなし，幅35～48cm，深さ5m前後で，1.78mを検出した。断面形は舟底状を呈す。埋土は灰暗黒色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片4点，須恵器片1点，土師器片1点，土師質土器片4点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

(6) ピット

P－5 (Fig.45)

A区北部で検出したピットである。一辺64～75cmの方形で，深さ10cmを測る。埋土は暗灰褐色砂性粘質土であった。出土遺物には土師質土器3点，瓦器2点がみられ，土師質土器(284･285)，瓦器(286･287)の4点が図示でき，良好なセット関係と捉えることができるものである。

出土遺物

土師質土器 (Fig.46－284・285)

2点とも小皿である。284は口径8.0cm，器高1.2cm，底径6.4cmを測り，口縁部は短く外上方を向き，端部を丸く仕上げる。底部はやや中窪みで，外面は回転糸切りで板状圧痕が残る。他は回転ナデ調整である。285は口径8.0cm，器高1.3cm，底径6.5cmを測り，口縁部は短く外上方を向き，端部を丸く仕上げる。底部は若干中窪みで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整である。

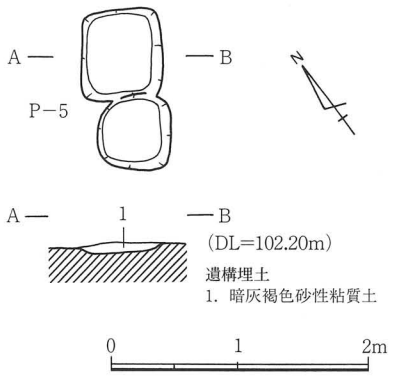


Fig.45 P－5

瓦器 (Fig.46－286・287)

2点とも椀で，内面にはヘラ磨き，口縁部外面には一段のヨコナデ調整を施し，体部外面には指頭圧痕が残る。286は口径14.5cm，器高4.0cm，底径4.4cmを測り，底部外面に逆蒲鉾状の扁平な高台

が付き，内面には連結輪状のヘラ磨きを施す。287は口径14.6cm，器高3.3cm，底径3.8cmを測り，底部外面に逆蒲鉾状の扁平な高台が付き，内面には連結輪状のヘラ磨きを部分的に施す。

P－6

A区中央部北よりで検出したピットである。径38cmの円形で，深さ24cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片1点，瓦器片1点，東播系須恵器1点がみられ，東播系須恵器(288)1点が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.46－288)

片口鉢の口縁部が残存する。口縁部が外上方にのび，端部下端を下方に拡張する。器面は回転ナデ調整を施す。

P－7

A区中央部西よりで検出したピットである。径25cmの円形で，深さ32cmを測り，径15cmの柱痕が残存する。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器2点がみられ，この内の1点(289)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.46－289)

杯で，口径12.8cm，器高3.9cm，底径3.8cmを測る。口縁部は体部からそのまま外上方にのび，端部を丸く仕上げる。底部は平らで，外面は回転糸切りである。他は回転ナデ調整を施す。

P－8

A区中央部P－7の東約2mのところで検出したピットである。径35cmの円形で，深さ68cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器8点，瓦器2点がみられ，土師質土器(290)と瓦器(291)の2点が図示でき，良好なセット関係と捉えることができるものである。

出土遺物

土師質土器 (Fig.46－290)

杯で，底径6.4cmを測る。体部は外上方を向き，底部は平らで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整を施す。

瓦器 (Fig.46－291)

椀で，口径15.5cmを測る。内面には連結輪状のヘラ磨きが5条，口縁部外面にはヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕が認められる。

P－9

A区中央部北よりで検出したピットで，SA－13の柱穴に切られていた。径27cmの円形で，深さ51cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片1点，瓦器1点がみられ，この内の瓦器(292)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.46－292)

椀で，口径13.0cmを測る。内面には連結輪状のヘラ磨きが4条，口縁部外面にはヨコナデ調整，体部

外面には指頭圧痕が認められる。

P－10

A区中央部SD－9の掘削後に検出したピットである。径28cmの円形で，深さ35cmを測り，径10cmの柱痕が残存する。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片3点，瓦器2点がみられ，瓦器(293)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器（Fig.46－293）

椀で，口径13.0cmを測る。内面には連結輪状のヘラ磨きが6条，口縁部外面にはヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕が認められる。

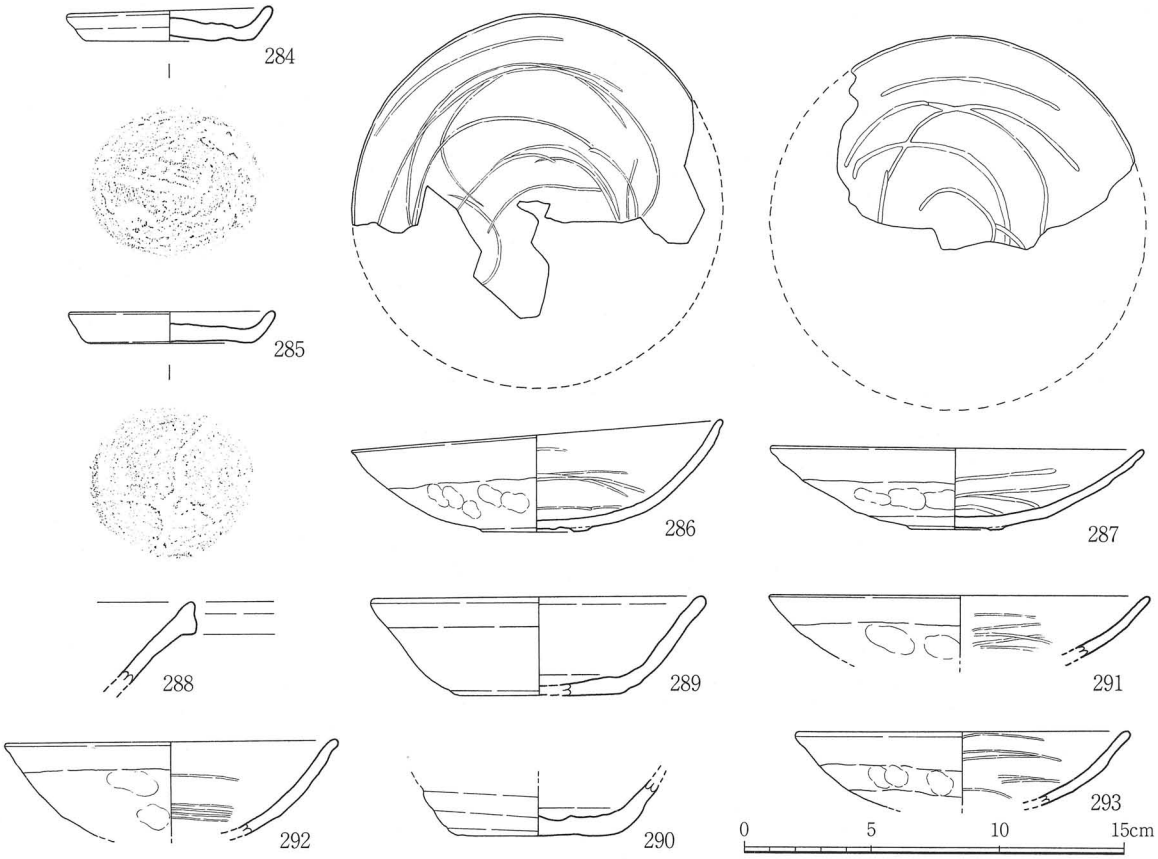


Fig.46 P－5～10出土遺物実測図

P－11

A区中央部SD－3の底面で検出したピットである。径38～56cmの楕円形で，深さ27cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には須恵器1点，土師質土器片3点がみられ，須恵器(294)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器（Fig.47－294）

小皿で，底径4.2cmを測る。体部が外上方を向き，底部は平らで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整である。

P－12

A区中央部で検出したピットである。径30cmの円形で，深さ37cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片2点，瓦器1点，青磁片1点がみられ，瓦器(295)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.47－295)

椀で，口径12.8cmを測る。内面には連結輪状のヘラ磨きが7条，口縁部外面にはヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕が認められる。底部外面には断面逆三角形状の扁平な高台が付く。焼成は良いが，内面はにぶい黄橙色を呈する。

P－13

A区中央部でSD－9の掘削後に検出したピットである。径50～60cmの楕円形で，深さ19cmを測る。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器5点，瓦器片1点がみられ，土師質土器(296)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.47－296)

小皿で，口径7.2cm，器高1.4cm，底径6.0cmを測る。口縁部は短く外上方を向き，底部は中窪みで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整を施す。

P－14

A区中央部で検出したピットである。径40cmの円形で，深さ35cmを測り，径21cmの柱痕が残存する。埋土は黒褐色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片1点，土師質土器片1点，瓦器1点がみられ，瓦器(297)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.47－297)

椀で，口径13.8cmを測る。内面には連結輪状と平行線状のヘラ磨きがみられ，口縁部外面にはヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕が認められる。

P－15

A区南部で検出したピットで，SB－14の南西隅の柱穴に切られていた。径32cmの円形で，深さ24cmを測る。埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には弥生土器片5点，土師質土器片1点，東播系須恵器1点がみられ，東播系須恵器(298)1点が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.47－298)

片口鉢で，口縁部の破片である。口縁部は外上方にのび，端部下端を下方に若干拡張する。焼成は良く，器面は灰白色を呈する

P－16

A区南部東よりで検出したピットである。径38～45cmの円形で，深さ65cmを測る。埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には土師質土器片14点，瓦器2点がみられ，土師質土器(299～301)，瓦器(302)の4点が図示でき，良好なセット関係と捉えることができる。

出土遺物

土師質土器（Fig.47－299～301）

299は小皿で，口径7.1cm，器高1.8cm，底径5.2cmを測る。口縁部は外上方を向き，底部は中窪みで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加える。300･301は杯である。300は底径7.5cmで，底部外面は回転糸切りである。他は回転ナデ調整を施す。301は口径12.6cm，器高3.8cm，底径9.0cmを測る。口縁部は内湾気味にのびる体部から外傾し，端部を細く仕上げる。底部はベタ高台状で，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整である。

瓦器（Fig.47－302）

皿で，口径11.8cmを測り，器高は約1.8cmとみられる。内面には平行線状のヘラ磨き，口縁部外面にはヨコナデ調整，体部外面には指頭圧痕の上にナデ調整が施される。

P－17

A区南部で検出したピットである。径35cmの円形で，深さ55cmを測る。埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には土師質土器片9点，瓦器片1点がみられ，土師質土器（303･304）2点が図示できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.47－303･304）

2点とも小皿である。303は口径7.2cm，器高1.6cm，底径5.2cmを測り，底部外面は回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。内底面には回転ナデ調整の後にナデ調整を加える。304は口径6.8cm，器高1.5cm，底径5.2cmを測り，底部外面は回転糸切りである。他は回転ナデ調整を施す。

P－18

A区南部で検出したピットである。径33cmの円形で，深さ45cmを測る。埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には弥生土器片1点，須恵器2点，土師質土器片3点がみられ，須恵器（305）1点が図示できた。

出土遺物

須恵器（Fig.47－305）

杯で，底径7.4cmを測る。体部は内湾気味に上がり，平らな底部外端には高さ0.5cmの高台が付く。底部外面は回転ヘラ切りで，他は回転ナデ調整を施す。

P－19

A区南部で検出したピットである。径35cmの円形で，深さ32cmを測り，径15cmの柱痕が残存する。埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には弥生土器片3点，須恵器片1点，土師質土器片2点がみられ，弥生土器（306）1点が図示できた。

出土遺物

弥生土器（Fig.47－306）

壷で，口径12.0cmを測る。口頸部は真上にやや外反してのび，端部は内傾する平面をなす。胴部は頸部から緩やかに外下方に下る。口縁部にはヨコナデ調整，胴部外面にはナデ調整，内面にはヘラ削りが施される。

P－20

A区南部で検出したピットである。径28cmの円形で，深さ37cmを測る。埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には土師質土器4点，青磁片1点がみられ，土師質土器(307)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.47－307)

小皿で，口径6.4cm，器高1.7cm，底径5.6cmを測る。口縁部は外上方にのび，端部は丸い。底部外面は回転糸切りで，他は回転ナデ調整を施す。

P－21

A区南部で検出したピットである。径38cmの円形で，深さ50cmを測る。埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には須恵器片1点，土師質土器1点，青磁片1点がみられ，土師質土器(308)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.47－308)

杯で，口径12.4cm，器高3.4cm，底径7.6cmを測る。口縁部は内湾気味に上がる体部からそのまま上がり，端部を丸く仕上げる。底部外面は回転糸切りで，他は回転ナデ調整である。

P－22

A区南部で検出したピットで，底面で2個のピットが検出された。径65～70cmの不整円形で，深さ9cmを測る。埋土は黒ボクを主体とする灰黒色粘質土で黄褐色火山灰土粒を少量含んでいた。出土遺物には須恵器片1点，土師器片1点，瓦器片1点，砥石1点がみられ，砥石(309)1点が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.47－309)

砂岩を利用した砥石で，4面を使用する。全長10.7cm，全幅3.7cm，全厚2.0cm，重さ143.8gを測る。

P－23

B区中央部で検出したピットで，SK－9を切って掘り込まれていた。径42cmの円形で，深さ38cmを測る。埋土は黒ボクを含む礫混灰黒色粘質土であった。出土遺物には土師質土器2点がみられ，この内の1点(310)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.47－310)

小皿で，口径8.7cm，器高1.4cm，底径6.0cmを測る。口縁部は斜め上方にのび，端部は丸い。底部外面は回転糸切りで，他は回転ナデ調整を施す。

P－24

B区中央部で検出したピットである。径32～35cmの不整円形で，深さ40cmを測る。埋土は黒ボクを含む礫混灰黒色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片12点がみられ，この内の1点(311)が図示できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.47－311）

小皿で，口径7.2cm，器高1.4cm，底径4.5cmを測る。口縁部は斜め上方にのび，端部は丸い。底部はやや中窪みで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整を施す。

P－25

B区中央部東よりで検出したピットである。径30cmの円形で，深さ47cmを測り，径15cmの柱痕が残存する。埋土は黒ボクを含む礫混灰黒色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片7点，瓦器片1点がみられ，土師質土器（312）1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.47－312）

小皿で，口径9.0cm，器高1.7cm，底径5.2cmを測る。口縁部は斜め上方にのび，端部は丸い。底部はほぼ平らで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整を施す。

P－26

B区中央部で検出したピットである。径28cmの円形で，深さ40cmを測る。埋土は黒ボクを含む礫混灰黒

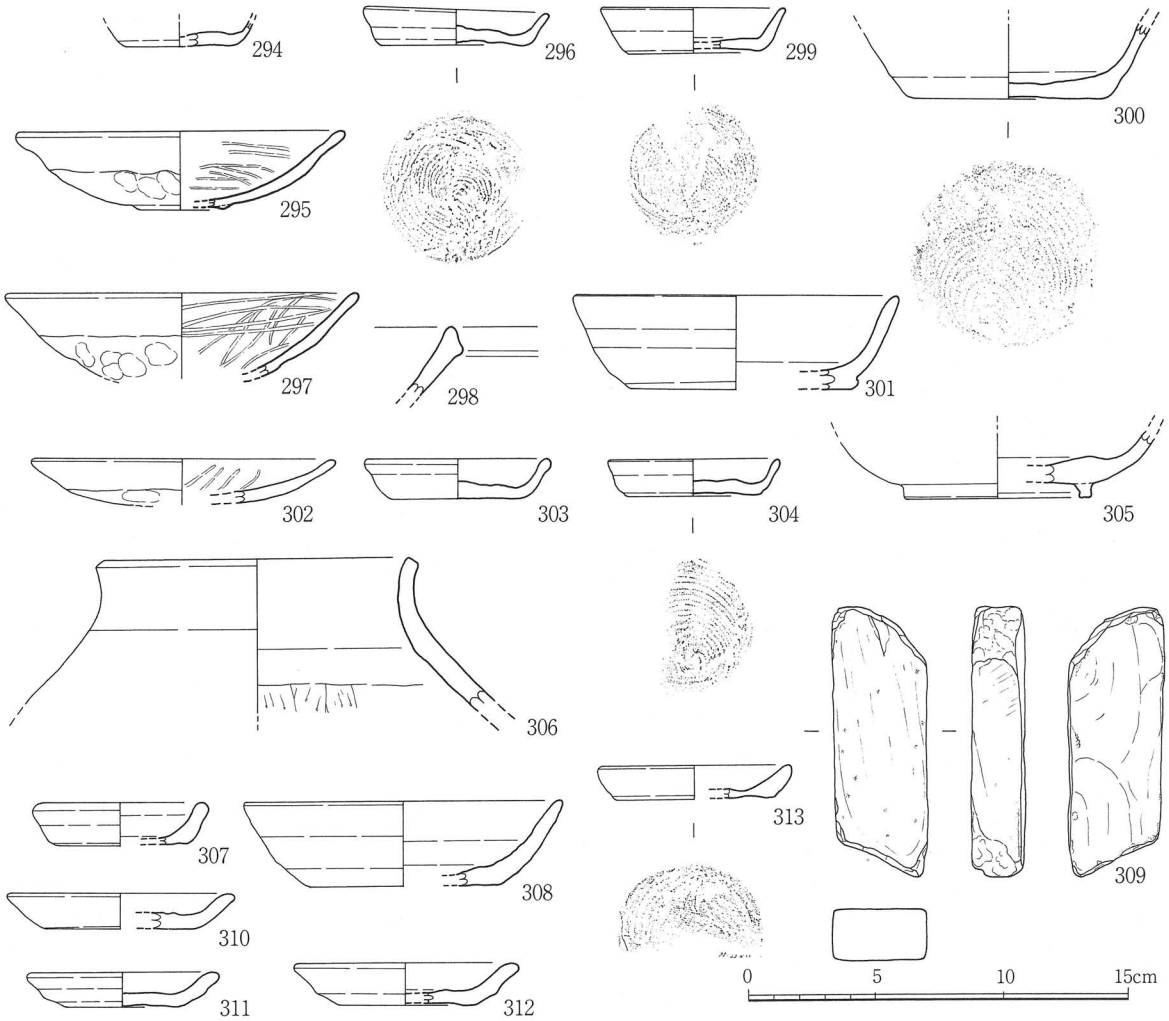


Fig.47 P－11～26出土遺物実測図

色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片8点，瓦器片1点がみられ，土師質土器(313)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.47－313)

小皿で，口径7.4cm，器高1.3cm，底径6.3cmを測る。口縁部は外上方に短くのび，端部は細い。底部は平らで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整を施す。

4．近世以降

A区北部から中央部およびC区で認められた。今回の調査で遺構数が最も多く，A区が居住空間になっていたものと考えられる。また，遺構が中世以前の遺物包含層並びに遺構を掘削していることから弥生土器から当該期までの遺物を含んでおり，量的には中世以前のものが多く見受けられた。今回の調査で確認された遺構には掘立柱建物10棟，塀又は柵列跡13条，土坑33基，溝跡4条，ピット13個等がある。

(1) 掘立柱建物跡

SB－6 (Fig.48)

A区北端部で検出した梁間2間(3.00～3.40m)，桁行2間(3.70m)の東西棟総柱建物である。SB－7と重なり，SA－7～9の南側に位置する。棟方向はN－81～89°－Wである。柱間寸法は梁(南北)が1.40～1.90mと区々で，桁行(東西)が1.80mと1.90mである。柱穴は径20～40cmの円形で，柱径は10～15cmとみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を多量に含むものであった。出土遺物は皆無であった。

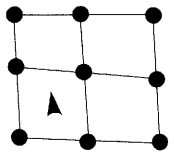


Fig.48 SB－6

SB－7 (Fig.49)

A区北端部で検出した梁間1間(2.60m)以上，桁行5間(9.70m)の南北棟建物であり，東側には山が迫っていることから梁間は2間ではないかと考えられる。SB－8と南側で重なる。棟方向はN－1°－Wである。柱間寸法は梁(東西)が2.60mで，桁行(南北)が1.80m～2.10mと区々である。柱穴は径40～50cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を多量に含むものであった。出土遺物には石臼3点，肥前系磁器片1点，瓦片1点があり，西側柱北から2間目の柱穴から出土した石臼(314)，北西隅の柱穴から出土した石臼(315･316)の3点が図示できた。

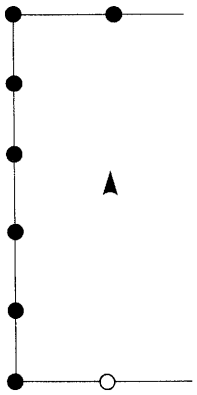


Fig.49 SB－7

出土遺物

石製品 (Fig.51－314～316)

いずれも石臼の下臼部分である。314は約四分の一が残存し，径は約25.0cmとみられる。擦目は摩滅する。315は約二分の一が残存し，径は約30.0cmとみられる。擦目は比較的良く残る。316は径28.7cm，厚さ6.8cmを測り，4～5本単位で斜行する条線が8箇所認められる。

SB－8 (Fig.50)

A区北端部で検出した梁間2間(4.10m)，桁行2間(3.90m)以上の東西棟建物であり，東側には山が迫っていることから桁行は3間ではないかと考えられる。SB－7の南側と重なる。棟方向はN－89°－Eである。柱間寸法は梁(南北)が2.00mと2.10mで，桁行(東西)が1.80m～2.10mと区々である。柱穴は径40cm前後の円形で，柱径は約20cmとみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を多量に含むものであった。出土遺物には近世陶器2点があり，南西隅の柱穴から出土した1点(317)が図示できた。

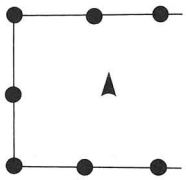


Fig.50 SB－8

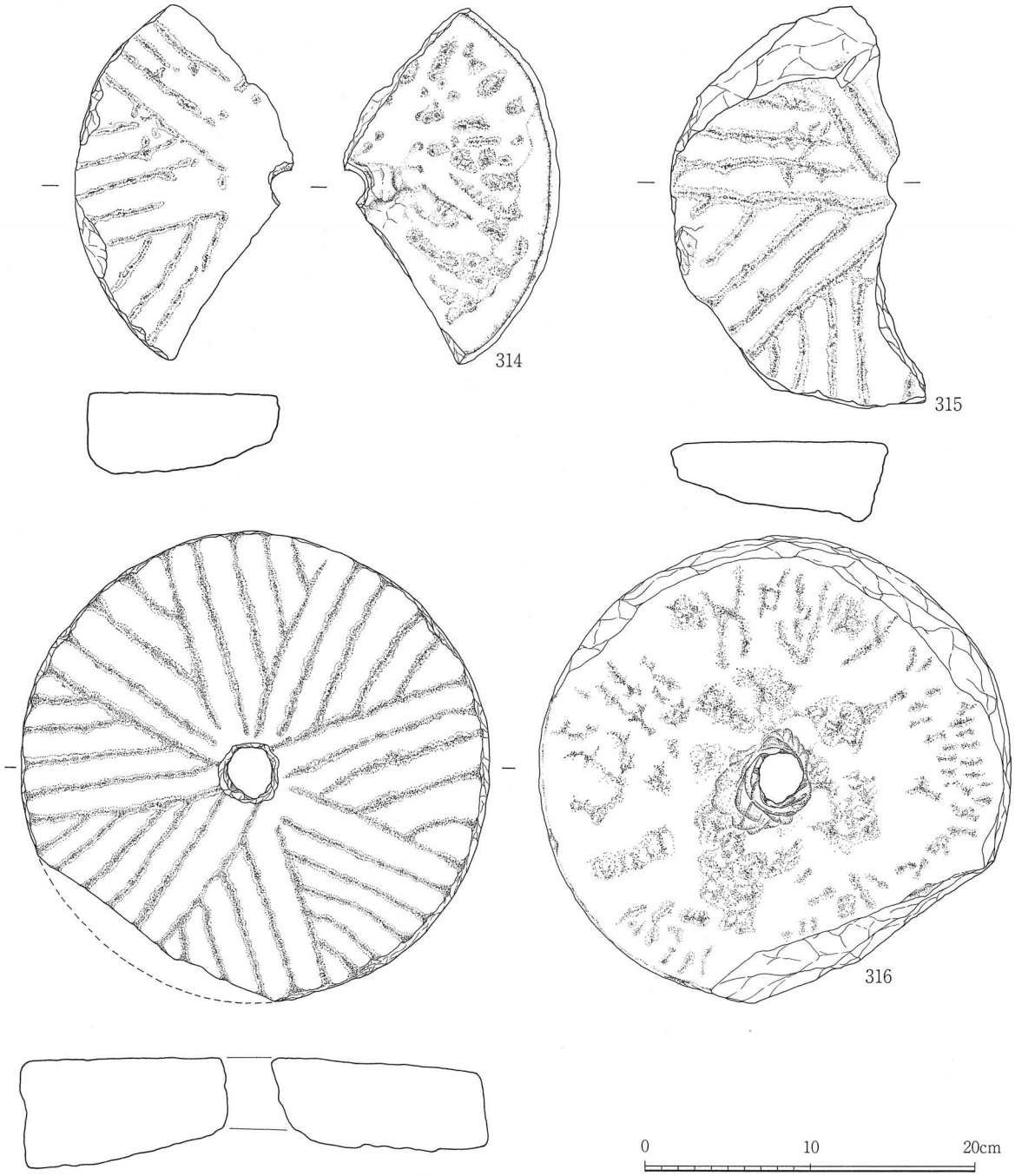


Fig.51 SB－7出土遺物実測図

出土遺物

近世陶器 (Fig.59－317)

碗で，底径5.4cmを測る。体部は内湾気味にのび，底部は高さ1.0cmの削り出し高台となる。器面には0.1mmの厚さに灰白色の釉を施し，畳付は釉ハギが行われる。器面には貫入がみられる。

SB－9 (Fig.52)

A区中央部北よりで検出した梁間2間(3.80m)，桁行5間(9.10m)の身舎に東庇付きの東西3間(4.80m)，南北5間(9.10m)の南北棟建物であり，北妻柱の1個と東側柱の2個の柱穴が未確認である。南妻柱がSB－10の北妻柱と重複する。棟方向はN－5°－Eである。柱間寸法は梁(東西)が1.00～2.40mと区々で，桁行(南北)が1.70mと1.90mで互い違いに配置されている。柱穴は径30～50cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺物には須恵器片1点，土師質土器片4点，備前焼1点，青磁片1点，肥前系陶器2点があり，身舎の東側柱北から2間目の柱穴から出土した備前焼(318)と東側柱北から2間目の柱穴から出土した肥前系陶器(319)の2点が図示できた。

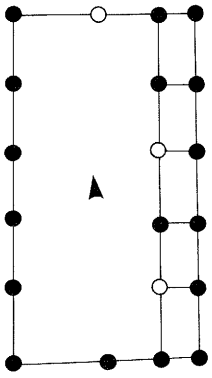


Fig.52 SB－9

出土遺物

備前焼 (Fig.59－318)

壷の口縁部の破片である。ほぼ直立する口縁部は玉縁状をなす。

肥前系陶器 (Fig.59－319)

唐津の碗で，底径4.6cmを測る。体部は外上方にのび，底部は高さ0.5cmの削り出し高台となる。内面には淡緑色の釉を施し，見込には砂目がみられる。

SB－10 (Fig.53)

A区中央部北よりで検出した梁間2間(4.00m)，桁行2間(4.85m)の身舎に東庇付きの東西3間(4.80m)，南北2間(4.85m)の南北棟建物である。北妻柱がSB－10の南妻柱と重複する。棟方向はN－2°－Eである。柱間寸法は梁(東西)が0.80～2.00mと区々で，桁行(南北)が1.95mと2.90mである。柱穴は径40～50cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺物には須恵器片3点，土師質土器片5点，青磁1点，近世陶器片2点，瓦片1点があり，北西隅の柱穴から出土した青磁(320)1点が図示できた。

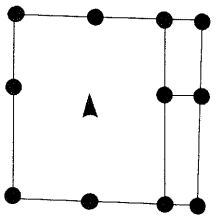


Fig.53 SB－10

出土遺物

青磁 (Fig.59－320)

碗で，口径は13.6cmとみられる。外面には鎬蓮弁文が施され，器面には0.1mmの厚さに灰オリーブ色の釉を施す。

SB－11 (Fig.54)

A区中央部北よりで検出した梁間1間(1.50m)，桁行3間(5.60～5.80m)と細長くやや歪みのある南北棟建物である。SB－9･10と重なっている。棟方向はN－15～16°－Wである。柱間寸法は梁(東西)が1.50mで，桁行(南北)が1.50～2.10mと区々である。柱穴は径25～30cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小礫を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片3点，瓦器片1点，青磁片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

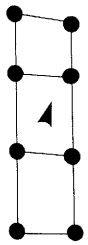


Fig.54 SB－11

SB－12 (Fig.55)

A区中央部南よりで検出した梁間2間(3.40～3.50m)，桁行2間(5.55～5.90m)と歪みのある南北棟建物である。SA－14が西に隣接する。棟方向はN－24°－Wである。柱間寸法は梁(東西)が1.70mと1.80mで，桁行(南北)が2.40～3.15mと区々である。柱穴は径22～30cmの円形で，柱径は10～15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を僅かに含むものであった。出土遺物は皆無であった。

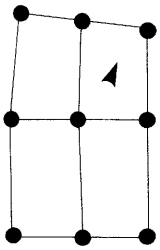


Fig.55 SB－12

SB－13 (Fig.56)

A区中央部，東端で検出した梁間1間(2.90m)，桁行2間(5.55m)の南北棟建物であり，南東隅の柱穴は確認していない。SA－15･16の北隣に位置する。棟方向はN－22°－Wである。柱間寸法は梁(東西)が2.90mで，桁行(南北)が2.40～2.90mと区々である。柱穴は径20～25cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を多量に含むものであった。出土遺物は皆無であった。

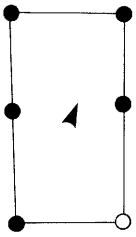


Fig.56 SB－13

SB－14 (Fig.57)

A区南部で検出した梁間2間(4.00m)，桁行4間(8.60m)の東西棟建物である。SB－9･10と重なっている。棟方向はN－71°－Eである。柱間寸法は梁(南北)が1.80～2.20mで，桁行(東西)が1.80～2.40mと区々である。柱穴は径30～52cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺物には弥生土器片8点，須恵器片1点，土師質土器片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

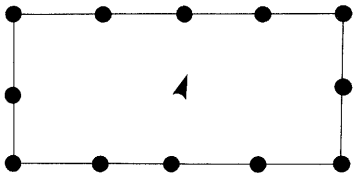


Fig.57 SB－14

SB－15 (Fig.58)

A区南部で検出した梁間1間(2.40m)，桁行1間(2.60m)の南北棟建物であり，SA－17の柱穴と一部重複する。棟方向はN－16°－Wである。柱穴は径28～40cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺物には弥生土器片2点，須恵器片2点，土師器片1点，土師質土器片6点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

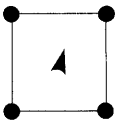


Fig.58 SB－15

Tab.3 掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模				面積 (m²)	棟方向 (Nは真北)	備考
	梁×桁 (間)(間)	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁(m)	桁(m)			
SB－1	2×2	3.60×3.75～4.05	1.65, 1.95	1.65～2.10	14.04	N－87～88°－E	総柱
SB－2	2×3	4.65～4.80×6.00～6.10	2.25, 2.40	1.80～2.10	28.59	N－4～5°－E	間仕切柱
SB－3	2×3	4.20×5.55	2.10	1.65～2.10	23.31	N－18°－W	総柱
SB－4	2×3	4.20～4.40×6.20～6.45	1.80～2.60	1.95～2.25	27.20	N－74～75°－W	間仕切柱
SB－5	2×2	2.30×4.70	0.90～1.40	2.10, 2.60	10.81	N－87°－E	
SB－6	2×2	3.00～3.40×3.70	1.40～1.90	1.80, 1.90	12.40	N－81～89°－W	総柱
SB－7	1以上×5	(2.60)×9.70	2.60	1.80～2.10	14.90	N－1°－W	
SB－8	2×2以上	4.10×(3.90)	2.00, 2.10	1.80～2.10	15.99	N－89°－E	
SB－9	3×5	4.80×9.10	1.00～2.40	1.70, 1.90	43.68	N－5°－E	東庇
SB－10	3×2	4.80×4.85	0.80～2.00	1.95, 2.90	23.28	N－20°－E	東庇
SB－11	1×3	1.50×5.60～5.80	1.50	1.50～2.10	8.55	N－15～16°－W	
SB－12	2×2	3.40～3.50×5.55～5.90	1.70, 1.80	2.40～3.15	19.75	N－24°－W	総柱
SB－13	1×2	2.90×5.55	2.90	2.40～2.90	16.10	N－22°－W	
SB－14	2×4	4.00×8.60	1.80～2.20	1.80～2.40	34.40	N－71°－E	
SB－15	1×1	2.40×2.60	2.40	2.60	6.24	N－16°－W	

(2) 塀又は柵列跡

SA－7

A区北端部で検出した東西塀(N－75°－W)である。SA－8と重なり，SB－6の北側に位置する。3間分(5.40m)を検出し，柱間は1.70～1.90mと区々である。柱穴は径25～50cmの円形で，柱径は10～20cmとみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を多量に含むもので，出土遺物は皆無であった。

SA－8

A区北端部で検出した東西塀(N－89°－E)である。SA－7と重なり，SB－6の北側に位置する。4間分(8.00m)を検出し，柱間は1.70～2.40mと区々である。柱穴は径35cm前後の円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を多量に含むものであった。出土遺物には近世陶器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SA－9

A区北端部で検出したL字形の塀である。SB－6の北側に位置する。3間分(5.15m)を検出し，柱間は1.40～1.95mと区々である。柱穴は径30～43cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を多量に含むもので，出土遺物は皆無であった。

SA－10

A区北部で検出した東西の柵列(N－86°－W)である。東端の柱穴がSB－7と重なる。3間分(6.60m)を検出し，柱間は1.80～2.60mと区々である。柱穴は径32～42cmの円形で，柱径は10～15cmとみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を比較的多く含むもので，出土遺物は皆無であった。

SA－11

A区北部で検出した東西の柵列（N－84°－W）である。SA－10の南側に位置する。3間分（5.80m）を検出し，柱間は1.80mと2.00mである。柱穴は径20～25cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を比較的多く含むもので，出土遺物は皆無であった。

SA－12

A区北部で検出した南北の柵列（N－5°－E）である。SB－9と重なる。3間分（6.75m）を検出し，柱間は1.95mと2.40mである。柱穴は径32～40cmの円形で，柱径は10～15cmとみられる。柱穴の埋土は灰色粘質土に砂岩粒を比較的多く含むものであった。出土遺物には須恵器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SA－13

A区中央部で検出したL字形の塀である。SB－9･10と重なっている。7間分（15.75m）を検出し，柱間は2.05～2.80mと区々である。柱穴は径35～50cmの円形で，柱径は15～20cmとみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺物には須恵器片1点，土師質土器1点，瓦器2点がみられ，北から3間目の中から出土した土師質土器（321）と北から1間目の柱穴から出土した瓦器（322）の2点が図示できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.59－321）

小皿で，口径7.8cm，器高1.6cm，底径4.8cmを測る。口縁部は外上方に短く上がり，端部は丸い。底部は平らで，外面は回転糸切りとなる。他は器面が摩耗しており，調整は不明である。

瓦器（Fig.59－322）

小形の椀で，口径は11.7cmを測り，器高は3.2cmとみられる。口縁部外面はヨコナデ調整が施され，体部外面には指頭圧痕がみられる。内面は摩耗しており，調整は不明である。

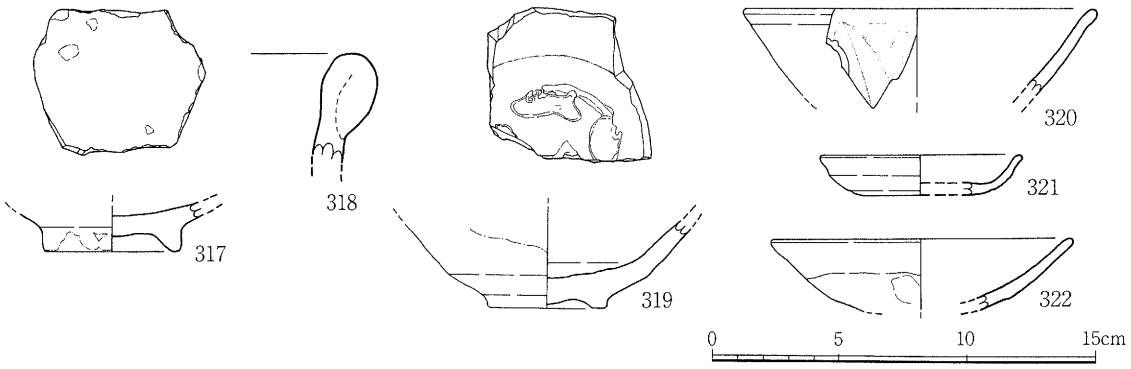


Fig.59 SB－8～10，SA－13出土遺物実測図

SA－14

A区中央部南よりで検出した南北塀（N－19°－W）である。SB－12の西隣に位置する。4間分（6.90m）を検出し，柱間は1.60～1.80mである。柱穴は径35～50cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが，復元図示できなかった。

SA－15

A区南部で検出した東西塀（N－77°－E）である。SA－16の東側2個の柱穴と重複し，SB－14の北側に位置する。4間分（8.65m）を検出し，柱間は1.90～2.40mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むもので，出土遺物は皆無であった。

SA－16

A区南部で検出した東西塀（N－76°－E）である。SA－15の東側2個の柱穴と重複する。3間分（6.55m）を検出し，柱間は2.10～2.30mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むもので，出土遺物は皆無であった。

SA－17

A区南部で検出した東西塀（N－72°－E）である。SB－15の北東隅の柱穴と重複する。6間分（11.70m）を検出し，柱間は1.60m，1.90m，2.50mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺

Tab.4 塀又は柵列跡計測表

遺構番号	規模			方向（Nは真北）	備考
	柱穴数（個）	全長(m)	柱間距離(m)		
SA－1	7	10.95	1.80，1.95		L字形
SA－2	5	7.35	1.65～2.10	N－28°－W	
SA－3	7	8.45	1.05～1.60		L字形
SA－4	6	9.90	1.70～2.10		L字形
SA－5	4	9.95	2.15～2.45		L字形
SA－6	4	4.80	1.50～1.70	N－74°－E	
SA－7	4	5.40	1.70～1.90	N－75°－W	
SA－8	5	8.00	1.70～2.40	N－89°－W	
SA－9	4	5.15	1.40～1.95		L字形
SA－10	4	6.60	1.80～2.60	N－86°－W	
SA－11	4	5.80	1.80，2.00	N－84°－W	
SA－12	4	6.75	1.95，2.40	N－5°－E	
SA－13	8	15.75	2.05～2.80		L字形
SA－14	5	6.90	1.60～1.80	N－19°－W	
SA－15	5	8.65	1.90～2.40	N－77°－E	
SA－16	4	6.55	2.10～2.30	N－76°－E	
SA－17	7	11.70	1.60～2.50	N－72°－E	
SA－18	5	8.95	2.00～2.45	N－12°－W	
SA－19	4	6.80	2.00～2.70	N－62°－E	

物には弥生土器片1点，須恵器片3点，土師器片1点，土師質土器片6，青磁片1点（同安窯系），染付片1点がみられるが，復元図示できるものはなかった。

SA－18

A区南部東端で検出した南北塀（N－12°－W）である。SB－14の南隣に位置する。4間分（8.95m）を検出し，柱間は2.00～2.45mと区々である。柱穴は径40～50cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが，復元図示できなかった。

SA－19

A区南部で検出した東西塀（N－62°－E）である。SB－14の南隣に位置する。3間分（6.80m）を検出し，柱間は2.00～2.70mと区々である。柱穴は径30～50cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は灰褐色粘質土に黄褐色火山灰土，黒ボク，小砂岩礫を多く含むものであった。出土遺物には弥生土器片3点，土師器片1点，土師質土器片3点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

（3）土坑

SK－27

A区北部で検出した方形の土坑で，丁度中央部にサブトレンチを設定したものである。長辺2.00m以上，短辺1.68m，深さ31cmを測り，長軸方向はN－80°21′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰褐色砂性粘質土に褐色砂岩粒を多く含むものであった。出土遺物には土師質土器片4点，近世陶器片（京焼系）1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－28（Fig.60）

A区北部で検出した円形の土坑で，3個のピットを埋土掘削後に確認した。径1.64m，深さ69cmを測る。遺構は段掘りされており，下段の断面形は箱形を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土を基調とし，黒ボクと炭化物の含有量によって四層に分層できる。出土遺物には土師質土器片2点，常滑焼片1点，青磁2点，近世陶磁器4点，瓦片2点がみられ，青磁（323），近世陶磁器（324～326），石製品（327）の5点が図示できた。

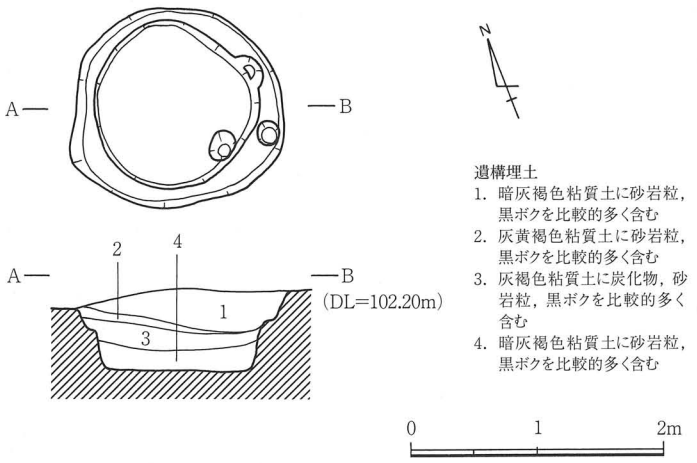


Fig.60 SK－28

出土遺物

青磁（Fig.61－323）

碗で，口径9.4cmを測る。内湾気味に上がる口縁部外面には細蓮弁文が施される。器面には0.2mmの厚さにオリーブ灰色の釉を施す。

近世陶磁器 (Fig.61－324～326)

324は折縁皿で，口径14.9cmを測る。口縁部は外傾する体部から水平に屈曲する。器面にはオリーブ灰色の釉を施す。325は肥前系(唐津)とみられる稜花皿で，口径13.3cm，器高3.2cm，底径4.0cmを測る。口縁部は体部から内湾気味にそのまま上がる。底部は高さ0.3cmの削り出し高台となる。口縁部から内面にかけて淡黄褐色の釉を施す。見込には目痕がみられる。326は磁器の碗で，底径4.0cmを測る。体部は内湾し，口縁部は垂直に近い角度で上がるものとみられる。底部は高さ0.9cmの削り出し高台となる。内面には灰色，外面には淡コバルト色の釉を施す。畳付は釉ハギが行われる。

石製品 (Fig.61－327)

石灰岩を利用した砥石で，一部が残存する。残部では3面を使用している。

SK－29 (Fig.62)

A区北部で検出した隅丸方形の土坑で，SD－9を切っていた。長辺1.14m，短辺1.08m，深さ16cmを測り，長軸方向はN－28°49′－Eを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は灰色粘性砂質土に褐色粘質土の小ブロックと褐白色砂岩粒を含むものであった。出土遺物には土師質土器片1点，近世陶器4点，瓦片1点がみられ，近世陶器(328･329)2点が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.61－328･329)

2点とも同タイプの皿で，いずれも口径11.8cmを測り，口縁部を水平に屈曲さす。端部は329の方がやや厚い。口縁外部から内面にかけて灰オリーブ色の釉を施す。

SK－30 (Fig.62)

A区北部で検出した不整円形の土坑で，多量の礫が埋まっていた。長径1.74m，短径1.63m，深さ42cmを測り，長軸方向はN－12°16′－Eを示す。断面形はほぼ逆台形状を呈し，底面壁沿いに浅い溝状の掘り込みが認められた。同様な形態を呈する土坑が他に7基確認されている。埋土は灰色砂性粘質土に褐色粘性砂質土の小ブロック及び多量の礫を含むものであった。出土遺物には須恵器片1点，近世陶磁器片1点，石臼1点がみられ，石臼(330)1点が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.61－330)

石臼の下臼部分で，約四分の一が残存し，径は約24.0cmとみられる。擦目は摩滅する。

SK－31 (Fig.62)

A区北部で検出した円形の土坑で，SK－28の南側に位置する。径1.82m，深さ47cmを測る。断面形はほぼ逆台形状を呈し，東側壁に一段の平場を有する。埋土は灰褐色粘質土を基調に黄色ないし褐色粘質土の小ブロックの含有量によって二層に分層される。出土遺物には須恵器片1点，土師質土器片1点，タイルの破片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－32 (Fig.62)

A区北部で検出した円形の土坑で，SK－33を切っていた。径1.52m，深さ65cmを測る。断面形は逆台形状を呈し，底面でピット1個を検出した。埋土は灰褐色粘質土を基調に黄色砂岩礫の含有量によって四層に分層される。出土遺物は皆無であった。

SK－33 (Fig.62)

A区北部で検出した不整楕円形の土坑で，SK－32に切られていた。長径2.14m，短径1.78m，深さ73cmを測り，長軸方向はN－4°17′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は三層に分層でき，上層より黄褐色砂礫土を多量に含む灰褐色粘質土，半人頭大の礫を多量に含む暗灰色粘質土，黄色砂岩粒を少量含む暗灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片2点，青磁片1点，肥前系陶器1点，19世紀以降とみられる磁器片2点，瓦片3点，砥石1点，石臼2点があり，肥前系陶器(331)，砥石(332)，石臼(333･334)の4点が図示できた。

出土遺物

肥前系陶器 (Fig.64－331)

唐津の折縁皿とみられるもので，口径10.8cm，器高2.1cm，底径3.1cmを測る。口縁部は，外傾する体部からやや角度を変えてのび，端部を水平に屈曲さす。底部は高さ0.3cmの削り出し高台となる。口縁外面から内面にかけて鉄釉を施す。見込には砂目が残る。

石製品 (Fig.64－332～334)

332は砂岩を利用した砥石である。残存長14.4cm，幅9.2cm，厚さ4.5cmを測る。上面と側面の3面を使用する。また，表面は火を受けたとみられ赤色を呈する。333･334は石臼の上臼である。333は径が約27.0cmとみられ，その内の約20.0cmを窪ませている。擦目は比較的良く残る。334は径が約32.0cmとみられるもので，その内の約24.0cmを窪ませている。擦目は比較的良く残る。

SK－34 (Fig.62)

A区北部で検出した円形の土坑で，SK－35に切られていた。径1.52m，深さ8cmを測る。断面形は逆台形状を呈し，北西側に掘削の際のものとみられる浅い掘り込みが認められ，底面壁沿いに溝状の浅い掘り込みを確認した。埋土は砂岩粒を含む灰色砂性粘質土であった。出土遺物には砥石1点と鉄片1点があり，砥石(335)1点が図示できた。

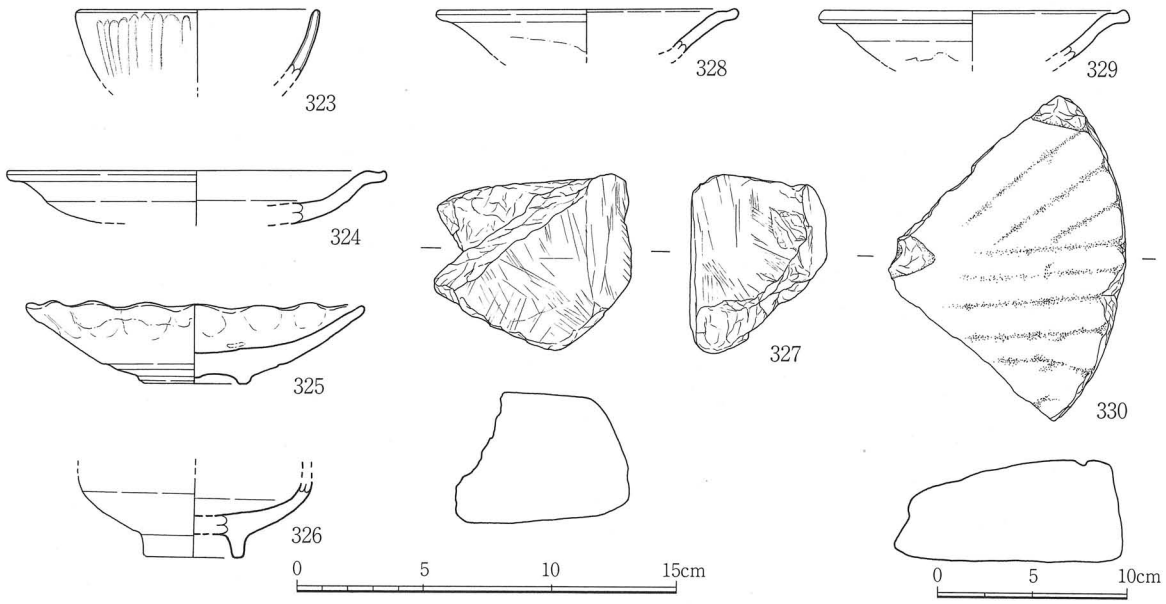


Fig.61 SK－28～30出土遺物実測図

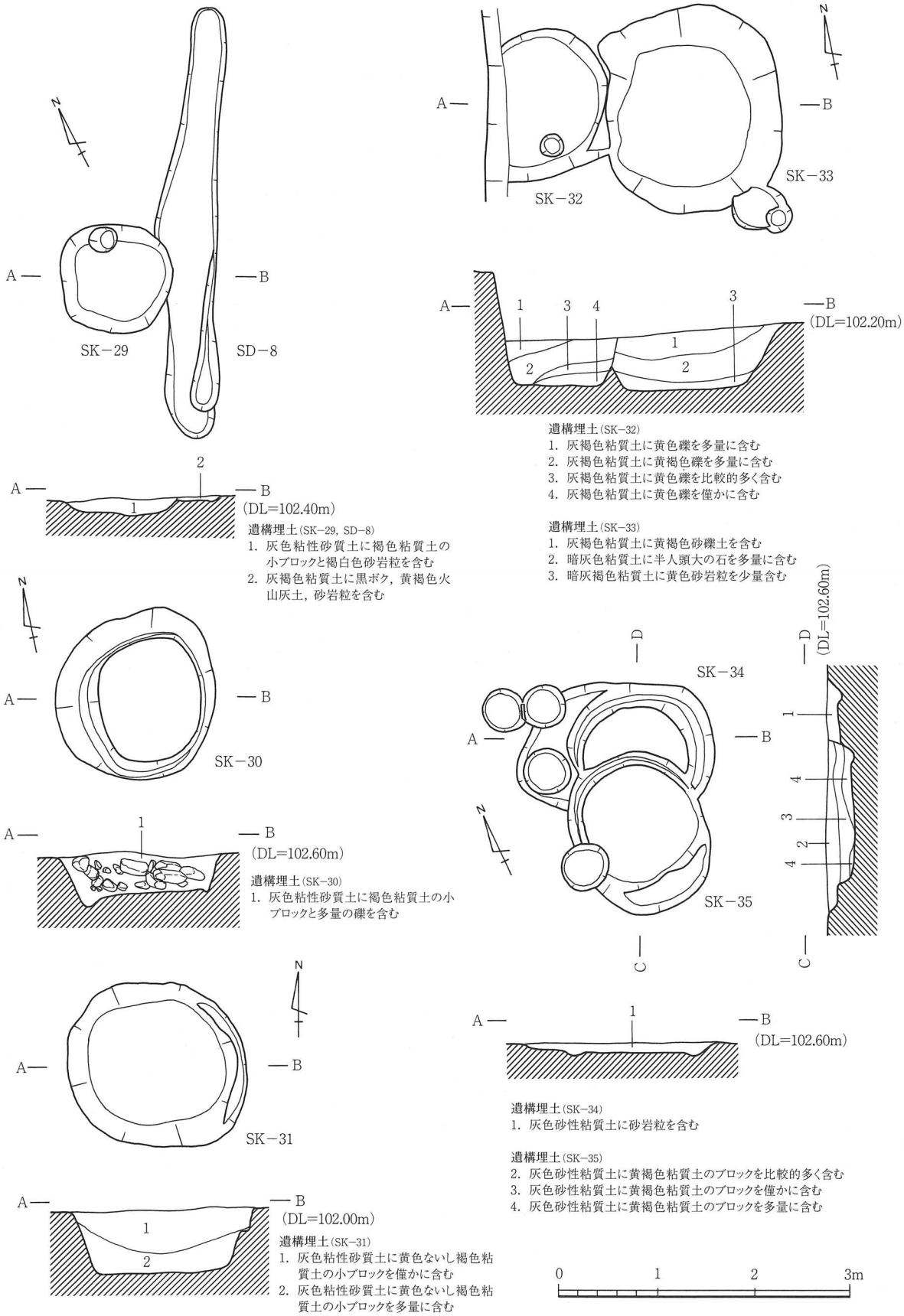


Fig.62 SK−29～35, SD−8

出土遺物

石製品（Fig.64－335）

砂岩を使用した砥石で，大半が欠損する。残部では1面を使用する。

SK－35（Fig.62）

A区北部で検出した不整楕円形の土坑で，SK－34を切っていた。長径1.68m，短径1.34m，深さ28cmを測り，長軸方向はN－1°8′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈し，南側に掘削の際のものとみられる浅い掘り込みが認められ，底面北壁沿いに溝状の浅い掘り込みを確認した。埋土は灰色砂性粘質土を基

Tab.5 弥生・古代・中世土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			長軸方向（Nは真北）	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK－1	舟形	1.96	0.54	0.46	N－43°9′－W	弥生	
SK－2	方形	0.90	0.73	0.04	N－34°59′－E	〃	
SK－3	舟形	0.88以上	0.25	0.05	N－75°4′－W	〃	
SK－4	不整方形	1.21	0.76	0.06	N－32°0′－W	〃	
SK－5	舟形	4.30	0.37	0.08	N－34°2′－W	〃	
SK－6	不整楕円形	1.83	1.18	0.24	N－6°51′－W	〃	
SK－7	方形	2.63	1.70	0.38	N－1°39′－E	〃	
SK－8	舟形	3.35	0.31	0.18	N－67°13′－E	〃	
SK－9	不整楕円形	1.61	1.11	0.40	N－38°40′－E	古代	
SK－10	方形	1.58以上	0.53	0.19	N－20°25′－W	〃	
SK－11	〃	1.58	1.44	0.59	N－89°20′－E	中世	
SK－12	〃	1.68	1.30以上	0.57	N－87°43′－E	〃	
SK－13	〃	1.08	0.87	0.19	N－80°32′－W	〃	
SK－14	円形	1.53		0.14		〃	
SK－15	不整方形	0.88	0.78	0.58	N－12°41′－W	〃	
SK－16	楕円形	1.48	1.08	0.20	N－1°26′－E	〃	
SK－17	不整円形	1.08	0.94	0.08	N－82°10′－W	〃	
SK－18	不整方形	2.56	2.23	0.07	N－56°19′－E	〃	
SK－19	〃	7.18	1.03	0.05	N－24°51′－W	〃	
SK－20	〃	3.71	2.90以上	0.11	N－24°57′－W	〃	
SK－21	不整楕円形	0.94	0.20	0.17	N－88°5′－E	〃	
SK－22	〃	1.72	0.78	0.14	N－5°43′－W	〃	
SK－23	不整舟形	3.50	0.51	0.34	N－24°42′－E	〃	
SK－24	方形	2.00	1.60	0.11	N－39°31′－W	〃	
SK－25	不整楕円形	1.40	0.51	0.10	N－17°30′－E	〃	
SK－26	不整方形	1.79	1.27	0.13	N－38°40′－E	〃	

調に黄褐色粘質土の含有量によって三層に分層される。出土遺物には瓦片5点と鉄片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－36

A区北部で検出した不整楕円形の土坑で，東側は調査区外にのびている。長径1.58m以上，短径1.21m，深さ6cmを測り，長軸方向はN－78°41′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈し，南側に掘削の際のものとみられる浅い掘り込みが認められ，底面北壁沿いに溝状の浅い掘り込みを確認した。埋土は砂岩粒を含む灰色砂性粘質土であった。出土遺物は皆無であった。

SK－37

A区中央部北よりで検出した方形の土坑で，SK－38に切られていた。長辺2.61m，短辺1.20m，深さ26cmを測り，長軸方向はN－87°51′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐色ないし赤色岩粒を多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片3点，土師質土器片15点，青磁片1点，白磁片1点がみられたが，復元図示できなかった。

SK－38

A区中央部北よりで検出した方形の土坑で，SK－37を切っていた。長辺2.12m，短辺1.20m，深さ30cmを測り，長軸方向はN－12°41′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐色ないし赤色砂岩粒を多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片4点，瓦器片1点，肥前系陶器1点がみられ，肥前系陶器(336)1点が図示できた。

出土遺物

肥前系陶器 (Fig.62－336)

唐津の皿とみられるもので，底径3.5cmを測る。体部は内湾気味に上がり，底部は高さ0.4cmの削り出し高台となる。口縁外面から内面にかけて灰オリーブ色の釉を施し，見込には胎土目の痕がみられる。

SK－39

A区中央部北よりで検出した方形の土坑で，SK－40·43に切られていた。長辺1.60m，短辺1.48m，深さ52cmを測り，長軸方向はN－2°52′－Eを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄色ないし暗褐色粘質土のブロックを多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片1点，土師質土器片2点，常滑焼片1点，青磁1点，近世磁器片1点がみられ，青磁(337)1点が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.64－337)

碗で，底径6.1cmを測る。体部は外上方にのび，底部は高さ0.7cmの削り出し高台となる。体部外面には鎬蓮弁文が施され，畳付から外側に灰オリーブ色の釉を施す。

SK－40

A区中央部北よりで検出した不整楕円形の土坑で，SK－39を切り，SK－43に切られていた。長径1.28m，短径0.97m，深さ53cmを測り，長軸方向はN－66°34′－Wを示す。断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄色ないし暗褐色粘質土粒を多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片1点，染付1点，砥石1点がみられ，染付(338)と砥石(339)2点が図示できた。

出土遺物

染付（Fig.64－338）

皿で，底径5.5cmを測る。体部は斜め上方にのび，底部は高さ0.7cmの削り出し高台となる。体部外面から内面にかけて白色の釉を施し，見込には蛇の目状の釉ハギがみられる。

石製品（Fig.64－339）

砂岩を利用した砥石で，両端が欠損する。4面を使用する。

SK－41～45

A区中央部北よりで検出した方形の土坑群で，5基が切り合っていた。新旧関係はSK－41，SK－44･45，SK－43の順で，SK－42はSK－41を切っているが，SK－43～45との新旧関係は不明である。規模は長辺1.45以上～2.99m，短辺1.33～2.25m，深さ34～53cmを測る。長軸方向はTab.6のとおりで相関関係がありそうである。断面形はすべて逆台形状を呈し，SK－44の底面で径32cmの焼土を確認した。埋土は灰褐色粘質土を基調とし，褐色･黄色･褐白色粘質土のブロック及び土粒の含有量で区別できた。これらの遺構からは須恵器片1点，土師質土器片3点，常滑焼片1点，近世陶器片1点，瓦片4点出土するが，復元図示できるものはなかった。

SK－46

A区中央部北よりで検出した不整楕円形の土坑で，南北に掘削の際とみられる浅い掘り込みがみられる。長径2.67m，短径1.56m，深さ18cmを測り，長軸方向はN－86°34′－Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は暗褐色粘質土粒を多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には近世磁器片2点がみられたが，復元図示できなかった。

SK－47（Fig.63）

A区中央部で検出した不整円形の土坑である。長径1.71m，短径1.60m，深さ6cmを測り，長軸方向はN－89°5′－Eを示す。断面形はほぼ逆台形状を呈し，底面壁沿いに浅い溝状の掘り込みが認められた。形態的にはSK－30と全く同じである。埋土は赤褐色砂岩粒を多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片1点，須恵器片1点，土師質土器片9点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－48～51（Fig.63）

A区中央部で検出した円形の土坑群で，4基が切り合っている。新旧関係はSK－49，SK－51，SK－50，SK－48の順である。規模は径1.50～1.95m，深さ25～42cmを測る。断面形はほぼ逆台形状を呈し，SK－49･50では底面壁沿いに溝状の掘り込みが認められる。埋土はそれぞれ黄褐色粘質土粒ないし黄褐色火山灰土粒を含む灰褐色粘質土と暗灰色粘質土に分層される。これらの遺構からは須恵器片1点，土師質土器片1点，青磁片3点，近世陶器片3点出土し，SK－48から出土した青磁（340）1点が図示できた。

出土遺物

青磁（Fig.64－340）

杯の口縁部である。外上方にのびる口縁部の端を外方に屈曲さす。口縁部外面から内面にかけて非常に薄い灰オリーブ色の釉を施す。施釉部分には貫入がみられる。

SK－52

A区中央部東よりで検出した方形の土坑で，SD－10を切っている。長辺3.56m，短辺3.00m，深さ13cm

を測り，長軸方向はN−14°2′−Wを示す。断面形はほぼ逆台形状を呈する。埋土は白色ないし褐白色砂岩粒を多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片3点，土師質土器片4点，瀬戸・美濃系片1点，常滑焼片1点，近世陶器2点がみられ，近世陶器(341・342)2点が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.64−341・342)

341は皿で，口径10.9cm，器高3.0cm，底径3.6cmを測る。口縁部は体部からそのまま内湾して上がる。底部は高さ0.4cmの削り出し高台となる。口縁外面から内面にかけて灰緑色の釉を施す。見込には目痕がみられる。342も皿で，底径4.3cmを測る。底部は高さ0.3cmの削り出し高台となる。畳付外側から内面にかけて淡緑色の釉を施す。

SK−53

A区ほぼ中央部で検出した方形の大形土坑で，SD−11を切っている。長辺10.20m，短辺4.40m，深さ12cmを測り，長軸方向はN−16°37′−Wを示す。断面形はほぼ逆台形状を呈する。埋土は白色ないし褐白色砂岩粒を多く含む灰色粘質土であった。出土遺物には須恵器片15点，土師質土器片5点，常滑焼片3点，近世陶器7点がみられ，近世陶器(343)1点が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.64−343)

折縁皿で，口径11.2cm，器高2.1cm，底径5.6cmを測る。体部は外上方にのび，口縁部で外側に屈曲さす。底部は高さ0.3cmの削り出し高台となる。畳付の外側にオリーブ黄色の釉を施した上で，見込を円形に釉ハギする。

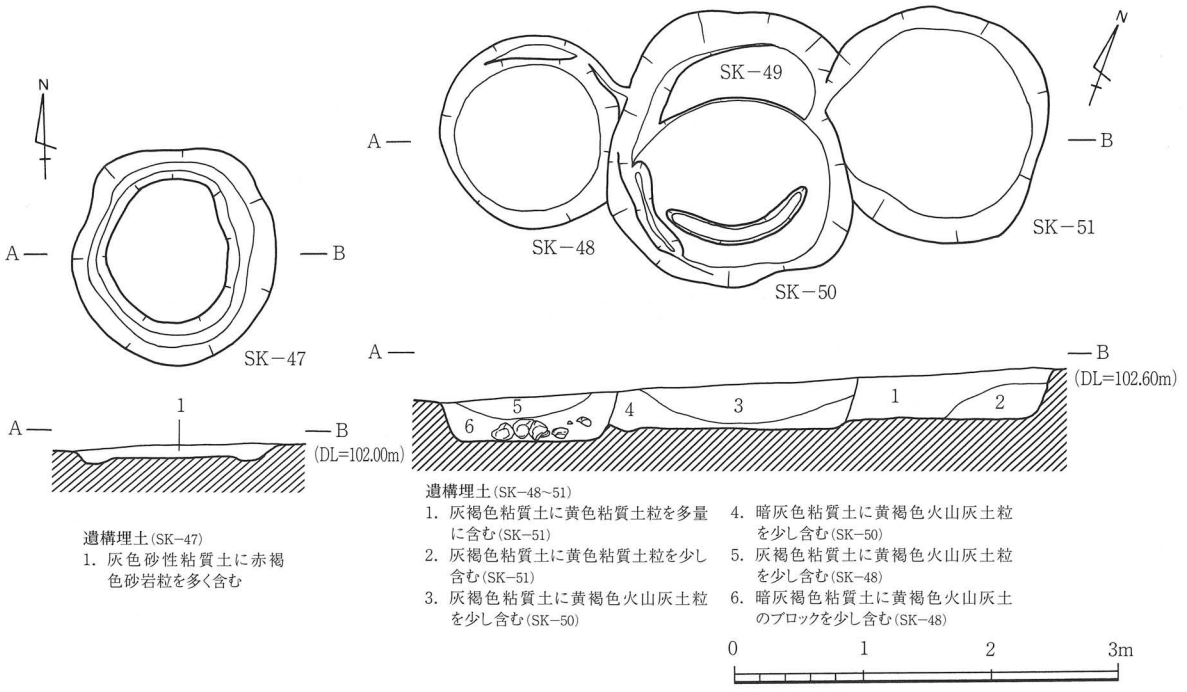


Fig.63 SK−47〜51

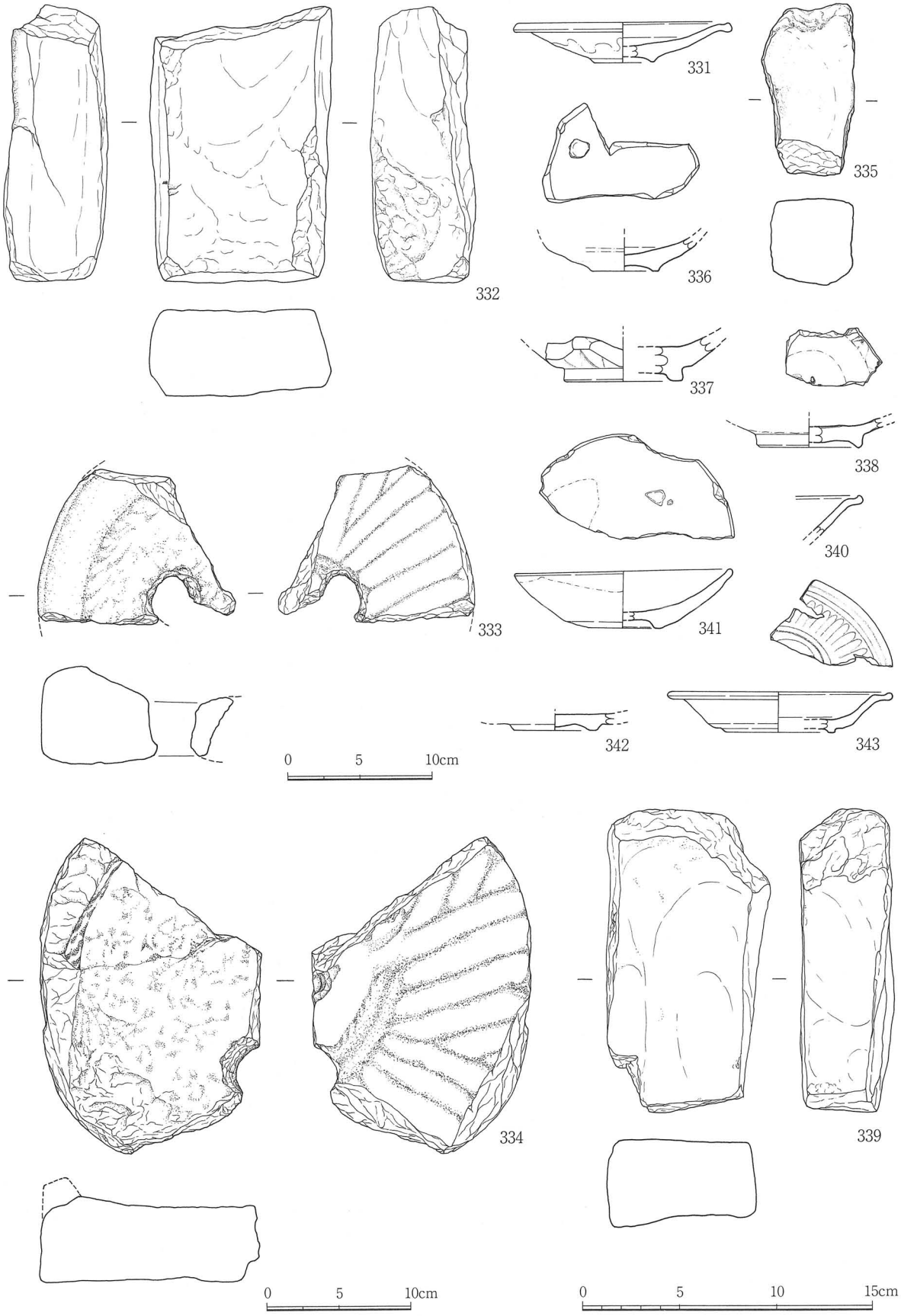


Fig.64 SK－33・34・38～40・48・52・53出土遺物実測図

SK－54

A区南部で検出した円形の土坑である。径1.45m，深さ49cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐色・褐白色・白色砂岩粒と黒ボク及び黄褐色火山灰土のブロックを含む灰色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片4点，須恵器片2点，土師器片1点，土師質土器片16点，青磁片1点，瓦器片1点，近世陶磁器片3点，叩石片1点がみられ，叩石(344)1点が図示できた。

出土遺物

石製品（Fig.66－344）

砂岩の叩石で，大半が欠損する。中央部と側面に敲打痕が残る。

SK－55（Fig.65）

A区南部で検出した円形の土坑である。径1.48m，深さ55cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰色粘質土を基調とし，褐色・褐白色・白色砂岩粒と黒ボク及び黄褐色火山灰土のブロックの含有量により二層に分層できる。出土遺物には土師質土器片5点，近世陶磁器片3点，瓦片2点，砥石1点がみられ，近世陶器(345)と砥石(346)の2点が図示できた。

出土遺物

近世陶器（Fig.66－345）

碗で，底径5.0cmを測る。体部は内湾気味に上がり，底部は高さ1.3cmの削り出し高台となる。器面には透明に近い淡緑色の釉を施し，畳付は釉ハギが行われる。また，全面に貫入がみられる。

石製品（Fig.66－346）

頁岩の砥石で，大半が欠損する。残部では上面と側面の3面を使用する。

SK－56（Fig.65）

A区南部西端で検出した円形の土坑である。径1.42m，深さ29cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は砂岩粒を多く含む灰暗褐色粘質土で，下層部で人頭大の礫が多く認められた。出土遺物には弥生土器片2点，常滑焼片2点，青磁片1点，近世陶器1点，瓦片1点，釘片1点がみられ，青磁(347)と近

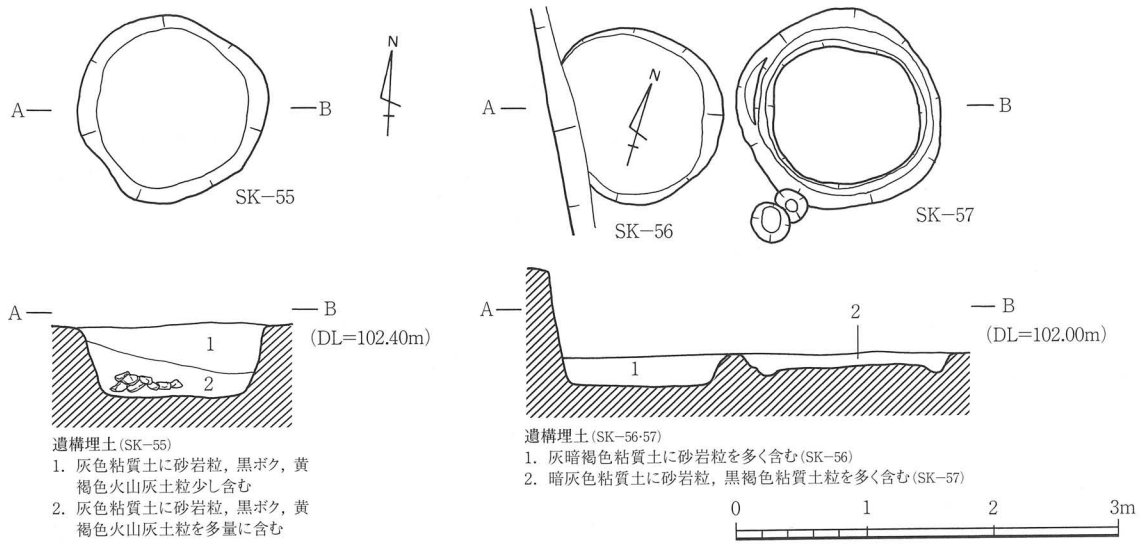


Fig.65 SK－55～57

世陶器(348)の2点が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.66－347)

碗で，底径4.7cmを測る。体部は内湾気味に上がり，底部は高さ0.8cmの削り出し高台となる。見込には劃花文がみられ，畳付の外側に0.2cmの灰オリーブ色の釉を施す。

近代陶器 (Fig.66－348)

皿で，口径13.6cm，器高2.4cm，底径7.6cmを測る。口縁部は体部からそのまま内湾してのび，端部は細い。底部は高さ3.0cmの削り出し高台となる。見込には草花文がみられ，器面には白色の釉を施した上で，畳付を釉ハギする。

SK－57 (Fig.65)

A区南部で検出した円形の土坑で，SK－56の東隣に位置する。径1.62m，深さ15cmを測る。断面形はほぼ逆台形状を呈し，底面壁沿いに浅い溝状の掘り込みが認められた。SK－30などと同形態である。埋土は白色ないし褐白色岩粒及び黒褐色粘質土粒を多く含む暗灰色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片17点，須恵器片28点，土師質土器片31点，瓦器片1点，瓦質土器片1点，常滑焼片1点，近世陶磁器片1点，瓦片1点，石庖丁片1点がみられ，須恵器(349)と石庖丁(350)の2点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.66－349)

小皿で，一部が残存する。口縁部は短く斜め上方を向き，底部は平らで，外面は回転糸切りとなる。他は回転ナデ調整を施す。焼成は良く，灰色を呈する。

石製品 (Fig.66－350)

頁岩の石庖丁で，約二分の一が残存する。刃部は6.0cmが残り，紐孔と抉り痕が認められる。

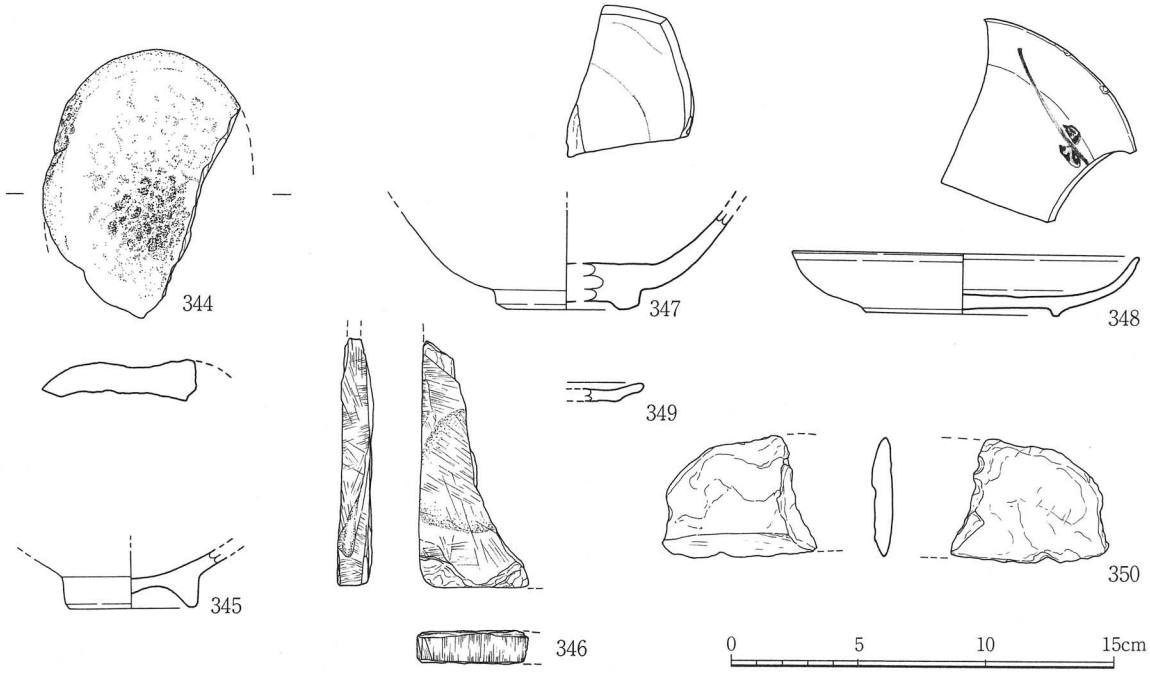


Fig.66 SK－54～57出土遺物実測図

SK－58 (Fig.67)

A区南端部で検出した円形の土坑で，東側に掘削時の浅い掘り込みが認められた。径1.42m，深さ22cmを測る。断面形はほぼ逆台形状を呈し，底面壁沿いに浅い溝状の掘り込みが認められた。SK－57などと同形態である。埋土は黄褐色火山灰土のブロックを多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には瓦片1点がみられたが，復元図示できなかった。

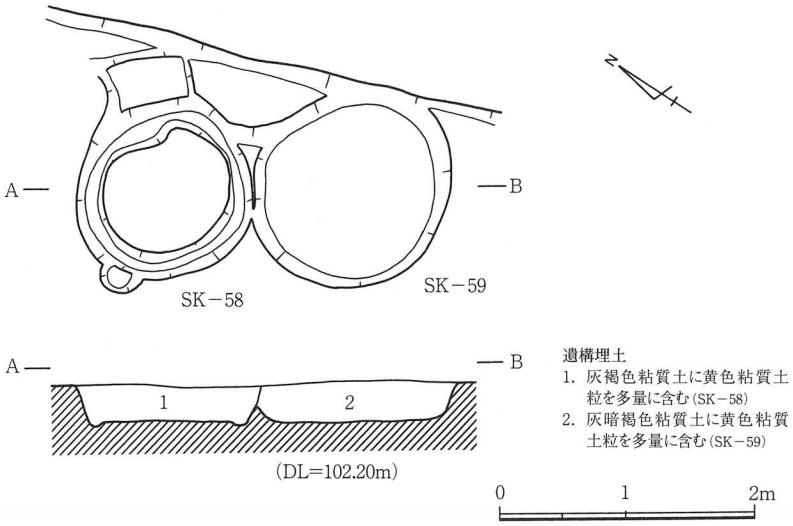


Fig.67 SK－58・59

SK－59 (Fig.67)

A区南端部で検出した円形の土坑で，SK－58同様東側に掘削時の浅い掘り込みが認められた。径1.60m，深さ50cmを測る。断面形はほぼ逆台形状を呈する。埋土は黄褐色火山灰土のブロックを多く含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には弥生土器片6点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

SK－60 (Fig.68)

C区北部で検出した不整楕円形の土坑である。長径0.87m，短径0.72m，深さ10cmを測り，長軸方向はN－33°41′－Wを示す。断面形は舟底状を呈する。埋土は褐白色砂岩粒を多く含む灰黄色粘質土であった。出土遺物は皆無であった。

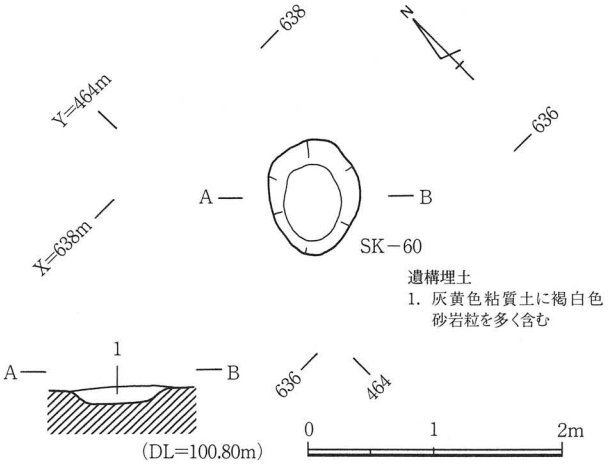


Fig.68 SK－60

(4) 溝跡

SD－8 (Fig.62)

A区北部第Ⅷ層上面で検出した南北溝で，南北2条に分かれるが，本来は1本の溝であったものと考えられる。幅0.45～0.65m，深さ2～4cmで，基底面はほぼ平坦で，標高は102.31～102.36mを測る。断面形は舟底状を呈する。埋土は砂岩粒を含む灰色粘質土であった。出土遺物は皆無であった。

SD－9

A区中央部第Ⅳ層上面で検出した東西溝である。幅0.87～1.11m，深さ13～33cmで，基底面は東

(102.31m) から西 (101.99m) に向かって傾斜し，9.50mを検出した。断面形はほぼ舟底状を呈する。埋土は黒ボク，黄褐色火山灰土，砂岩粒を含む灰褐色粘質土であった。出土遺物は図示できた近世陶器 (351) 1点のみであった。

出土遺物

近代陶器 (Fig.71－351)

皿で，口径9.9cmを測る。口縁部は内湾し，口唇部は波状をなす。口縁部内外面には刻状の文様，器面には乳白色の釉を施す。

SD－10 (Fig.69)

A区中央部第Ⅶ・Ⅷ層上面で検出した南北溝で，SK－52に切られる。幅0.95～2.80m，深さ7～18cmで，基底面はほぼ平らで標高は102.24～10.33mを測り，24.40mを検出した。断面形は舟底状ないし逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質土を基調に褐色砂岩粒と黄褐色火山灰土の有無によって二層に分層される。出土遺物には弥生土器片1点，須恵器片1点，土師質土器片2点，白磁片1点，近世陶器片1点がみられ，白磁 (352) 1点が図示できた。

出土遺物

白磁 (Fig.71－352)

皿で，口径15.8cmを測る。口縁部は内湾し，端部は細い。器面には明緑灰色の釉を施す。

SD－11 (Fig.69)

A区南部第Ⅳ層上面で検出した東西溝で，SK－52に切られる。幅0.80～2.35m，深さ4～15cmで，基底面は東 (102.40m) から西 (102.02m) に向かって傾斜し，16.16mを検出した。断面形は舟底状ないし逆台形状を呈する。埋土は褐色砂岩粒を僅かに含む灰褐色粘質土，灰白色砂土，褐色砂岩粒を僅かに含む灰褐色砂質土の三層に分層される。出土遺物には弥生土器片5点，須恵器片5点，土師質土器片4点，瓦器片1点，近世陶磁器片8点，瓦片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

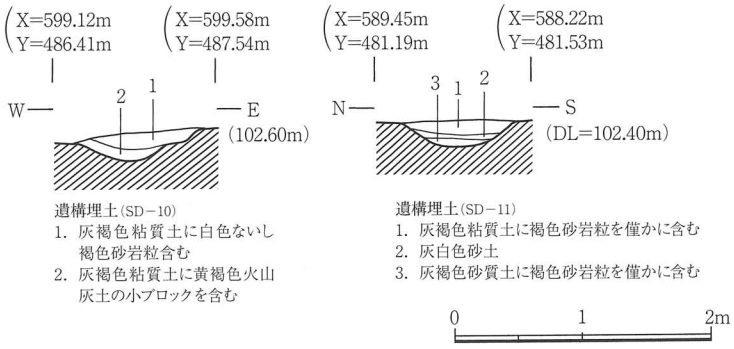


Fig.69 SD－10・11セクション図

SD－12

A区南部第Ⅶ層上面で検出した東西溝である。幅0.23～2.43m，深さ6～7cmで，基底面はほぼ平らで標高は101.49～101.55mを測り，4.35mを検出した。断面形は舟底状を呈する。埋土は白色ないし褐白色砂岩粒を比較的多く含む灰褐色粘質土である。出土遺物には弥生土器片1点，近世陶器片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

(5) 井戸跡

SE－1 (Fig.70)

A区南東部第Ⅷ層上面で検出した石組の井戸で，SB－14の北隣に位置する。掘方は東西2.45m，南北2.61mとほぼ円形である。井戸の本体は砂岩を主体に積んだ石組井戸で砂礫層まで掘削しており，上端の内径0.75～0.80m，基底面の内径1.02mを測り，下部が広い。深さは1.72mで，基底面には井筒は設置されていなかった。埋土は石組内が人頭大の礫を比較的多く含む灰色粘質土，掘方が砂岩粒を多く含む黒色粘質土と砂岩粒及び黒色粘質土のブロックを多く含む暗灰色粘質土の互層となっていた。出土遺物には近世陶器片2点，五輪塔(火輪)2点がみられ，近世陶器(353)と五輪塔(354･355)3点が図示できた。

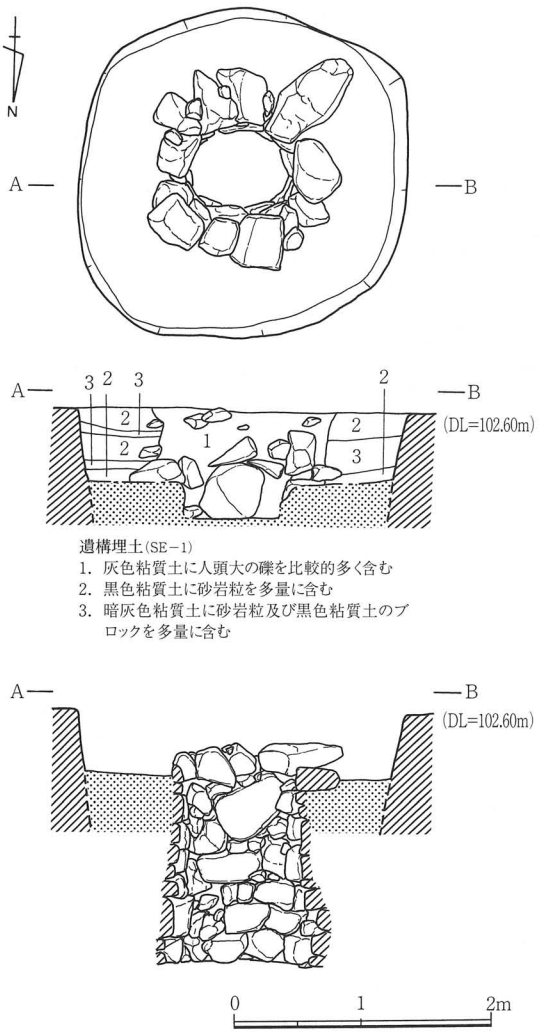


Fig.70 SE－1

出土遺物

近世陶器 (Fig.71－353)

灯明皿の脚台部とみられる破片である。脚台は基部から内側に内湾した後外下方に下る。外面にはオリーブ灰色の釉が施される。

石製品 (Fig.71－354･355)

2点とも五輪塔の火輪で，354は高さ14.1cm，幅20.7cm，厚さ18.5cm，重さ7.5kg，355は高さ14.6cm，幅21.0cm，厚さ20.2cm，重さ8.5kgを測る。いずれも上部には風輪を据えるための窪みが設けられている。354の前面には敲打痕のような浅い窪みがみられる。

(6) ピット

P－27

A区北部で検出したピットである。径30～36cmの不整円形で，深さ63cmを測る。埋土は砂岩粒を多量に含む灰色粘質土であった。出土遺物には土師質土器片1点，肥前系陶器片1点，石臼1点がみられ，石臼(356)1点が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.72－356)

石臼の上臼部分で，約二分の一が残存し，径は約31.0cmとみられ，その内の23.0cmを窪ませている。擦目はやや摩滅する。

P－28

A区北部で検出したピットで，P－27の東隣りに位置する。径34cmの円形で，深さ39cmを測る。埋土は砂岩粒を多量に含む灰色粘質土であった。出土遺物には図示した石臼(357)1点がみられた。

出土遺物

石製品（Fig.73－357）

石臼の上臼部分で，約二分の一が残存し，径は約30.0cmとみられ，その内の24.0cmを窪ませている。斜行する4～5本単位の条線が5箇所に認められる。

P－29

A区北部で検出したピットである。径36cmの円形で，深さ58cmを測る。埋土は砂岩粒を多量に含む灰色粘質土であった。出土遺物には肥前系陶器片1点，砥石1点がみられ，砥石(358)1点が図示できた。

出土遺物

石製品（Fig.74－358）

砂岩の砥石で，幅9.4cm，厚さ4.2cmを測り，両端が欠損する。4面に使用痕が認められる。

P－30

A区北部で検出したピットである。径36cmの円形で，深さ57cmを測り，径20cmの柱痕が残存する。埋土

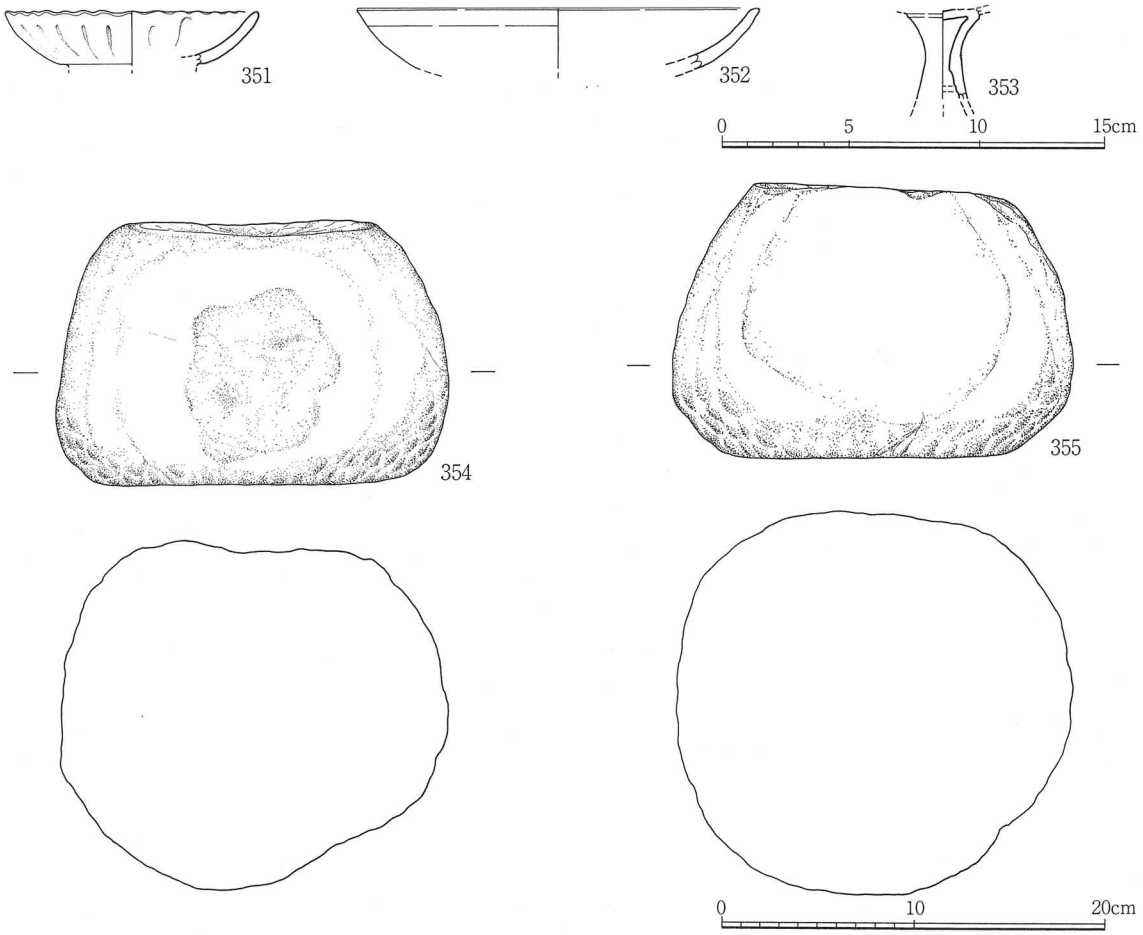


Fig.71 SD－9・10，SE－1出土遺物実測図

は砂岩粒を多量に含む灰色粘質土であった。出土遺物は図示した染付(359)1点のみであった。

出土遺物

染付 (Fig.74－359)

大皿とみられる破片である。口縁部は大きく外反し，端部は丸い。界線で区切られた中に草花文がみられる。器面には0.2～0.3㎜の厚さに乳白色の釉を施す。

P－31

A区北部東よりで検出したピットで，北側で別のピットに切られていた。径45㎝の円形で，深さ19㎝を測る。埋土は砂岩粒を多量に含む灰色粘質土であった。出土遺物は図示した染付(360)1点のみであった。

出土遺物

染付 (Fig.74－360)

碗とみられる口縁部の破片である。口縁部は内湾気味に上がり，端部で外反する。内外面には唐草文がみられる。器面には0.2㎜の厚さに乳白色の釉を施す。

P－32

A区中央部で検出したピットで，SD－2を切っていた。径25㎝の円形で，深さ50㎝を測る。埋土は黄褐色火山灰土粒と砂岩粒を多量に含む灰褐色粘質土であった。出土遺物は図示した須恵器(361)1点のみであ

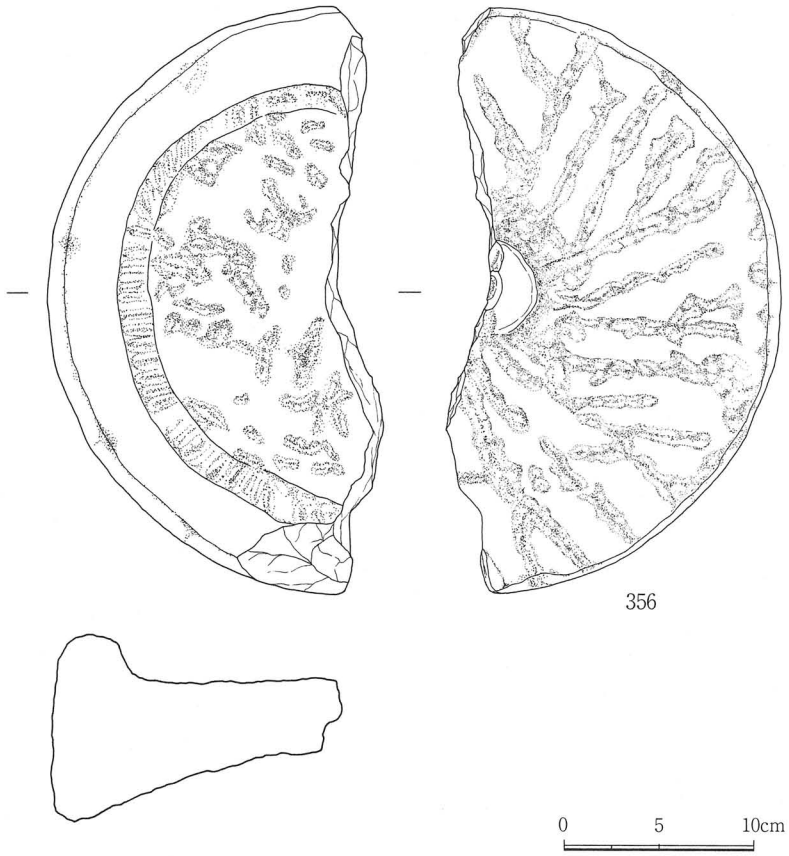


Fig.72 P－27出土遺物実測図

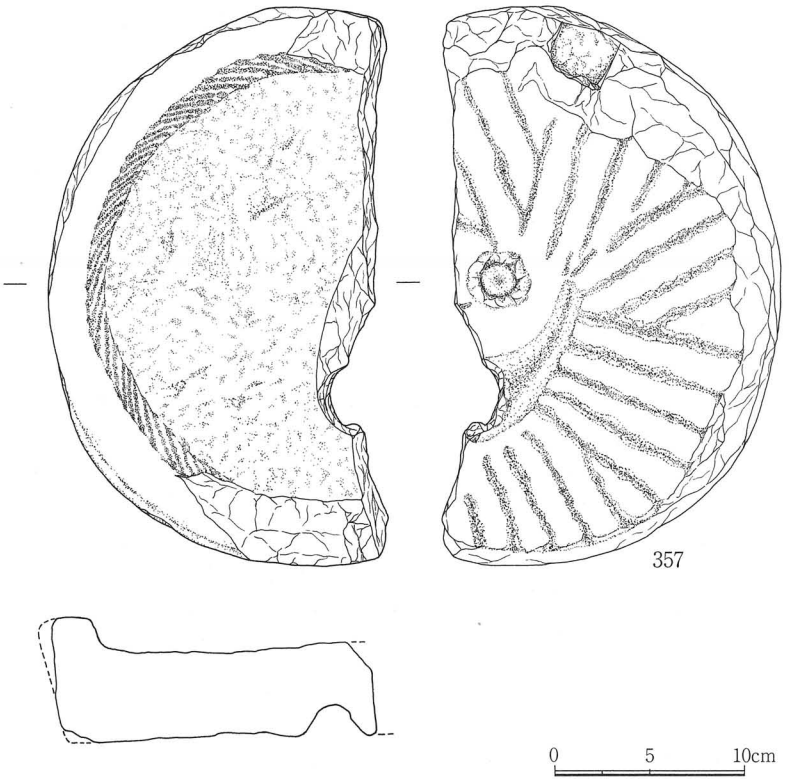


Fig.73 P－28出土遺物実測図

った。

出土遺物

須恵器（Fig.74－361）

杯で，底径11.0cmを測る。平らな底部外面は回転ヘラ切りで，端部に高さ0.6cmのハの字形の高台が付く。器面には回転ナデ調整が施される。

P－33

A区中央部で検出したピットで，中世のピットを切っていた。径35cmの円形で，深さ22cmを測る。埋土は黄褐色火山灰土粒と砂岩粒を多量に含む灰褐色粘質土であった。出土遺物は図示した近世陶器（362）1点のみであった。

出土遺物

近世陶器（Fig.74－362）

碗で，口径9.6cmを測る。口縁部は内湾気味に外上方に上がる体部から僅かに外反する。器面には灰オリーブ色の釉が施され，貫入がみられる。

P－34

A区南部第Ⅳ層上面で検出したピットで，径9cmの柱根が残存していた。径35cmの円形で，深さ69cmを測る。埋土は黒ボク粒，黄褐色火山灰土粒及び砂岩粒を多量に含む灰褐色粘質土であった。出土遺物は図示した柱根（363）1点のみであった。

出土遺物

木製品（Fig.74－363）

柱根の木芯部分のみが残存し，調整痕は全く認められない。残存長31.7cm，残存幅9.0cmを測る。材質は杉とみられる。

P－35

A区南部第Ⅳ層上面で検出したピットである。径40cmの円形で，深さ55cmを測る。埋土は黒ボク粒，黄褐色火山灰土粒及び砂岩粒を多量に含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片1点，肥前系陶器1点がみられ，肥前系陶器（364）1点が図示できた。

出土遺物

肥前系陶器（Fig.74－364）

唐津の皿とみられるもので，底径4.5cmを測る。体部は内湾し，底部は高さ0.3cmの削り出し高台となる。内面には薄くオリーブ灰色の釉が施される。見込には砂目がみられる。

P－36

A区南部第Ⅳ層上面で検出したピットである。径28cmの円形で，深さ67cmを測る。埋土は黒ボク粒，黄褐色火山灰土粒及び砂岩粒を多量に含む灰褐色粘質土であった。出土遺物は図示した磁器製品（365）1点のみであった。

出土遺物

磁器製品（Fig.74－365）

大国様の顔部分が幅1.9～3.1cm残存する。

P－37

A区南部第Ⅳ層上面で検出したピットである。径33cmの円形で，深さ40cmを測る。埋土は黒ボク粒，黄褐色火山灰土粒及び砂岩粒を多量に含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器3点，土師質土器片4点，瓦片1点がみられ，須恵器(366)1点が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.74－366)

甕で，口径20.6cmを測る。口縁部は外傾してのび，端部内側を若干拡張する。器面は回転ナデ調整が施される。焼成は良く，灰色を呈する。

P－38

A区南部第Ⅳ層上面で検出したピットである。径32cmの円形で，深さ7cmを測り，径12～14cmの柱痕が残存していた。埋土は黒ボク粒，黄褐色火山灰土粒及び砂岩粒を多量に含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には須恵器片2点，土師質土器片8点，瓦器1点，近世陶磁器片2点がみられ，瓦器(367)1点が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.74－367)

小皿で，口径7.8cm，器高1.6cm，底径6.2cmを測る。口縁部は外傾し，底部は丸味がある。口縁部には

Fig.74 P－29～39出土遺物実測図

ヨコナデ調整，内底面にはナデ調整が施され，体部と底部外面には指頭圧痕が残る。焼成が良く，外面は銀色に発色する。

P－39

A区南部第Ⅳ層上面で検出したピットである。径34～38cmの不整円形で，深さ38cmを測る。埋土は黒ボク粒，黄褐色火山灰土粒及び砂岩粒を多量に含む灰褐色粘質土であった。出土遺物には土師器片1点，土師質土器片8点，青磁片1点がみられ，土師質土器(368)1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.74－368)

杯で，口径9.9cm，器高3.5cm，底径6.1cmを測る。口縁部は外上方に上がる体部から若干反り，端部を丸く仕上げる。底部は若干中窪みとなり，外面は回転糸切りである。他は回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加える。

第Ⅴ章　考察

本章では，今回の調査で確認された弥生時代から近世に至る遺物と遺構から上美都岐遺跡の存続時期と性格について時代を追って考察し，最後に周辺部の遺跡をも含めその消長をみてみたい。

1. 弥生時代について

遺物は後期後半を中心に出土し，その分布は概ね調査区南半分に集中していた。今回の調査区は遺跡全体から見れば北西部に位置するものと考えられ，弥生時代の遺構が竪穴状遺構1軒，土坑8基，ピット2個と少なかったのもその辺に起因したのではなかろうか。また，南部からは1基であったが，後期初頭と考えられる土坑（SK−1）を確認することができた。佐川地区では当該期の遺跡は確認されておらず，弥生時代の消長を考える上で貴重な資料となっている。

まず，SK−1は長辺が1.95mと比較的小規模な舟形土坑で，底面中央部には1個の柱穴とみられるピットを設けており，簡易な被いがなされていたものと考えられ，貯蔵用の土坑であったものとみられる。出土遺物は甕（Fig.30−216）1点のみであるが，口縁端部が凹線文の退化した擬凹線文となっている点，胴部内面にヘラ削りが施されている点などから後期初頭に位置付けられよう。遺物包含層中には当該期の遺物はほとんどみられず，全体像は不明確ではあるが，土坑1基が単独で存在するとは考え難く，当該期の住居は調査区の南側に存在するものと推察される。

遺構・遺物の中心は後期後半のもので，集落が県内一円に拡がった時期でもある。斗賀野盆地に限ってみても調査した遺跡のすべてから当該期の住居跡[(1)]が確認され，中でも二ノ部遺跡はその中心的な集落であったものとみられる。当遺跡でも南部を中心に多くの遺物が出土しており，比較的規模の大きな集落を構成していた可能性が考えられる。遺物量に比べ遺構数が少なかったのは前述のとおり遺跡の中心から外れていた点と後世の遺構による影響もあったのではなかろうか。一方，酒津式とみられる45（Fig.14）のような搬入品がみられるのもこの時期の特徴として挙げることができよう[(2)]。

確認された遺構をみてみると，ST−1はA区中央部西端，位置的には斜面中央部に単独で設けられている。一般の住居跡に比べ約半分以下の規模であるが，長軸の北側約三分の一にはベット状遺構を伴う。その西側では確認されなかったが，北壁沿いに設置されていたものと考えられる。支柱穴の可能性のある柱穴を3個確認しているが，先述のとおり2本柱あるいは1本柱で棟を支えていたのか判然としない。ただし，構造的には2本柱で棟を支えていたと見る方が適切と考えられる。また，柱穴は掘り換えがみられ，建て替えが行われたものと判断される。ともかく，小規模なものでかつ簡易な造りとなっており，恒常的な住居とみるよりか仮設的なものと見た方が良さそうである。ST−1と切り合っているSK−3並びに隣接するSK−4は出土遺物を見る限り大きな時期差はなく，同じ後期後半の範疇で捉えることができよう。また，SK−2はA区南部で検出された単独の土坑で，比較的多くの遺物がまとまって出土しており，祭祀的な様相の強い土坑とみることも可能である。B区で検出したSK−5・8は共に長さ4m前後の舟形土坑で，タタキ目を持つ同系統の土器が出土しており，同時期のものと考えられるが，それぞれ単独での検出であり貯蔵用とみられるものの関連性を示す資料は確認されなかった。なお，点数は少ないが古墳時代後期とみられる器台

(Fig.18−113)，甕(Fig.18−115)の破片が遺物包含層から出土しており，古墳時代の遺跡がほとんど確認されていない佐川町にあってその実態が注目される。

2. 古代について

確認された遺構としては，掘立柱建物跡1棟，塀跡4列，土坑2基，ピット2個がある。この時期の遺構も調査区南半分にみられ，様相的にはそれまでの遺構分布と大きな違いはみられない。一方，遺物からみると，白鳳期の遺物も少なからず出土しており，当該期の遺構が存在することはほぼ間違いないであろう。特に，白鳳期の須恵器は香我美町徳王寺窯跡，野市町曽我遺跡・深渕遺跡，南国市土佐国衙跡・国分寺跡，春野町福市遺跡[3]など限られた遺跡で出土しており，官衙または寺院との関連が考慮される。今回の遺物は遺構との関連を明示するものはみられず，その様相は推測の域を脱しないものの後述する官衙関連の建物跡などの存在からみれば当該期に何らかの施設が設けられていたことも考えられよう。また，その生産についても町内には8世紀後半から9世紀にかけての佐川古窯址群[4](花ノ木・襟野々・円能ケタキ・堂ヶ鼻窯跡)が当遺跡の北東2km前後で確認されており，その開始時期が7世紀後半に遡る可能性も出てきた。須恵器窯跡は高岡郡ではこの佐川町と土佐市[5]で確認されているのみで，原材料の調達に適していたこと以外に古代律令制における重要な土地であったことも考慮されよう。

さて，今回確認した掘立柱建物跡と塀跡は，柱穴の掘方からみれば一般の集落の範疇のものではなく，また遺物包含層からの出土ではあるが刻書土器(Fig.19−20)や円面硯(Fig.18−114)などの存在を考え合わせれば官衙関連施設の一部であったと判断した方が妥当であろう。試掘調査の際，すでにSB−1の東妻柱の北側の柱穴2個を確認しており，さらに多くの建物跡の存在が予想されたものの本調査では塀跡2列を新たに確認したに留まったことは，その中心が南側に所在する可能性をさらに強めるものとなっている。また，地名からも「コクガ領」(Fig.1)の存在や「上美都岐」の「美都岐」が「貢物をした地」から転化したという説もあり少なからず古代官衙との関連が推察される。

具体的に建物構成をみてみることにする。まず，SB−1は2×2間の総柱建物であることから倉庫とみられ，南に隣接するL字塀SA−3は柱穴の掘方が異なるものの方向並びに位置関係からみてSB−1に関連したものではなかろうか。両遺構とも時期を決定し得る遺物はみられないが，棟方向や柱間寸法にばらつきがみられることから8世紀段階のものではなく9世紀の範疇で捉えた方が良さそうである。SA−1・2については当然その切り合い関係上2時期が想定され，その方向も約6度違っており，時期差が認められるものの両塀跡とも柱間寸法が比較的揃っていることを考慮すれば，SB−1より遡る可能性が考えられるのではなかろうか。出土遺物には混入した弥生時代後期後半の土器が多くみられるが，時期を決め得る土師器は細片で明確にし得なかった。ただし，注目されるものとして鉄滓の出土を挙げることができる。周辺部には製鉄関係の遺跡は知られておらず，当遺跡に関連の遺構が存在した可能性も考慮される。これら以外の遺構では，B区で検出したSK−10からは10世紀前半のものとみられる円板状高台(ベタ高台)で回転ヘラ切り底の土師器が出土しており，当該期の遺構の存在も確認された。

このように古代においては，白鳳期，8世紀後半以降10世紀頃までのものがみられ，後述する12世紀後半の遺構の存在からこの間を埋める遺構・遺物の存在も考えられ，周辺部の状況が注目される。

3. 中世について

この時期の遺構はA区全域とB区中央部を中心に認められ，古代より分布範囲が拡がっている。遺物では12世紀後半の青磁(Fig.22−184)や12世紀末から13世紀初頭の東播系須恵器(Fig.21−169〜172)などから15世紀代の常滑焼(Fig.21−175)までが出土しているが，その中心は12世紀後半から13世紀の範疇で捉えることができ，遺構もほぼこの時期におさまる。この時期の遺構としては掘立柱建物跡4棟，塀又は柵列跡2列，溝跡7条，畝状遺構5条，柱穴とみられるピット22個などを確認している。この内，A区西端部を南北にのびるSD−1はその設置された位置からみて西側の区画をなす溝とみられ，さらに南部で検出されたSD−4･5との関連が考慮される。また，SD−2･3はそれぞれコの字状を呈していることから何らかの施設の区画をなしていたものとみられ，かつSD−3はSD−1と繋がっている可能性もある。まず，比較的多くの遺物が出土しているSD−3についてみてみると，瓦器(Fig.44−265〜271)は方量の縮小化傾向と器高が低くなる点，連結輪状や見込の平行線状のヘラ磨きが減少している点などからⅢ期の後半[6]に位置付けることが可能で，12世紀末から13世紀中葉の範疇で捉えることができ，青磁(Fig.44−272)は内面に劃花文がみられる龍泉窯系のものでD期[7]に該当し12世紀中頃から後半に位置付けられる。また，石鍋(Fig.44−275)は鍔を欠くがⅢ類[8]のaないしbに該当するもので時期的には12〜13世紀に位置付けられる。このようなことからSD−3は12世紀後半から13世紀中葉に機能していたものと考えられよう。SD−1･2からは時期を決定付ける遺物は出土していないが，埋土が同じ灰黒色粘質土を基調とする点並びに位置関係からほぼ同時期の範疇で捉えることができるのではなかろうか。ただし，それぞれ切り合いもみられることから時期差を考慮する必要もあり，切り合い関係からSD−2がSD−1･3に先行するものとみられる。

確認できた4棟の建物跡の内，SB−3は総柱建物で倉庫とみられ，出土遺物の瓦器は先の形態を呈し，SD−1と平行に設置されていることを考え合わすと当該期のものと考えることができる。SB−2･4は間仕切り柱の建つ建物で，SB−2はSB−3同様SD−1に平行するものとみられ，かつSD−3の内側に位置することから同時期に捉えることができる。一方，SB−4はSB−3と重なり，かつ棟方向を異にする点から時期差が看取されるが，出土遺物をみる限り大きな時期差はみられず，先の時期の中で考える必要があろう。ただし，その中でも新しい段階に位置付けられよう。また，B区で確認したSB−5はピットが集中する中央部で確認した建物で，区画の外の建物として位置付けられ，柱間距離，柱穴にばらつきがみられる。

遺物では，ピットから出土した中に在地産の土師質土器と瓦器が伴出したもの(Fig.46−284〜287〈P−5〉，Fig.46−290･291〈P−8〉，Fig.46−299〜302〈P−16〉)がある。瓦器はすべて先述の形態を呈するもので，土師質土器(杯，皿)はやや器壁が厚く，口縁部が開き気味で端部を丸く仕上げ，底部外面は回転糸切りとなっている。これらは12世紀末から13世紀中葉を特徴付けるものとみられ，編年の一つの目安となろう。また，今回出土した瓦器は，基本的には和泉型に属するものとみられるが，中には器壁が厚く，炭素の吸着が不十分で内面がにぶい黄橙色を呈するもの(Fig.47−295)もあり，搬入品とは考え難い。土佐市犬ノ場遺跡[9]でも同様な瓦器が出土しており，当該期には在地産の瓦器が存在した可能性が強いのではなかろうか。黒色土器の在地生産も示唆されている[10]現在，瓦器についても同じことが言えるのではなかろうか。

このように中世では12世紀後半から13世紀にかけての遺構･遺物がみられ，先行する11世紀のものは確認されなかったものの古代からの関連もありそうで，周辺部の調査が期待される。実際この時期の遺構は古代からの繋がりが強かったではなかろうか。土佐国衙跡などでは古代から鎌倉期にかけての遺構･遺物が連続してみられる[11]。

4．近世以降について

この時期に属する遺構が最も多く，A区ほぼ全域で認められた。確認された遺構には，掘立柱建物跡10棟，塀又は柵列跡13条，土坑33基，溝跡4条，ピット13個などがある。これら遺構は検出状況並びに遺物から17世紀前後と18世紀後半以降の二時期に大きく分けることができる。17世紀前後のものは砂目，胎土目が残る肥前系陶器[12]に代表されるが，良好な出土状況を示すものはない。ただし，SB−12などは第Ⅲ層を除去した時点で検出されており，この期に該当さすことができよう。SB−13も出土遺物はないが，柱穴規模と棟方向がSB−12とほぼ同じであることから同時期と考えることができよう。遺構の大半は18世紀後半以降とみられ，径40〜50cmのしっかりした円形の柱穴で構成された建物跡や塀跡がそれに当たり，切り合い関係がみられることから数時期の変遷もあろう。この時期のものはSE−1を中心に，A区ほぼ全域に分布し，特に北半分に集中する。中でも，SB−7〜10·14は柱穴も比較的大きく，掘方もしっかりしており，SB−9·10には庇が付く。それぞれ，地形に沿った棟方向を示すが，溝跡SD−9〜11の配置などからみると大きく，SB−7·8，SB−9·10，SB−14·15の三つのグループに分かれそうである。これらは一般の住居とみられるが，中央部のSB−9·10は庇を持ち，やや異なる形態を取っている。ただし，井戸が1基であることを考えれば，共有井戸とみることができ，それぞれ繋がりを持っていたと推察される。また，これら建物には，底面壁沿いに溝状の落ち込みの巡る円形の土坑が数基単位で付属したものとみられる。性格は判然としないが，溝状に巡る落ち込みは桶状のものを設置していたために残ったのではないかとみられ，貯蔵穴あるいは便所[13]として使用されたのではなかろうか。これら建物や土坑とには重複関係がみられることからそれぞれに時期差があるものと考えられる。

このように出土遺物や検出状況から二時期に大きく分けることができるが，明らかに明治以降とみられる遺構もあり(SK−31〜33)，近代になっても耕作地としてではなく，居住地の一部として使用されていたようである。

5．結語

叙上，上美都岐遺跡について時代を追ってみてきたが，弥生時代以降，幾度かの空白時期はあるものの現在に至るまでの各時代の様相が垣間見れる。概略すると以下のようになろう。

弥生時代後期初頭，初めて居住空間となり，後期後半に集落としての外観を形成したものとみられ，古墳時代になって他の遺跡同様集落の移動がみられる。次に，明確な遺物がみられるのは白鳳期になってからである。古代には単なる集落としてではなく官衙的要素が看取され，この付近の中心的な役割を担った施設が設けられていたのではなかろうか。郷家を裏付ける資料はみられないが，地方の一官衙として存在していたと考えられる。須恵器窯を管轄していた可能性もあろう。引き続き鎌倉期には敷地を区画する溝跡や多くの搬入品は中山間地域の一拠点として機能していたことを示しているのではなかろうか。しかし，岩井口遺跡にみられる在地領主の館[14]が形成されるようになるとその痕跡は途絶えるようになる。再び，居住空間となるのは近世になってからであり，多くの痕跡を留めるのは18世紀後半以降である。20世紀以降は居住空間としての痕跡はほとんど留めず，耕作地に変容し今日に至る。

一連の工事で岩井口遺跡を皮切りに斗賀野地区に所在する四つの遺跡[15]の調査を行い，佐川町の歴史の空白を埋める資料を数多く得ることができた。しかし，これはやむなく行われた調査であり，文教の町足るには計画的で弛まない文化財行政も必要であろう。この数年間に地元の方々にも遺跡に対する認識

が芽生えたのではないかと思われる。高吾北の中心として文化財を保存，啓蒙して行くには文化財担当者の熱意以外にはなかろう。姉妹町である北海道常呂町の文化財に対する取り組みとは大きな開きがあり，それを埋めるにも今後の文化財行政に期待したいものである。

最後に，発掘調査において高知県中央耕地事務所，佐川町斗賀野土地改良区事務所並びに地元関係者の方々には多大な御理解と御協力を頂いた。改めてここに厚くお礼申し上げる次第である。

註

(1) 廣田佳久『岩井口遺跡　二ノ部遺跡・城跡』佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書　佐川町教育委員会　1995.3
廣田佳久『岩井口遺跡Ⅱ』県道本郷・斗賀野停車場線改良工事に伴う発掘調査報告書　佐川町教育委員会　1995.3

(2) 廣田佳久「周辺地域における土師器の様相－1.南四国の古式土師器」『研究紀要』第1号　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1994.3

(3) 廣田典夫『土佐の須恵器』　1991.5
廣田佳久「南四国の須恵器－周辺地域における須恵器の変遷－」『王朝の考古学』　雄山閣　1995.2

(4) 廣田典夫「原始・古代」『佐川町史』上巻　佐川町　1982.11

(5) (3)に同じ

(6) 尾上　実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995.12

(7) 山本信夫「貿易陶磁〔2〕中世前期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995.12

(8) 木戸雅寿「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995.12

(9) 『平成8年度　土佐市バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　犬ノ場遺跡第Ⅱ調査地区』記者発表及び現地説明会資料』　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997.1

(10) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』　土佐山田町教育委員会　1990.3　及び(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 松田直則氏と(財)京都市埋蔵文化財研究所 百瀬正恒氏より指摘がある。

(11) 『土佐国衙跡発掘調査報告書』第1～6・8～11集 高知県教育委員会 1980～1986・1988～1992
『土佐国衙跡発掘調査報告書』第7集 南国市教育委員会 1987
廣田佳久「土佐国衙跡の調査研究の現状と課題」『考古学の諸相』 坂詰秀一先生還暦記念会　1996.1

(12) 大橋康二「肥前陶磁」考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社　1989.10

(13) 『高知県史』民俗編　高知県　1978.3　及び高知県立歴史民俗資料館 梅野光興氏の教示による。

(14) (1)に同じ

(15) 岩井口遺跡，二ノ部遺跡，二ノ部城跡，上美都岐遺跡

Tab.6 近世以降土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			長軸方向 (Nは真北)	時期	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK−27	方形	2.00以上	1.68	0.31	N−80°21′−W	近世	
SK−28	円形	1.64		0.69		〃	
SK−29	隅丸方形	1.14	1.08	0.16	N−28°49′−E	〃	
SK−30	不整円形	1.74	1.63	0.42	N−12°16′−E	〃	
SK−31	円形	1.82		0.47		近世以降	
SK−32	〃	1.52		0.65		〃	
SK−33	不整楕円形	2.14	1.78	0.73	N−4°17′−E	〃	
SK−34	円形	1.52		0.08		近世	
SK−35	不整楕円形	1.68	1.34	0.28	N−1°8′−E	〃	
SK−36	〃	1.58以上	1.21	0.06	N−78°41′−E	〃	
SK−37	方形	2.61	1.20	0.26	N−87°51′−W	〃	
SK−38	〃	2.12	1.20	0.30	N−12°41′−E	〃	
SK−39	〃	1.60	1.48	0.52	N−2°52′−E	〃	
SK−40	不整楕円形	1.28	0.97	0.53	N−66°34′−W	〃	
SK−41	方形	2.99	2.25	0.34	N−30°28′−E	〃	
SK−42	〃	2.36	1.50	0.37	N−88°3′−E	〃	
SK−43	〃	2.23	1.33	0.53	N−89°13′−W	〃	
SK−44	〃	1.45以上	1.66	0.43	N−79°48′−E	〃	
SK−45	〃	2.58	1.33	0.52	N−77°3′−W	〃	
SK−46	不整楕円形	2.67	1.56	0.18	N−86°34′−W	〃	
SK−47	不整円形	1.71	1.60	0.06	N−89°5′−E	〃	
SK−48	円形	1.50		0.42		〃	
SK−49	〃	1.81		0.29		〃	
SK−50	〃	1.95		0.30		〃	
SK−51	〃	1.80		0.25		〃	
SK−52	方形	3.56	3.00	0.13	N−14°2′−W	〃	
SK−53	〃	10.20	4.40	0.12	N−16°37′−W	〃	
SK−54	円形	1.45		0.49		〃	
SK−55	〃	1.48		0.55		〃	
SK−56	〃	1.42		0.29		〃	
SK−57	〃	1.62		0.15		〃	
SK−58	〃	1.42		0.22		〃	
SK−59	〃	1.60		0.50		〃	
SK−60	不整楕円形	0.87	0.72	0.10	N−33°41′−W	〃	

図　版

調査前全景(西より)

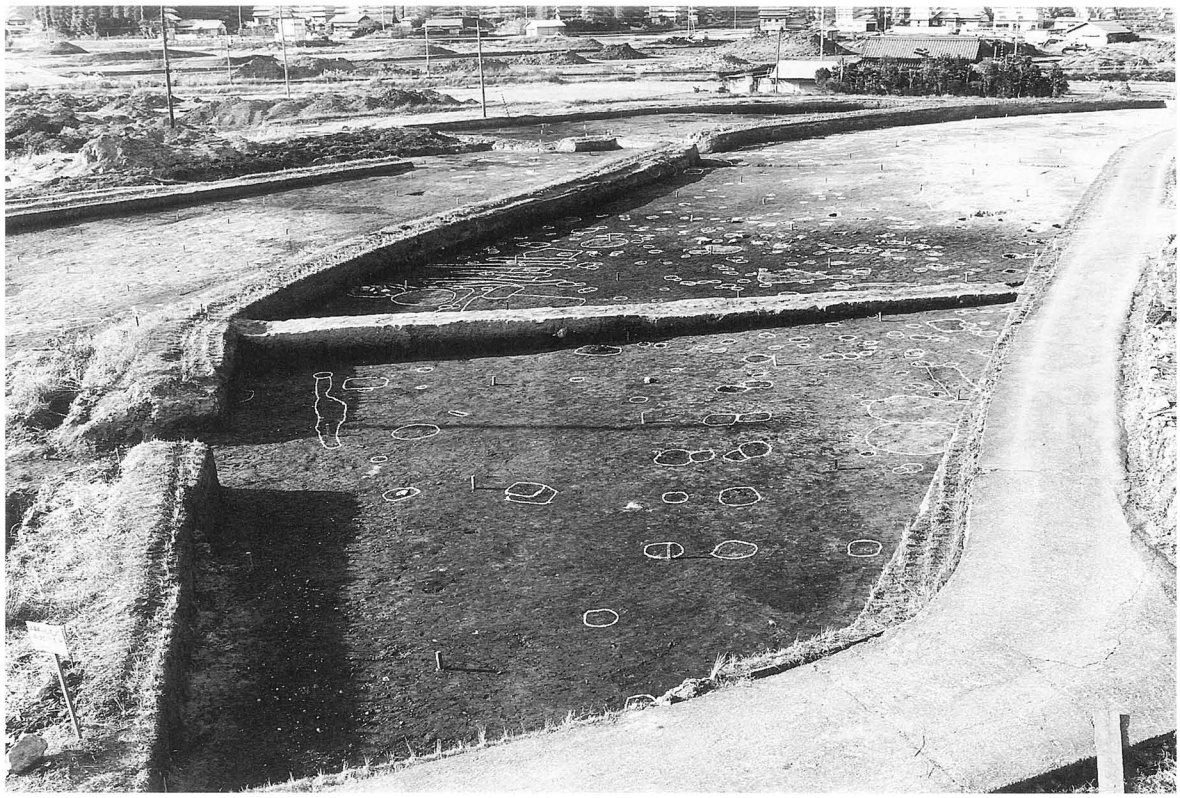
調査前全景(西より)

調査前A区全景(南より)

調査前A区全景(北より)

A区第Ⅳ層上面遺構検出状態(南より)

A区第Ⅳ層上面遺構完掘状態(南より)



A区遺構検出状態(南より)

A区遺構完掘状態(南より)

A区遺構検出状態(北より)

A区遺構完掘状態(北より)

A・B区遺構検出状態（南より）

A・B区遺構完掘状態（南より）

調査区遺構完掘状態(南上空より)

調査区遺構完掘状態(西上空より)